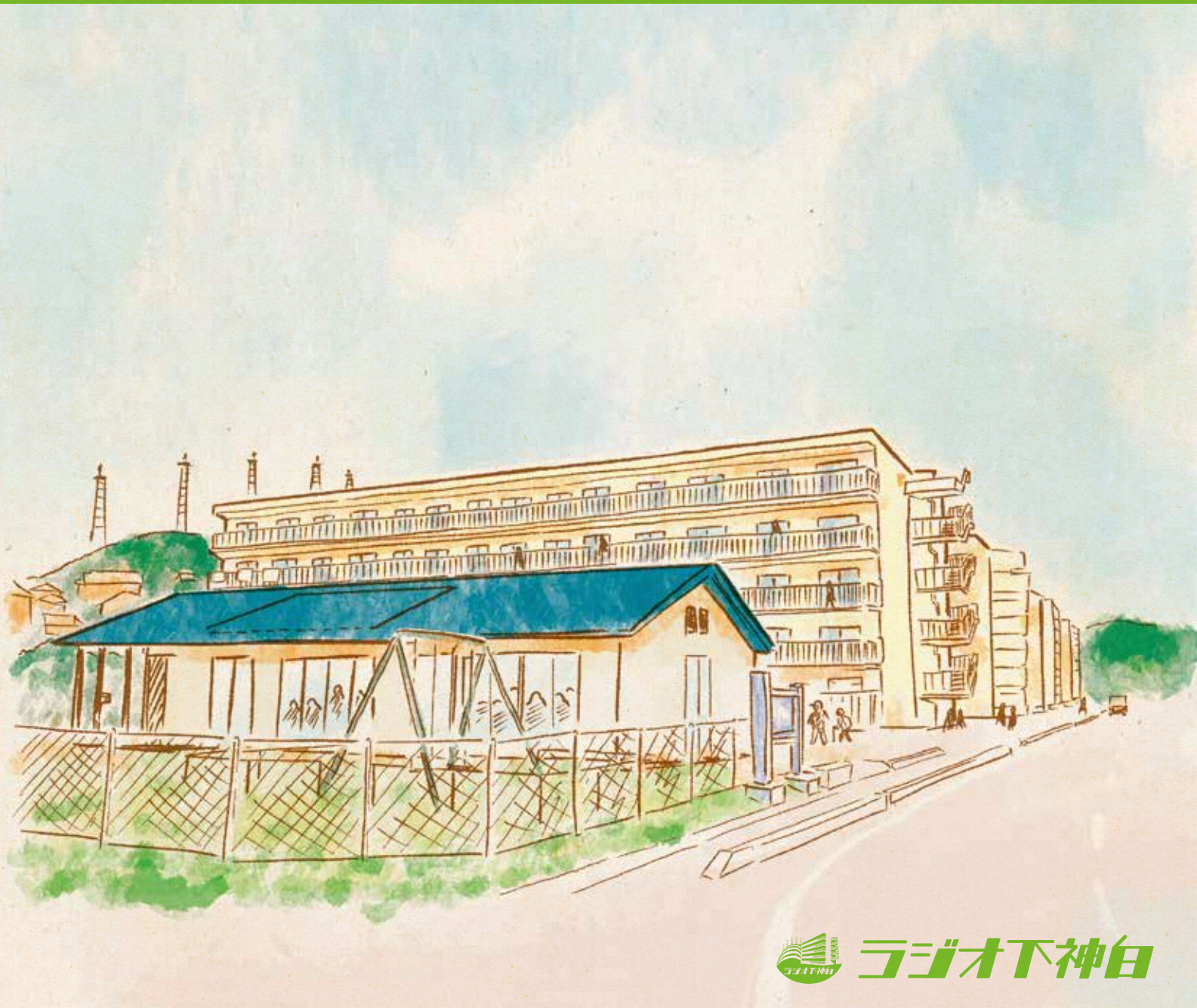


あのとき
あのまちの音楽から
いまここへ 2017 - 2019



オープニング

こんにちは、『ラジオ下神白』へようこそ

2017年から、福島県いわき市にある「福島県復興公営住宅・下神白団地^{しもかじろ}」で、ラジオをはじめました。この番組を録音したCDでは、住民のみなさんのまちの思い出とともに、その当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けしています。これまでの活動をまとめた一冊、どうぞお楽しみください！

文化活動家／『ラジオ下神白』ディレクター

アサダワタル

活動内容



1 運営チーム

大阪出身・東京在住のアサダワタル、八戸発いわき着の漁業娘「りんごちゃん」こと榎 裕美、いわき市生まれいわき市育ち「しおちゃん」こと鈴木詩織を中心に、地元や東京からさまざまなメンバーが集っています。事務局は、一般社団法人Tecoが行っています。



2 思い出をインタビュー

住民のみなさんのお家を訪ねて、まちや人生の思い出について聞かせていただいています。当時の馴染み深い音楽をかけながら、子供の頃の記憶やご夫婦の馴れ初め話が弾んだり、ときおり震災や戦争の経験についての話が出ることも。



3 CDを制作

いただいたエピソードは、思い出の曲とともに一枚のCDにして、一軒ずつご自宅にお配りしています。CDを入れる封筒づくりや封入は、住民のみなさんと手作業で行っています。2020年3月現在までに、第1～6集をリリース。第7集も制作中です。



4 リクエストを募集！

これまで集まったリクエストカードは、計50枚。なかには一枚に何曲も書き込んでくださった方もいて、リクエストは63曲を超えました。集会所の入り口にある「黄色いポスト」が目印。実は、元大工の住民さんによる手づくりです。



ラジオ下神白

あのときあのまちの音楽からいまここへ
2017 - 2019

もくじ

- 1 オープニング こんにちは、『ラジオ下神白』へようこそ
- 2 下神白団地とは
- 3 もくじ

2017年

- 4 第1集「常磐ハワイアンセンターの思い出など」
- 12 第2集「あの頃の仕事 家族の風景」
- 22 下神白団地の2017年／4町(富岡・大熊・浪江・双葉)の2017年

2018年

- 24 第3集「2017年リクエスト総集編」
- 26 第4集「海の上で捕まえたあの風景」
- 40 「REC⇄PLAY ある復興団地の「声(風景)」をなぞる
ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまここへの報奏会」
- 54 下神白団地の2018年／4町(富岡・大熊・浪江・双葉)の2018年

2019年

- 56 第5集「変化と連なり さよならのかわりに」
- 72 第6集「歌とともにある人生」
- 86 下神白団地の2019年／4町(富岡・大熊・浪江・双葉)の2019年

- 88 『ラジオ下神白』の歩み 2017-2019

- 91 エンディング 声をなぞるから声を奏でるへ
- 92 「ただそれだけ」のことから広がる関係性 榊 裕美
- 94 「震災」と距離を置くこと 鈴木詩織
- 96 高原タケ子さんという存在、私たちのこれから アサダワタル



下神白団地とは

「福島県復興公営住宅・下神白団地」は、東京電力福島第一原子力発電所事故の避難者が入居しています。道路を挟んで隣にある「いわき市災害公営住宅・永崎団地」は、津波による被災者が入居。震災前の居住地によって、被災状況や賠償金の違いなど、さまざまです。下神白団地の入居がはじまったのは、2015年2月。『ラジオ下神白』がスタートした2016年12月時点では、居住者の大半が65歳以上でした。

2015年の居住世帯

合計 **200** 世帯
入居率100%

1号棟 富岡町 35世帯	2号棟 富岡町 45世帯
3号棟 大熊町 35世帯	4号棟 浪江町 35世帯
5号棟 浪江町 25世帯	6号棟 双葉町 25世帯

常磐ハワイアンセンターの思い出 など

収録日 2017年2月27日 会場 下神白団地集会所



常磐ハワイアンセンターの思い出など

第1集に登場するのは、こちらの6名です。眠れない夜に、どうぞゆっくりご覧ください。

聞き手



アサダワタル



会田勝康
(NPO法人 Wunder ground)



江尻浩二郎

語り手



佐山弘明さん



佐山かをるさん



渡部茂子さん

オープニング

アサダ 下神白団地の住民のみなさん、こんにちは。『ラジオ下神白』へようこそ。

このCDでは、下神白団地の住民のみなさんのまちの思い出とともに、その当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けしていきます。

第1集は、浪江町ご出身の佐山弘明さん・かをるさんご夫妻。同じく浪江町ご出身の渡部茂子さんのお三方がゲストです。それではどうぞお聴きください。

エピソード1 佐山ご夫妻の場合

アサダ ずっと浪江にいらっしゃったんですか？
20代の頃に別のまちに行ったことってありました？

弘明 私は高校卒業後から出稼ぎしました。
アサダ 出稼ぎ。

弘明 転勤族だったんで。

アサダ どちらに行かれてたんですか、佐山さん。

かをる 銀行だよ。

弘明 うん、銀行に入ったんで。

かをる 7か所ね。

弘明 あ、7か所か。大津、植田、小川、土浦駅前、佐貫、小名浜、原町、平……8か所か。

茂子 そんなに。単身赴任させなかったのかをる しなかった。

弘明 ふたりで一緒に。

かをる だから、子供はふたりとも小学校は三つ。

茂子 苦労したのにいい子よね。よく育ったね。一同（笑）。

茂子 と、私は思うけど、素直でね。

かをる 素直でもないんだけど。ぐれずにいてくれたから、まあいいかなみたいなの。

アサダ 当時流行ってた曲って、覚えてますか？
かをる 都はるみかな。『北の宿』からだったよ

うな気もする。あとは何だっけ？

弘明 銀行に入った頃のこと、ごちゃごちゃになってるんだよね。

会田 ほかの思い出と？

弘明 はい、歌でも。

茂子 グループ・サウンズ時代かな？

弘明 グループ・サウンズは、ちよつとあと。

一番あれなのは、グループ・サウンズでもだいたい終わりの頃だから……。

かをる ザ・タイガース。

アサダ ザ・タイガースとかね。

弘明 ザ・タイガーズが小学校か中学校の頃だから……。

会田 そのあと沢田研二。

アサダ 沢田研二。うん、そうそうそう。

弘明 うん、沢田研二が出てきたときで、さつき言ったように、ベンチャーズなんていうのは、その頃だんだん日本にきてた頃で。俺が高校の頃に、あれか、『京都の恋』が流れてたね。

アサダ 『京都の恋』って、誰の曲ですか、それは。

弘明 誰だ？ あのベンチャーズが作曲した曲。かをる なんとかゆう子。

収録内容

- ① オープニング

② エピソード1／佐山ご夫妻の場合

3. 楽曲1／渚 ゆう子『京都の恋』

4. CM1／ロート目薬

⑤ エピソード2／佐山弘明さんと常磐ハワイアンセンター

6. 楽曲2／平山三紀『真夏の出来事』

7. CM2／大黒屋

⑧ エピソード3／渡部茂子さんと常磐ハワイアンセンター

9. 楽曲3／大津美子『ここに幸あり』
10. CM3／ペプシコーラ

11. お知らせコーナー／カフェ下神白 渡辺貫一マスターへインタビュー

⑫ エピソード4／渡部茂子さんと東京オリンピック～浪江町の喫茶店

13. 楽曲4／山本リンダ『こまっちゃうナ』

⑭ 振り返り／～これからのこと

⑮ エンディング

16. 番外編1／佐山弘明さんの人生談

17. 番外編2／佐山かをるさんの人生談

18. 番外編3／渡部茂子さんの人生談

弘明 渚、じゃない？

かをる 渚ゆう子？

弘明 渚ゆう子だ！

アサダ それでは改めて聴いていただきましょう。

佐山ご夫妻が出会った当時の流行歌で、昭和45年のナンバー、渚ゆう子で『京都の恋』です。どうぞ！

エピソード2 佐山弘明さんと常磐ハワイアンセンター

弘明 高校の頃かな、一番先にレコードを買ったのは……。

アサダ あ、それは聞きたい、それ聞きたい。

弘明 平山三紀の『夏の日』の思い出（真夏の出来事）』だっけ？

アサダ ああ、ありますね。

弘明 あれはね、ハワイアンセンターに来たときに買ったんだよ。

かをる へえ。

アサダ え、どちらで？

茂子 ハワイアンセンター。

アサダ ハワイアンセンター。あ、常磐ハワイアンセンター。

弘明 昔の。

会田 ハワイアンセンターの頃ですね。

弘明 平山三紀がハワイアンセンターに来たのよ。それはたぶん、中学校3年か高校1年だと思っんだよ。

アサダ 『真夏の出来事』ですよ。

かをる そうだね。

弘明 それを何人かで観に行つて。

茂子 ねえ、すごくいいね。

かをる いい、いい。

弘明 でも、レコードは買ったんだけど、プレーヤーはねえんだよ（笑）。

一同 （笑）。

茂子 なんかわかるよお。

アサ多 気持ちだけ先走つて。

弘明 で、（プレーヤー）持つてるところに行つたのよ。で、なんでか売つてたんだよな。で、何にも知らずに買ったんだよな。

会田 商売がうまいな。

アサ多 うまいですね。

かをる いまだつてね、ライブとかそういうのをやればね、売つてますもんね。

アサ多 売つてますね、確かに。

かをる で、握手。買つたら握手してくれるとかね。

弘明 そうそうそうそう。

かをる サインしてくれるとかね。

アサ多 そう考えたら、AKB的なものの原形があんまり変わつてないっていう、実は。

◇

アサ多 それでは、聴いていただきましょう。佐

山弘明さんが初めて買ったレコードの曲。しかも、常磐ハワイアンセンターで購入されたレコードだそうです。昭和46年のナンバー。平山三紀で『真夏の出来事』。それ

では、どうぞ。

エピソード3

渡部茂子さんと常磐ハワイアンセンター

アサ多 ハワイアンセンターでコンサートは、茂子さんも観に行つた覚えがあります？

茂子 コンサートはあれだけど、『ここに幸あり』のあの人のだけは見たな。

アサ多 誰だ？ 『ここに幸あり』。

茂子 ええつと（笑）。

アサ多 『ここに幸あり』か。聞いたことあるぞ。

茂子 名前は、青山、じゃない……。

かをる 青山？

茂子 ええつと。

かをる 青山和子？

茂子 じゃない、違うな。

かをる 違う？

茂子 違う。もう年も忘れない。

かをる 大津美子？

茂子 あ、大津美子！

弘明 歌手で歌聴こうつていたら、ハワイアンセンターしかなかったもんな。

アサ多 そうなんだ。

弘明 あとは年に1回、招待券が。

茂子 あとはさ、公民館とかあいうふうな場所に来て。

アサ多 はいはいはいはい。

茂子 中学校とか、それしかなかったな。

弘明 だから、ハワイアンセンター行くと全然違うつかよ。

茂子 うん、そうね。

弘明 聴く雰囲気もよ。

茂子 サーカスが来たりとか、いろんなね。

弘明 いろんなことやるの。

アサ多 なるほど。

弘明 で、日曜日に特別にこう、売れる人が来るぞっていう。あと、安い人が。だから、早く行かねえと、観るいうても入れねえとか。そんなのがあつたような気がするな。

アサ多 当時はこういうコンサートって満席だったんですか？ 結構もう人いっぱい？

弘明 ハワイアンセンターは、いっぱいだったような気がするな。

かをる ハワイアンセンターはたぶん……。

茂子 いっぱいだね。ホテルやなんかも……。

弘明 ホテルもあつたし。

アサ多 あ、泊まれるし。

茂子 だから、そこから行く人もいたね。結婚式場もあつたよ。

弘明 ハワイアンセンターに連れてつてもらうつていうのは、年に何回かの話で。

アサ多 やっぱまあひとつの夢なんですな、当時の子供たちの。

茂子 何回もないね、それは難しいね。

会田 茂子さんとかがハワイアンセンターに、若かつた頃に遊びに行く機会つて、どんなタイミングが？

茂子 やっぱり何か家族での旅行みたいなときにね。近くに泊まつて、それで途中でハワイアンセンターに寄る。あとはこどもの日なんていうと、結構ね。うちらPTAの役員なんかやつてたから、必ず。

かをる 子供会の行事なんかでどこかへ連れて行くつていうのは、ハワイアンセンターがいい。ご飯連れてつたりね。

茂子 うん、決まつてる。

アサ多 で、もう子供たち、それが楽しみでしょうがないみたいな。

茂子 だいぶ、10違いますからね、この方たちとはね。

アサ多 そつか。

茂子 海に連れて行くのには、やっぱり子供ひとりに対して、大人ひとりつていうふうな。だから、よく請戸の海岸には行つたんだけど、やっぱりこどもの日はちよつと請戸が寒いつてこともあるんだけど、海とか山とかつていうのよりも、ハワイアンセンターに連れて行くほうが、一番、守りやすい。喜ぶし、雨が降つてもいいし。

アサ多 それは大きいですね、確かにね。

茂子 そういうことで、もう決めちゃつて。

弘明 請戸にはね、浪江に来たときだったっけかな、森進一が来たときに請戸に来てんだよね。

アサ多 森進一か。

弘明 森進一がね、『おふくろさん』歌つたっただけかな。

かをる あ、そうか。

会田 絶頂期ですね。

弘明 絶頂期。

アサ多 ですね。

弘明 だから、浪江の商工会であれやつて、体育館に。

茂子 体育館でやつたやつ。

弘明 やつたやつ、そうそう。

茂子 ピンク・レディーも来たしな、あの頃は。五木ひろしも来たしな。

茂子 あの曲が、何て言うの、喫茶店。あそこにラッキーパーンコ屋の前に浪江座だったっけな。

弘明 うん、あったあった。

茂子 な、あそこな。

弘明 あそこ。

茂子 あそこが喫茶店になってたんだ。そこでその山本リンダさんの曲を聴いたかな。

アサダ あ、これ、66年？

茂子 ラッキーパーンコ屋があつて、ちょっとその前に、浪江座。

弘明 浪江座つてあったな。

茂子 浪江座つていう映画館だった。

弘明 昔、浪江に映画館はふたつあった？

茂子 うん、そうそうそう。

弘明 ここに喫茶店あったんだろ？

茂子 ここにあつたか。なんかあんまり記憶ない……。

弘明 消防署つてこっちだよ。

茂子 消防署つてこっちにあったんだよな。

弘明 あそこに喫茶店ひとつあった。

茂子 いろいろ喫茶店があつて、お茶飲んで。

弘明 あと、古いのはこっちにあった。つくしなんかも。

茂子 つくしには行つた。ジュークボックス、あつたね。

アサダ ジュークボックスですよ。

弘明 あつたような気がするな。

茂子 たぶん、あつたんじやないのかな。

アサダ ありましたか。

弘明 レコード盤のだよ。

会田 はいはいはいはい。

茂子 やっぱりこれも佐山さんの時代かな。

弘明 俺の時代かもしれない。

会田 その浪江座の前の喫茶店みたいな感じで、佐山さんにも行きつけのジュークボックスのあつた喫茶店とかつてどこありましたか？

弘明 それは俺が高校の頃だもん。

会田 高校の頃？

弘明 うん。

会田 じゃあ、双高（双葉高校）の頃？

弘明 双葉にいたとき。昔よくそこでサボつたのを覚えてる。

アサダ いい思い出ですね。

茂子 授業はじまったら、下の喫茶店な。あそこはうちを貸してたんですけど、トレドつて喫茶店ね。スペインだかどつかのトレドつていう、地名ありますでしょ、それから。

アサダ 地名なんだ。

茂子 地名から取つてきて。そこにはよく集まってきました。ここは全然お酒入れない。五番館は知ってるか？

弘明 五番館は知ってる。

茂子 五番館つていう喫茶店もあつたんだよ。

弘明 俺の高校の頃ね、喫茶店じゃねえと入れなかったのよ。

茂子 そうだよな。

会田 ええー。

弘明 喫茶店つていうのは酒ないから。

アサダ なるほどね。

茂子 お酒を置かないで、ずっともう、ジャズ喫茶ね。

アサダ 音楽流れててね。

茂子 音楽、うん。トレドつていう喫茶店、うちの隣にもあつたけど、ここだけだな。残つたのは、浪江で。



アサダ では、最後の曲になります。昭和39年の東京オリンピックの時代。ラジオからテレビに切り替わり、ちょうどそのあたりに茂子さんもご主人との出会いがあつたのとことです。茂子さんのここに残っているのは、山本リンダの存在。

アサダ 昭和41年のナンバーからお届けします。山本リンダで『こまっちゃやうナ』。それは、どうぞ。

振り返り

くこれからのこと

アサダ さて、番組の最後では、収録を終えた渡部茂子さん、佐山ご夫妻のお三方の感想、そして、下神白団地で生活されてきた現在の心境についてお話ししていただきました。それではどうぞ、聞いてください。

茂子 食べ物もそうだけど、やっぱり音楽つていうのは、この震災のあと、すごく癒やされたから。それによつて、今度口を開くようになったね。やっぱり、みんな口を閉ざしたわけだし、人とも会いたくないっていう、たぶん、ほとんど100パーセントがそういうふうな状況になったと思うんだ。で、知らない土地、あちこちにいるあいだ

に、これは食べることが大事なあななんて

思つたり。でも、やっぱりこう、耳から入るもの、それで、心がちよつと癒やされて、「ああ、嬉しい」つてこう、笑顔が出るのには声も発生するよね。あと、歌が聴こえるつてことは、歌うつていう、その運動力も失つたわけだね。そのなかで、「あ、歌つてみようかな」つて、台所にいて口に出るそれはやっぱり音楽かな、といま思つておりますよ。

しかも、何でもかんでも「あれも聴いた？」聴いた、聴いた」なんてね、みんな思ひ出があるような曲ばかり。70も生きてるとね、あるよね、重なつて。どんなふうな曲が自分で残つてるんだべ。

弘明 パツと言われるとなかなか出てこないけど、耳に入つてくるとすぐ出てくるよね。

アサダ そうですね、こうやってちよつと聴いたりするとね。

弘明 音楽つていうのはそういうあれが多いかもしれないねえな。

アサダ 多いかもしれないですね。

茂子 誰のせいだつていうと、その「せいだ」つていうことを言うこと自体が、私胸が痛くなるの。だからそうじゃなくて、もういいところだけしまい込んで、そして自分どころを今度健康にしなきゃなんねえなつていうように、私考えるようになったの。

アサダ ところを健康にしていくな。

茂子 そうしていけば、笑つて、どの人もみんな、みんな、みんな大好きになれば、一人ひとりが自分で自分の考えで、しつかりと

でしょうか？

また、CDと同封されていたリクエストカードに、番組でかけてほしい曲を書いて、集会所の専用ポストに入れていただければ、リクエストにもお応えします。こちらよりお待ちしております。それでは、また次回をお楽しみに。

お届けしたのは、『ラジオ下神白』主宰の音楽家・アサダワタルでした。ありがとうございました。

第2集

あの頃の仕事 家族の風景

小野田 好・恵子さん 収録日 2017年2月28日 会場 下神白団地個人宅
横山けい子さん 官林建児さん 収録日 2017年7月3日 会場 下神白団地個人宅



ラジオ下神白



あの頃の仕事 家族の風景

第2集に登場するのは、こちらの6名です。みなさんの「あの頃」を思い出しながら、どうぞゆっくりご覧ください。

聞き手



江尻浩二郎



アサダワタル

語り手



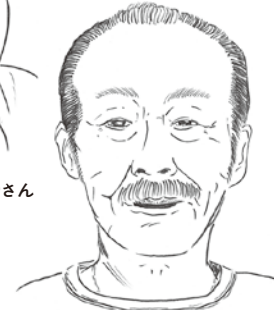
小野田恵子さん



官林建児さん



横山けい子さん



小野田 好さん

収録内容

1. オープニング
2. エピソード1／小野田恵子さんの二十歳
3. 楽曲1／西田佐知子『アカシアの雨がやむとき』
4. エピソード2／小野田ご夫妻のお仕事と出会い
5. 楽曲2／城 卓矢『骨まで愛して』
6. エピソード3／横山けい子さんのお仕事
7. 楽曲3／コール・ファーマー『青い山脈』
8. エピソード4／横山けい子さんの出会いと家族
9. 楽曲4／ベートーヴェン『交響曲第9番4楽章 歓喜の歌』
10. お知らせコーナー／みんなのみなさんにインタビュー
11. エピソード5／官林建児さんの少年時代と家族
12. 楽曲5／はしだのりひことシューベルト『風』
13. エピソード6／官林建児さんのお仕事とあの日
14. 楽曲6／水戸黄門『あゝ人生に涙あり』
15. エンディング

オープニング

アサダ 下神白団地の住民のみなさん、こんにちは。『ラジオ下神白 あのときのまちの音楽からいまここへ』司会のアサダワタルです。このCDでは、下神白団地の住民のみなさんのまちの思い出とともに、その当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けしていきます。

秋になりずいぶん涼しくなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか？

少しずつこのラジオCDも定着してきました、集会場の黄色いポストを通じてさまざまな住民の方々からリクエストをいただきました。先日は、みなさんに「ラジオ下神白通信」をお配りさせていただきましたけれども、読んでいただけたでしょうか？

さて、今回は大熊町ご出身の小野田 好さん・恵子さんご夫妻、そして富岡町ご出身の横山けい子さん、そして双葉町ご出身の官林建児さんがゲストです。

まずは小野田ご夫妻からです。それではどうぞお聴きください。

エピソード1

小野田恵子さんの二十歳

恵子 二十歳頃の歌ね。あのね、西田佐知子だよ。

アサダ 『アカシアの雨がやむとき』ですよ。

恵子 うん、そうそう。あれ、二十歳頃、私聴いてたから。

アサダ 『コーヒー・ルンバ』とか。

恵子 私もまだ二十歳頃なら、恋人もいないからね。おつかさんを思い出すわね。

アサダ そっかさっか。

恵子 ねえ、おつかさん、自分のこと思ってくれてっかなんて思うでしょう？

アサダ 二十歳の頃はもう、家は出られてたんですか？

恵子 いや、私、二十歳過ぎてから働きはじめたの。二十歳前は家にいた。農家してたから手伝ってたの。私、体弱かったから。

アサダ あ、そうなんだ。

恵子 だから、死にたい一心なんだよね。

アサダ そうなんですね。本当に体が弱かったんですね。

恵子 きょうだい7人いて、私入れて8人だから。

江尻 もともと北海道なんですか？

恵子 うん、そうそう。

江尻 あ、そうなんですか。

恵子 こっちにお嫁に来たの、福島に。

江尻 北海道のどの辺だったんですか？

恵子 上白滝だから、大雪山のそば。

江尻 ああ、じゃあ、旭川とかあつちの……。

恵子 旭川のほうだね。旭川と遠軽の真んなかだ。あそこに白滝っていうのが、5つあるの。奥白滝にね、上白滝に、白滝に、下白滝に、旧白滝って。5つあるのよ、滝（が地名に）つくところ。

好 だから、山こうなつうと、こうやってどーっと、こんなもんだもん。

恵子 いま、もう駅はなくなっただけね。ひとつ、ふたつは、あるけど。

アサダ 北海道には、20代の前半までおられたんですか？

恵子 24歳までいて嫁さんに来た。もう少しで行き遅れになるところね。

アサダ そうなんですかね。24歳くらいでしょう？

恵子 うん。25歳になったら、もう……。

アサダ いまだったら全然そんなことないけど、ちよつと時代が前だったら。

恵子 25歳になったらもう行き遅れね。田舎だから。24歳だから滑り込みね（笑）。そうですか。

アサダ 滑り込みセーフ（笑）。そうですね。



アサダ それでは改めて聴いていただきましょう、小野田恵子さんの二十歳当時の流行歌で、昭和35年のナンバー、西田佐知子で『アカシアの雨がやむとき』です。どうぞ。

エピソード2

小野田ご夫妻のお仕事と出会い

江尻 旦那さんはもともと……。

好 俺はもともと大熊。

江尻 どういうあれで、お知り合いになったんですか？

アサダ そうです、そこですよ。

好 若いときに、20人、30人くらいみんな引って張って北海道行つたの。

恵子 北海道の道をつくるんだよね、要するにね。山のなかさね。

江尻 ああ、なるほど、なるほど。

恵子 舗装の道をつくるの。お父さんはね、車に乗ってたの。えっさこらえっさこら一生懸命にやらないで、車専門にブーブー走ったりとか。

江尻 ダンプってことですか？

好 あのと、ダンプねかった。

江尻 ああ、そうですか。

好 ダンプはダンプだけど、小さいんだ。4トン車かな。

アサダ そっか、北海道で出会って。

江尻 現場で出会った？ どっか、食堂かなんかで？

恵子 あれだよな、あと、手紙3年間くらいやってたかな。

好 うん、行ったり来たり。車で歩ってるうちに、途中から乗せてあげるから、みんな。

恵子 田舎だから。この人らが映画観に行ったりするのに、隣のまちさ行くでしょう。そのときにだんだん知り合ったりね、するから。

アサダ だんだん知り合うって感じが（笑）。

恵子 友だちからだよ。

アサダ なるんだよね。

好 車さ、後ろの荷台さ、ぎっちり乗るんだから、20人くらい。

恵子 若い子たちをどーっと乗せてくる。

好 まちさ行って、みんなして。

恵子 映画観に行くんだね。

好 んだ、映画観たり。

恵子 で、私らなんてね、もうこの人らが映画

を観に、女の人やら乗せて行くでしょう。

アサダ 女の人やら（笑）。

恵子 そしたら、私らは畑をやってるでしょう、農家やってるから。それを眺めながらね、もう、あの人ら遊びに行ったのに、私らばかり、なんでこの月明かりでこんな仕事しないとなんないなんてね、情けなかったっけよ。よく情けない思いしたんだ、この人らいる頃。

アサダ そのときってどんな映画がやってたんですか？

好 何やってんべや？

恵子 あの頃夢中で、私連れてってもらうのでいっぱい。

アサダ じゃあ、内容覚えてないんだね（笑）。

恵子 映画なんて内容覚えてないね。

江尻 昭和で言ったら何年ぐらいなんですかね。アサダ 何年くらいなんかな？

好 俺、25、6のときだけんな。

恵子 私、まだ二十歳になったばかり。

江尻 っていうことは？

好 79歳だから。

恵子 結婚して50年だから。

アサダ 小林旭とかが出てきた……。

恵子 裕次郎さんのね、出てたわね、いっぱい。

好 石原裕次郎な。

恵子 なんせね、女の子やら引っ張ってくの楽しみで、あれだから、映画なんてそっちのけなんだから。

アサダ 映画は口実ですよ（笑）。

恵子 うん、そうだよね。

アサダ 何だっぺいいんだよ（笑）。

恵子 何でもいいんだよ。映画なんてそっちのけでいいんだから（笑）。

アサダ で、それで結婚して、こっちに來たのが24歳のとき。

恵子 そうそうそう。

アサダ じゃあ、出会ってから数年間やり取りされてたんですね。

江尻 戦時中の大熊あたりってのは、どんな雰囲気だったんですかね？

恵子 大熊かい？

江尻 飛行場があったんですよ。

好 あった。いまの東電のそこかな。

アサダ 大熊に飛行場あったんですか？

好 うん、飛行場だ。

江尻 東電は飛行場跡。

恵子 大熊に飛行場あったんだね。戦争中ね。

アサダ そうなんです。レコードは何を聴いてらっしやいました？

好 いっぱいあったんだけど、みんな置いてきた。

恵子 『骨まで愛して』とか、ああいうのが入ってたね。

アサダ ああ、『骨まで愛して』か。

恵子 うん。一番最初に買ったレコードは何なんて言ったらいいかわかんないな。『骨まで愛して』とか、そういうのはいっぱい持ってたから。

好 （家に）行けばまだあんだけど。あるんだ、古いの。



アサダ それでは改めて聴いていただきましたよ、

小野田ご夫妻の記憶に残っている、ご自宅にあったレコードからのナンバーです。昭和41年発売、城卓矢で『骨まで愛して』。

エピソード3

横山けい子さんのお仕事

アサダ 小野田好さん・恵子さんご夫妻のお話と当時の流行歌は、いかがだったでしょうか？

さて、続きましては富岡町の横山けい子さんにご登場いただきます。まずは横山けい子さんの若かりし頃のお仕事のエピソード。それではどうぞ。

アサダ 東京におられたのって、何歳から何歳ぐらいまでですか？

横山 私は高校を卒業してからだから、42歳まででしたね。

アサダ そうですか。そのときにコーヒー屋さん？喫茶店？

横山 うん、もう転々として。

アサダ 転々として。当時、そのコーヒー屋さんで流れてる音楽って？

横山 それが覚えてない（笑）。

アサダ でも、横山さんは『青い山脈』は、すごい印象に残ってるんです。

横山 それが残ってるんです。

アサダ 何でなんでしょうね、その『青い山脈』がばーんと残ってる感じってね。

横山 なぜなんでしょうね。わかんないんです

けど。なぜかこれだけは、もう離れないんですね、頭から。

アサダ その当時ってね、喫茶店ってひとりで行ってばったんですか？

横山 いや、お友だちと。

アサダ 当時、お友だちってお仕事仲間とか？

横山 仕事仲間みたいなときもあった。

アサダ どんなお仕事されてたんですか？

横山 仕事ですか。私ね、高校入ってから、戦争中と終戦直後だったんで、その当時敵国の言葉なんて習うことないって、そして上の人も教える必要ないっていうことで、学校で、英語できなかったんです。

アサダ はいはい。

横山 それで私は英語、しゃべりたくて。

アサダ へえ！

横山 なんかね、外国のあれに憧れちゃってね。そして、学校に行っても習わなかったからね、6年生になっても。

アサダ うん、習わしてくれませんかね、その当時はね。

横山 ええ、そのときにね、ご法度で悔しかったんです。私、その外国っていうのがあるうんだかね……。

アサダ 憧れだったんだ。

横山 憧れだったの。どんな暮らししてるんだろうっていうね。

アサダ はいはいはいはい。

横山 そして、上京してから駐留軍が家族を連れてきたって聞いて、えー！ 行ってみたかなと思っ。しゃべれないんですよ、私。だけど、行って。どんな仕事があるの、仕

横山 ええ、そうなんですね。だから、『青い山脈』は忘れられない。

◇

アサ それでは改めて聴いていただきましたよう、横山けい子さんが東京に住んでらっしゃった際、行きつけの喫茶店で好きになった曲、藤山一郎の昭和24年のヒットナンバー、『青い山脈』。今回はけい子さんのご要望もあって、特別に男声合唱団コール・ファーマーでのバージョンをお聴きください。どうぞ。

エピソード4

横山けい子さんの出会いと家族

アサ 東京から福島に戻ってこられたんですか、そのあとは。

横山 あのね、そうじゃなくて、私東京に行って、そして40歳ぐらいになっちゃったんですね。そして「お前、ひとりですつまでも何してんだ」っていうことで。

アサ なるほど（笑）。

横山 親から呼び寄せられて、そして「こういう人がいるんだけど」。嫌だつて言ったんですよ、私。ひとりのほうが自由でいいし。だけどね、渋々もう、あれになっちゃつて。そして、浪江の人なんですけど、浪江で一緒になつてしまつたんですよ。

アサ 「なつてしまつた」（笑）。旦那さんと。

横山 それがその人もね、中央大学の法学部卒業。いや、捨てたもんでもないなと思つた

けど。

アサ 立派ですよ。

横山 でも何にもしてない、ただぶらぶらしてる人だったんです。それでも話してみると、やっぱりね、話はわかるんですね。だから、いや、一緒になつてもおかしくないかな、大丈夫かなと思つて。農家の息子なんですけどね。浪江の棚塩たなしおつてところで、いま、流されてしまいましたけどね。もう亡くなつて、位牌も何にももうないんですが。

アサ ああ、そつか、浪江の方だったんだね、ご主人ね。

横山 大学を卒業してるから、自分は学問のほうで身を立てたいつて思つたらしいんですけど、遊び潰けでそんな……。

アサ 目指すは学者？

横山 何ていうんですかね、何にもしなかったんですね。でも、本やなんかはいっぱいもつてましたね、そこにありますけど。

アサ そうですか。大量に本は買つて。

横山 私らのわかんないような本がいっぱいあるんですよ。で、主人が亡くなつてしまつてから、ひとりじゃ寂しいだろうからつて、きょうだいたちにこつちに来なさいつて言われて、そして少しずつ本を運んだわけですよ。

アサ ご主人お亡くなりになつてから、ごきょうだいの縁か何かで、富岡のほうに行かれたんですか？

横山 あのね、私、もともと仙台生まれ。

アサ そうか、仙台なんですね。

横山 仙台生まれで、父親が国鉄の仕事してた

もんですから、転々として歩いて。私、もう、幼いときからのお友だちつていないんですよ、誰も。

アサ ごきょうだいも東北のいろんなところにおられるんですか？

横山 兄が亡くなつて、弟が亡くなつて、その下の弟が、いま泉にいるんです。

アサ あ、泉にいるんだ。近いですね。

横山 でも、その弟もやっぱり80過ぎると、これ（運転）もできなくなつちやつてね。

アサ まあね、車の運転も難しくなるからね。横山 ええ。だからね、危ないから自分ではないし、しようと思わないらしくて。全然来てないし、こつちから連絡もしないんですよ。

アサ うんうん、近くにはいるけどね。

横山 黙つてるときは、みんなお互いに大丈夫なんだろうと思つてるから。

アサ うんうん。

横山 やっぱりね、ときを過ごすつていうのは、しょんぼりしてつていうよりも、上を向いていかないと駄目なんですよ。

アサ 『上を向いて歩こう』か。

横山 そう、本当にね。そういう気持ちでいるから、案外どうにでもなれつていうような感じもある（笑）。

アサ 横山さんは、普段音楽とかつて結構聴くんですか？

横山 聴いてます。しょつちゅう聴いてます。

アサ 昔からクラシックが好きなんですか？

横山 そうです。東京にいたときはベートーヴェン、小澤征爾せーじさんがコンダクターのな

んかよく聴きに行きました。

アサ おお、行つてたんですか！ コンサートに。

横山 小澤さん、うん。あれには行きました。

アサ そうですか。

横山 私、レコードの一番大事にしたやつを人に貸したんですね。その貸した人が思い出せなくて。

アサ ああ、よくある話や、それ（笑）。

横山 戻つてこないんですよ。

アサ うんうん、あるある。

横山 いっぱいあつたんですけど、レコードでね。いま転々として歩いてるからもうとつくないんですけれども、あの1枚だけね。ベートーヴェンの『第九』かな……？

アサ 『第九』ですか。

横山 あれを1枚だけ残しておいたんですけど、それを誰かに貸して、そして戻つてこないんです。それつきり、あともう。

アサ やっぱり、ベートーヴェンのなかでは『第九』が好きですか？

横山 そうですね。

◇

アサ 横山けい子さんは実は大のクラシック好き。東京にいたときに聴きに行つた小澤征爾指揮のベートーヴェン『交響曲第9番4楽章 歓喜の歌』をお届けしたいと思ひます。それではどうぞ。

アサ さて、続きまして第2集最後のゲスト・双葉町ご出身の官林建児さんです。まずは、官林さんの青春時代と家族の思い出について伺いました。それではどうぞ。

エピソード5
官林建児さんの少年時代と家族

官林 小学校3年なつてから、初めてうちにテレビ入ったから。そんときに、俺、うち引つ越したんだから。

アサ そんときに、おうちを引つ越したつていうのは、ずっと双葉にはいたんですか？

官林 同じまちにいたんだけど、前のうちに道路引くことになつて引つ越したの。それが、いま、震災のあとで沈めたうちだったんだ。

アサ じゃあ、小学校とかも転校して。

官林 うん。

アサ そこからはずっと同じ家におられたんですか？ 小学校3年生のときに引つ越してからは。

官林 うんうん。

アサ 小学校とか中学校のときとかつて、官林さんはどういう子供だったんですか？

官林 いまと違つて、おとなしかった。

一同 （笑）。

アサ いまと違つてつて。

官林 やっぱり、俺、おやじが教師だったから、ボンボン育ちで育つたの。

アサ ああ、お父さん、そつか、先生だったんですね。

官林 俺おやじが教員だったから。おやじつて

で、まだその頃みんなまだ学校入んなかったけれども、制服着てるの俺だけだった。

アサ 制服？

官林 うん、こさえられたから。俺、嫌だったんだ。

アサ え、制服つていうのは、官林さんだけが学校に着て行つたんですか？

官林 なんだな。

アサ だから、いいところの坊ちゃんだったんですね。じゃあ、学校のなかでもちよつと官林さんは特殊というか、そういう子供だったんですね。

官林 まあ、中学校になつてもいじめとかあつた。

アサ いじめか。

官林 だつて、雪投げでも、俺、石ぶつけられて。小学校の頃は、そういうやつがいたんだよな。仲いい友だちといつと、ぶんなぐられたりして。だから昔もあつたんだよ。俺の時代も、そういうことが。

アサ やっぱでも、いまのいじめとかと、また全然違うんでしょね。

官林 全然違う。中学校のときは、終わるとき、反省会やつたから。いまそんなことしないべ？ 最近の学校は。

中学校なつてから厳しい先生いたんだよ。

数学の先生な。数学の先生だけど、その先生来つと、みんな「来たきた」つてこう黙ったから。そういう厳しい先生がいたのよ。いま、いないと思うんだな、そういう先生は。

アサ まあ昔はね。いまだつたら体罰とかもあり得ませんもんね。

官林 うん。宿題しないと「走つてこい！」。あとこれだから、しつぺ。あとは顔をバン。

アサ それはやっぱりいまと全然時代が違いますよね。音楽を聴き出したのは、いつぐらいですか？

官林 レコードから音楽が出てきたのは、やっぱり高校だな。いま『ひよっこ』でやってる。あれ見ると思い出すんだ。

アサ NHKの朝の連ドラでやってる。

官林 うん。ビートルズが来た頃が俺、高校生だから。

アサ ああ、そっかそっか、あれで思い出すんですね、あの時代背景で。

官林 やっぱりおもしろかったのは、グループ・サウンズだったな。

◇

アサ では官林さんより少年時代の印象に残ってる曲をリクエストいただきました。曲は昭和44年のナンバーで、はしだのりひとシューベルツの『風』です。どうぞ聴いてください。

官林 わが人生に涙ありだ。こうしてしゃべっていても、危なく死につばぐれるとこだった。俺、言ったよな、言わなかったっけ？

アサ それは初めてかもしれない。

官林 仕事の車流されたの。

アサ 車が？

官林 うん、車ごと流されたの。津波で危うく。

アサ 津波で流されたんですか。

官林 うんうん。

アサ そっかそっか。

官林 まあ第一波だ。第一波が来て、引いて、車があったから、みんな走つてたから。そして、車から逃げたの。

アサ 車に乗つてらつしやつたんですか、そのとき。

官林 うん、乗つてたわ。

アサ だから、車を乗り捨てて。

官林 その前に逃げたかったんだけど、やっぱり自分で逃げれば良かったんだけどな。やっぱり、あんどき。ほんで、こう、俺、自分で逃げてたらまた変わっただろうけど。アサ そうですか。そのときのつきの判断っていうか、まあ、もうすべてその場に置いて。

官林 うん、いまだこいつたかわかんねえもん。ただ、免許証だけはとりあえず持ってきた。いやあ、いろいろあつたべや。

アサ そのいろいろあつたなかでも、この水戸黄門の曲は、まあいうなれば、ちよつと応援ソングっていうか。

官林 応援だ、うん。

アサ 自分自身に対する。

エピソード6 官林建児さんのお仕事とあの日

アサ 高校卒業してから、官林さんはお仕事はじめたんですか？

官林 専門学校に行った。

アサ どういう専門学校だったんですか？

官林 あの、これ。

アサ え、これって何ですか？ このジェスチャー。

官林 測量。

アサ ああ、測量。土木のほうね。

官林 学校も土木出だから。

アサ なるほど。

官林 学校が農業高校だったから。

アサ そうですね、双葉の農業高校。

官林 田中角栄がいた中央工学校、あそこに行つたわけね。ところが、単位取れなくて2年いたから。

アサ そうですか。その後、建築や土木のお仕事をされることになったんですか？

官林 最初働いたところがちよつとあんまり、その頃免許なかったから俺。だから、社長が、どうせこの会社合併されるからつて言つたから、辞めて。そして原町の国土調査測量協会にいたんだよ。

アサ そこからの仕事はわりと長いこと？

官林 うん、30年いた。

アサ 勤められて。

官林 うん。そして54でリストラくつて。

アサ そっかそっか。

官林 そしてそのあと、警備員を5年近くした

◇

アサ では、最後の曲になります。震災の記憶も含めて、決して楽しいことだけではなかった官林建児さんの人生を支え続けてきた、みなさんお馴染みのあの曲です。水戸黄門のテーマ曲『あゝ人生に涙あり』。それではどうぞ。

エンディング

アサ 『ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまこへ』第2集、いかがだったでしょうか？

今回もリクエストカードをCDとおともにお渡ししてあります。集会場の入り口にある黄色いポストに、番組でかけてほしい曲やエピソードを書いていただき、ぜひ投函してください。

みなさん、これから寒さがどんどん深まってくると思いますので、くれぐれもお身体、大切にされてくださいね。お届けしましたのは、『ラジオ下神白』主宰の音楽家アサダワタルでした。ありがとうございました。

わけ。もう少しで5年つてときに、この震災があつたから。

測量のほうが好きだったな。仕事以外に春は山菜、秋はキノコとか採るのが好きだったから。

アサ いろんなところ行かれますもんね。

官林 いまはもう駄目だよ。

一同 (笑)。

官林 いまは歩かねえからなあ。

アサ それからもうずっと双葉におられて？

官林 一度結婚して、結局、離婚したけど。

アサ この間話したときに、水戸黄門のテーマ曲が好きつて仰つてましたよね。

官林 うん、あれは好きだった。

アサ ね。あの曲に込められた「人生楽ありや苦もあるさ」っていう、ああいう感じつて、いつぐらいから官林さんに響いてきたのかなと思つてたんですけど。

官林 まだおやじが生きてる頃だから、何のときだ？ 30代だな。『ああ人生に涙あり』がいい曲だよつて言われたから、やっぱりこれが、まあ人生の歌だから。あの2番の曲が好きだった、俺は。

アサ 2番？

官林 うん。

アサ 2番の歌詞つてどんな歌詞でしたっけ。

官林 やっぱり、「勇気がないと生きていけない(人生勇気が必要だ)」、ここが良かった。**アサ** 「勇気がないと」つていうくだりがあるんですね。

官林 全部好きだけどよ。

アサ 特に2番の歌詞は。そっかそっか。

4町（富岡・大熊・浪江・双葉）の2017年

浪江町、富岡町は帰宅困難区域を除いて避難指示が解除。双葉町、大熊町も特定復興再生拠点区域復興再生計画が認定されました。

浪江町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 482人
21,434人 避難者 20,663人

- 3月27日 仮設診療所「浪江診療所」が開所
- 3月31日 帰宅困難区域を除き避難指示解除
- 4月1日 JR常磐線の浪江―小高駅間8.9キロメートルが運転再開
- 6月30日 浪江町幾世橋地区に町内初の町営災害公営住宅「幾世橋住宅団地」が整備、22戸の入居開始
- 9月29日 浪江町幾世橋地区に整備した「幾世橋集合住宅」80戸の入居開始
認定こども園「浪江にじいるこども園」落成式
- 11月25日 伝統行事「十日市」が震災後初めて町内で開催（～26日）
- 12月22日 浪江町特定復興再生拠点区域復興再生計画が認定される

双葉町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 ―
7,140人 避難者 6,925人

- 3月27日 県は双葉町中野地区に整備する、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故のアーカイブ拠点施設の基本方針を決定
- 3月30日 双葉警察署の拠点機能を、楢葉町の臨時庁舎から富岡町の本庁舎へ戻す
- 9月15日 双葉町特定復興再生拠点区域復興再生計画が認定される

大熊町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 ―
11,505人 避難者 10,530人

- 4月17日 大川原地内に震災後町内で初となる飲食店「大熊食堂」開店（東京電力大熊単身寮に併設）
- 11月10日 大熊町特定復興再生拠点区域復興再生計画が認定される

富岡町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 376人
15,960人 避難者 12,907人

- 3月31日 町内初の災害公営住宅が完成し、3か所（154戸）整備
- 4月1日 帰宅困難区域を除き避難指示解除。6年ぶりに路線バスが再開、2路線が運行
- 4月23日 廃炉国際共同研究センターが富岡町内に開所
- 10月21日 JR常磐線の竜田―富岡駅間6.9キロメートルが運転再開
- 11月11日 秋の風物詩「えびす講市」が7年ぶりに町内で開催（～12日）

※震災時の住民登録人口は、『ふくしま復興ステーション』『平成23年3月11日現在の住民登録人口』を参照。居住者数は、浪江町は住民登録の有無を問わない数、富岡町は住民票ありの数。各自治体のウェブサイト等を参照（浪江町・双葉町は2017年12月31日現在、大熊町・富岡町は2017年12月1日現在）。

※2017年の出来事については、すべて『ふたばぐるぐるMAP』vol.3、vol.4（ふたばの明日を考える会、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター相双地域支援サテライト）を参照。

下神白団地の2017年

2015年に入居がはじまってから2年が経過し、2月からラジオ下神白の収録もスタートしたなか、入居世帯もゆるやかに変化をしています。

居住世帯

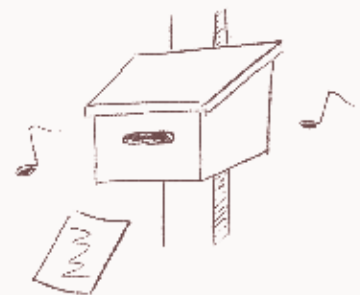
合計 187世帯
前年比 -11世帯

入居率

93.5%



※「県営住宅下神白団地入居者世帯数・世帯率推移」（下神白団地自治会、2017年4月）



第3集

2017年 リクエスト総集編

リリース日 2018年3月29日



集会場の入り口に設けた『ラジオ下神白』のポスト。第3集は、寄せられたハガキとリクエストを一挙に紹介する、初の総集編となりました。直筆で書かれたリクエスト曲を聴くと、まるでその人の思い出に触れるような感覚に。ラジオネームを拝見するのも密かな楽しみです。

disc 1

1. オープニング
2. 紺野金子さんのリクエストその1／金田たつえ『お母さん』
3. ラジオネームはるおちゃんのリクエスト／井沢八郎『男傘』
4. ラジオネームたまにゃんのリクエスト／ガロ『学生街の喫茶店』
5. 渡辺長一さんのリクエスト／宮城民謡『お立ち酒』
6. 高原タケ子さんのリクエストその1／淡谷のり子『別れのブルース』
7. 高原タケ子さんのリクエストその2／霧島 昇『旅の夜風』
8. 高原タケ子さんのリクエストその3／塩 まさる『母子船頭唄』
9. 高原タケ子さんのリクエストその4／三浦光一『踊子』
10. 横山けい子さんのリクエスト／コール・ファーマー『青い山脈』
11. 復興団地対抗カラオケ大会出演者／門馬文雄さんインタビュー
12. エンディング

disc 2

1. オープニング
2. 官林建児さんのリクエスト／杉良太郎『すきま風』
3. 宮嶋好子さんのリクエスト／春日八郎『別れ的一本杉』
4. 渡部茂子さんのリクエスト／渡辺はま子『支那の夜』
5. ラジオネーム三太のリクエスト／美空ひばり『みだれ髪』
6. 紺野金子さんのリクエストその2／五木ひろし『長良川艶歌』
7. ラジオネームたまにゃんのリクエストその2／因幡 晃『わかって下さい』
8. 五十嵐節子さんのリクエスト／福島民謡『相馬流れ山』
9. 紺野金子さんのリクエストその3／福島民謡『新相馬節』
10. 北崎ソネ子さんのリクエスト／岡本敦郎『白い花の咲く頃』
11. いわきの洋子ちゃんのリクエスト／新沼謙治『ふるさとは今もかわらず』
12. エンディング

第4集

海の上で捕まえたあの風景

渡部 清さん 収録日 2018 年 6 月 21 日 会場 下神白団地個人宅
藁谷鐵雄さん 収録日 2018 年 4 月 25 日 会場 永崎団地集会場



ラジオ下神白



海の上で捕まえたあの風景

第4集に登場するのは、こちらの6名です。海をめぐる旅、どうぞゆっくりご覧ください。

聞き手



アサタワタル



りんご (榎 裕美)



江尻浩二郎



伊藤 馨
(NPO法人 Wunder ground)

語り手



わらがい てつお
藁谷鐵雄さん



わたなべ
渡部 清さん

オープニング

アサタ 下神白団地の住民のみなさん、こんにちは。『ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまここへ』。ようこそ、司会のアサタワタルです。このCDでは、下神白団地の住民のみなさんのまちの思い出とともに、当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けしていきます。

みなさん、とにかく暑い日々が続いてますね。小名浜エリアは、全国的にもかなり涼しいですし、以前よりは涼しくなってきたかなと思うんですけども、油断は禁物です。水分補給やクーラーの利用など、熱中症対策にはしっかり取り組まれてください。前回はですね、そんな暑さとは対照的に、3月の寒いときに『ラジオ下神白』リクエスト総集編をつくりまして、みなさんからたくさんいただいたリクエストをぎゅっと2枚組のCDにしてご自宅に配りに行きました。その節は、たくさんのリクエスト、本当にありがとうございました。

あれから5か月経ちまして、今回で第4集となる『ラジオ下神白』。特集は海の男たちに注目しました。下神白団地4号棟・浪江町ご出身の渡部 清さん。そして今回初となる、お隣の永崎団地から、地元小名浜の藁谷鐵雄さんに登場いただいております。おふたりの共通点は元漁師であることですね。マグロを追いかけて、大きな海へと漕ぎ出してきた壮大な生活とともに、ほんのり甘酸っぱい恋愛話、そして沖から戻り

漁師を辞める転機、震災のあの日のエピソードも含め、当時の馴染み深い音楽とともにお届けしていきます。

どうぞ、この下神白から、音楽とともに海の記憶へと漕ぎ出してください。まずは永崎団地の藁谷鐵雄さんからお届けしたいと思います。それでは、どうぞ。

エピソード1

藁谷鐵雄さんの海と初恋

藁谷 (写真を見ながら) これは漁場に向かう途中。これはマグロ獲る漁具です。漁具を整備してるところです。

りんご はえ縄？

藁谷 うん、はえ縄です。

アサタ すごいめっちゃいいです。後ろに広がるこの……。

藁谷 雲ね。

アサタ 雲。海と雲とすごい。

藁谷 これはおそらくね、赤道あたりじゃねえかなって思うんですけど、私らは北から南に下がったわけですね。そのときに、赤道を通過すると、「赤道祭」つつうのをやるんですよ。

アサタ 何人ぐらい乗り組んでらっしゃる？

藁谷 乗組員は23名だったと思うかな、この当時。それで、学生が20名くらい乗ったと思う。だから、この頃の福島丸はエアコンはなかったけど、いまは全部エアコンで。それで、われわれのときには海星高校（福島県立いわき海星高等学校）は男子校だった

収録内容

① オープニング

② エピソード1／藁谷鐵雄さんの海と初恋

③ 楽曲1／加山雄三『君といつまでも』

④ エピソード2／藁谷鐵雄さんの世界との出会い

⑤ 楽曲2／森山加代子『月影のキューバ』

⑥ エピソード3／藁谷鐵雄さんの転機とハワイアンセンター

⑦ 楽曲3／日野てる子『南国の夜』

⑧ りんごのお知らせコーナー／

ゲスト：福島丸乗組員 栗原茂樹さん・若林伸昌さん

⑨ 楽曲4／レミオロメン『粉雪 (Shortver.)』～

楽曲5／竹中はじめ『おいらの船は 300 トン』

⑩ 福島丸で獲れたマグロはどこへ行く？

(解説：生粋の小名浜衆 江尻浩二郎)

⑪ エピソード4／渡部 清さんの海とアモーレ・ミオ

⑫ 楽曲6／アリダ・ケッリ『Sinnò me moro (死ぬほど愛して)』

⑬ エピソード5／渡部 清さんのブラジルとの別れ

⑭ 楽曲7／メイザ『O Barquinho (小舟)』

⑮ エピソード7／渡部 清さんの浪江への帰還～いまここへ

⑯ エンディング

伊藤 きれいだよね。

藁谷 (写真を見ながら) 一番前が、これいま

潮をかぶってるところかな、うねりがあって。このところ、ピットに座って、そこそ水割り持って、風呂上がり。それで、そのときに聴いた曲が『君といつまでも』っていう。

アサタ やっぱりそこなんですな。

藁谷 その頃好きな人いたんですね。そのときにね、まあこれいろいろあって。あとで後悔したんですけど、1航海休んでね、口説けば良かったんですね。ストーカーじゃないんですけどね。そうすれば、彼女は自分の気持ち、変わるなかったと思います。それが1航海、90日考える余地を与えちゃったんですよ、彼女に。

アサ なるほど。

藁谷 そんでうちに帰ってきて電話したらば、いまでも覚えてます、その言葉。「もう会わないほうがいいと思って」って言われました。平の喫茶店でね、まわりに人いたんだけど気にもしないで、まあここにあったんだろうな、そういうことを一生懸命になって話しましたけどね。

それで、うちはそのあとだったかな、家内とのあれは。家内とそういう状態で、まさかそっちの女の子とあれしてるなんていうことはなかったからね、そっちの女の子が先だ。

アサ でも、もう50年。金婚式も迎えられて、素晴らしいです。

藁谷 そういうことあったんですね、まあひとつやふたつはね、その頃。男だもの。一同（笑）。

アサ まあもちろん、それはひとつやふたつあると思いますけど。

藁谷 家内だって、女にももてなかったんだっぺかなってあれしたらば、魅力ないんじゃないですか。

アサ 奥さんに見たら、うん。

ちの部屋で。

アサ 聴いてらっしゃったんですね。

藁谷 ステレオで、『君といつまでも』を暗い部屋で聴いてましたよ。



アサ では、早速聴いていただきましょう。『ラジオ下神白』第4集、最初のナンバーです。藁谷鐵雄さんの初恋の思い出の曲。加山雄三『君といつまでも』。どうぞ。

エピソード2

藁谷鐵雄さんの世界との出会い

アサ 加山雄三は、どういうふうに聴くんですか？ カセットとか持ち込む感じですか、当時。レコード？

藁谷 あのね、レコードで、何つうのか、ドーナツ盤。

アサ ああ、ドーナツ盤。で、プレーヤーは船にあつて。

藁谷 うん、ちゃんとデッキについてて。

アサ デッキについてる？

藁谷 違う、ブリッジについてる。

アサ ああ、ブリッジについてて。

藁谷 レコード担当は学生。だから、操業中でも、いつもレコード。

伊藤 音楽は流れてんの？

藁谷 BGMみたくしてた。

アサ DJを学生が担当して？

藁谷 うん、そうです。上に行くから。学生は上の片づけがありますから。

藁谷 で、うちの家内とは見合いです。

アサ お見合いです。

藁谷 うん。家内の働いてた工場に、うちの親戚のおばさんがいたの。で、その人が別の人にお嫁さん紹介したのね。そしたら、うちのおふくろが、うちの息子にもお嫁さん紹介してくれねかっていうことで、いまの家内とこさ、話いったんです。でね、初めて会ったのは、年は忘れたけど、1月19日に会ったんですよ。

アサ 日付まで覚えてらっしゃるんですね、はつきりと。

藁谷 とにかく小名浜に帰ってきてくれやつていうことで話進めてたみたいだから。そして見合いをして、そんで23日三崎に戻ったときに、泉駅まで送ってきた。それが結婚する前の、ただ1回のデートなんですよ。

そんで、私、沖さ行っちゃったでしょ。で、うちのおやじが、結局惚れたっていうか。

アサ あ、お父さまが気に入られたんですね。

藁谷 気に入られた。うちの家内もね、お父さんっていうのは戦争で戦死した人で、母子家庭で育った子だから、おふくろさんとうたりで来たわけですよ。それだから、結婚する前に逃げらんねえように、樽入れしまおうつつて、俺いいうちに樽入れしちゃったの。樽入れっていうのわかる？ 婚約ですよ。

そのときね——おもしろいんだよね、いま考えてみると本当に。俺、何だったんだっぺなと思うんだけど——そういうことで私が、落ち込んでたわけだ。そしたら、私の

アサ そうか、そのブリッジの部分にプレーヤーがあつて、そこからかけて。

藁谷 そのなかでね、操舵室のなかにラジオとか、ドーナツ盤のその、何つうんですか。

アサ 再生したら、スピーカーから流れるようになって？

藁谷 表に付いてます。

アサ 表に。

藁谷 上にスピーカーがついてますから。

アサ 目の前に広がる海見ながら、そのBGMが流れてくるっていう。

藁谷 ながら仕事してるわけですよ。

アサ すごい。音楽は常に流れてるんですか？

藁谷 そうですね、操業中はね。「うるせえからやめろ」なんていう人もいるけど（笑）。

アサ いや、それはそれでいそうですね。なんかもう、音楽いらないからっていう人もいるだろうなと思って。

藁谷 そう。ただ、私らはどつちかというのと、何つうのかな、コーラスグループのやつが好きでね、あとハワイアンとかね。やつぱり南さ行くから。どんどんどんどん。

アサ やつぱりハワイアン、そうですね、南にあたたかいところにこう、向かつていつて。

藁谷 ニュージーランドの北島のオークランドつていうところです。一番北端ですね。昔はここが首都だったんですね。それで、今度は、ウエリントン。いまは南島のウエリントンがニュージーランドの首都になってますけど、こっち夏ですから、あっち冬なんですよ。だから、冬のジャケット持っていくですよ、みんな。ハワイさ行くとき

友だちがどうしたんだっていうことで、こ言われたんだって。「じゃあ、俺、仲もつから」っていうわけで、平さ行つてね、レストランで食事したんですよ。そのときに彼女呼んでくれたんですよ、連絡取れて。そんで、食事3人でして終わつて、そんで彼女のうちまでタクシーで送つてったんですよ、私。それが最後。「幸せになれな」つて言つて。馬鹿みてえだつべね。

伊藤 幕引きだ。

アサ なんて、じーんとくる、これは。

伊藤 ダンディーだね。

藁谷 だから、それがまたおもしろいの。そのあとがあるんですよ。

伊藤 え、何、何？

アサ 聞きたいですね、そこは。

藁谷 その人は、最終的には役所に勤めてた人と一緒にあったのね。それで、できた女の子がね、成人つつかおつきくなって、彼女にそっくりな娘で。それが、うちの家内が勤めてたところで、事務やつてたの（笑）。家内と結婚して、ある日突然、それこそ、その人と瓜ふたつの人が目の前に現れた。

写真もあつたよ。あの三崎の公園でなんか写真一緒に撮ったようなのが。いまの三崎の公園じゃなくね、前の。それをみんな、水に流したじゃないけれども、津波でみんななくなった。

アサ そうか。

藁谷 もう会わないほうがいいと思つてつて、俺は帰つてきて言われたときも、自分のう

には、ホノルルに入りますから。そのときにはアロハシャツに、一応。

アサ やつぱり郷に入れば郷に従つていくんですね。船の上で病氣になったりとかいうことも？

藁谷 ありますよ。

アサ お医者さん乗つてはります？

藁谷 あのね、いま、医者はいらないです。

アサ あ、そう。

藁谷 私ときはね、足怪我してね、トラック島つて、昔日本の海軍いたところ、あそこ、アメリカの軍事基地なんですね。だけど、アメリカつうのは、軍事基地にはなかなか入れないんですけど、命にかかわることは入れます。その代わり、入ったら、そういうふうにかメラはぶら下げられません。みんな「しまつてくれ、しまつてくれ」。

アサ もう全部没収ですよ。

藁谷 そして、あと、岸壁さは着けないんですけど、ああいう、小さな船で。

伊藤 はしけで？

藁谷 うん、はしけで。

伊藤 迎えに来て？

藁谷 迎えに来て。そんで、病院。怪我して、どこだったつてな、ヌメアか。ヌメアつてフランス領なんですけど、そこでもやつぱり操業中に、このマグロ釣る針、こっからこう入れちゃつて、出血多量でね。それで、ヌメアに入つて。

アサ ああ、やつぱり、でもそうですね。

藁谷 そういうことありますよ。

アサ 船の上でそうなつてしまうと、もう。

藁谷 あと、だいたい盲腸が多いな。

アサ ああ、盲腸か。

藁谷 うん。私も一回、まあ自分が不注意だったんですけど、頭から落っこって、デッキにね。それで、肩打って、こっちの肩だったかな。それで胸なんか本当に女の人の胸よりおつきくなっちゃって。それで、学校と小名浜の無線局と連絡取って、それだと学校のほうで医者と連絡取って、どうしろ、こうしろっていう。

アサ ああ、その処置の仕方を、そのとき連絡し合って。

藁谷 うん、そうそう。衛生管理者っていうのがひとり乗ってて、医者ではないんだけど。

アサ なるほど。

藁谷 船の場合は、100人以上の乗組員でないと、医者いらないんです。

アサ そっかそっか。

藁谷 で、飛び降りて、ここへこう、湿布してね、それで、あんまり最悪の場合は、ラバウルに入るようにっていう指示が、だからそのまわりで操業してたわけですよ。だけど、その、すんなりこう、落ち着いたから。

伊藤 その無線って、やっぱりモールス信号なんですか？

藁谷 モールスですよ。いまはわかんないですよ、いまは衛星使ってますから、電話なんかも適用になるかもわかんないですけど、私らのときには一番の、自分らの楽しみつつうと、いまで言うと、FAXね。

伊藤 そんなのあったんですね、電送みたいな。

藁谷 うん、ありました。1日1回新聞が流れ

んだけど、結局、何つうのかな、お金の回転悪かったんだろな。それで、市場さ行っても魚買えねえような状態だったわけ。

それを息子ふたりが見てたわけだね。それで自分らは今度何をするかつつうことで、最初はエビフライ、冷凍食品といえばエビフライつつうの、あるでしょ。あれの走りの頃です。インドネシアとかタイとか。日本のエビ使ってたらあんなのできないから、高くて。外国のエビでもね、おいしいのね。私も一回手伝ったことあんだけど、メキシコのエビが一番うまいんです。

それで結局そういうようなことで、きょうだいでそういう冷凍食品扱う工場をつくって、エビのフライの仕事を初めやったんですよ。そのときに私の家内の妹の亭主が、やっぱりそういう面では、人よりも仕事ができる人間で、すごく2番目の人（弟）が気に入ってたね。そんなるときに、「藁谷くん、あんたいつまでも船に乗ってるわけだねえだろ」と。そういう相談かけられたわけだ。

それで弟のほうは、妹の亭主のほうに――家内のね――「いや、俺の右腕にしたいんだ」と。けども、右腕にしたいのには、彼がいまやっているエビの皮むき、結局、彼のこと使えたけれども、後継者がいなければあれするわけ。それでそう言われて、そんなときちょうど冷凍のほうやって、腰も痛めてたから、じゃあと思って。それがきっかけ。

アサ なるほどなるほど。その藁谷さんがちよ

てくるんですよ。だから、ジャイアンツ勝ったとかさ、阪神負けたとかつていう。

そんなときに見て、いまでも残ってるっていうのは、南アフリカの太平洋側で操業してたときですけど、チリ地震があつて、津波があつたでしょ、こっちで。

そのときの被害なんかも全部FAXで、1日1回だけ。それであととはね、短波放送が入るのかな。で、あと、ハワイの近くに行くと、やっぱり日本語放送入りますから。

アサ だんだん入ってくるんですよ。

藁谷 そうそう、そのくらいだったかな、楽しみっていうとね。

アサ そっかそっか、短波放送か。

藁谷 日本短波放送っていうのかな。

アサ ラジオ短波ってね、ありましたね。

藁谷 そんなで、アンテナはね、表の一番前にあるマストの上からさ、みんなどとつてね。

アサ そうですよ、船の上っていうのは、レコードを聴くのもあるかもしれないですけど、国に近づくともね、その現地のラジオが入ってきて。

藁谷 現地のラジオが入ります。だから、あとは12月30日で、もううちなんかもお正月とかお盆なんかねえから。そうするとね、NHKの紅白歌合戦が、海外向けの、ブラジルあたりさ流すやつが入ってくるんですよ。それにみんなかじりついて、テレビなんかないから。

アサ 大晦日ですね、紅白って。その当時のこと覚えてらっしゃいます？ 歌とか、どういう歌手が出てたかとかつて。

うど漁師からその加工の仕事をされる時期って、さつきエビフライの話を仰ってましたけど、これも加工食品にでкинじやないかみたいな、そういうのがいっぱいあつたんですね。

藁谷 うん、あつたね。あの時期はね、ハワイアンセンターができる前。常磐炭鉱が閉鎖したとき、あの頃からだから。それで、閉鎖して、地元のあの炭鉱長屋にいた人らが、パン粉つけてこうやって握る。

アサ 結局仕事ね。そっちから変わるんですよ、炭鉱の仕事から。

藁谷 そういうのをこっちからマイクロバスで行って、乗せてきて、そんでつくったわけ。そういうのをつくらせんだ、女工さやらせた。で、終わって夕方になると、またマイクロバスさ乗せて、常磐まで送ってくつていう、そういう時代だった。

アサ そっか、みんなそこで働き出したんだ、女工さんたちは。

藁谷 うん。それで、あの炭鉱の廃油つつうのかな、それが炭鉱閉鎖しても出てたから、結局お湯を使つてやったのが、いまのハワイアンセンターなんです。最初は馬鹿扱いです、あんなことやつてつて。それが成功したら、「さまさま」だわな。

アサ がらつと変わっちゃつて。

藁谷 うん、神さま扱いだもん。

アサ やっぱそれね、わかんないですもんね、最初は無理……。

藁谷 うん、だから、映画の『フラガール』観るとわかるけれどもさ、最初は本当に炭鉱

藁谷 歌手つか、まあその当時は三波春夫とかさ、春日八郎とかね、ああいう人らだね。

ああいう人が多かったね。まあ多かったというか、ああいう連中だね。美空ひばりはずっとあれしてました。

アサ はいはい、ずっと出てはりました。

藁谷 あとは、まあ亡くなった島倉千代子なんかね。若い頃ね、みんなね。



アサ チリ沖地震が起きた1960年、昭和35年。当時は藁谷さんは18歳、そんな時代、海の上のラジオから流れてきた紅白歌合戦ではどんな曲がかつていたのでしょうか。そのなかでも印象深い曲を藁谷さんに選んでいただきました。それでは聴いてください。森山加代子で『月影のキューバ』です、どうぞ。

エピソード3

藁谷 鐵雄さんの転機とハワイアンセンター

アサ 28歳まででしたっけ、海に出られてたのは。

藁谷 そうです。

アサ 漁師を辞めることを決めたきっかけがあつたんですか？

藁谷 あります。それは私と同じ地域にいた人で、いま常磐で永谷園の仕事をしてる人がいたんですよ。その人というのは、昔だからおやじさんなんかは加工屋さんやって、それこそ、^{頬刺}しとかみりん干しやつてた

の娘だから踊ってて、いまみてえな、かわいこちゃんですねかったからさ。

アサ それこそ下神白岡地の佐山さんとか、いろんな方から常磐ハワイアンセンターの話が出ていて、お子さんを一緒に連れてつて、ついでにコンサートを観たとか、結構そんな話があるんですけど、よくいろんな歌手とかも来られてたんですよ。

藁谷 ああ、来てましたね、日曜日のたんびに来てましたね。

アサ 毎週末でたのか、すごいな。

藁谷 またこれも古い話になっけど、一番先に来た歌手つつうのは、日野てる子なんですよ。ハワイアンセンターで歌った人で。

アサ 一番最初に来られたのが？

藁谷 そうです、1月15日。それ覚えてるのは、私の誕生日だから。

アサ 藁谷さん、はつきり覚えてらっしゃいますね。それ、観られたんですか？

藁谷 観ました。私もハワイアン好きだったから。だからどつちかと言うと、スチールギターの音楽が好きなんです。



アサ 3曲目のナンバーです。常磐ハワイアンセンターのオープニングでステージに上がり、藁谷さんも目の当たりにした、日野てる子さんの楽曲です。『南国の夜』、聴いてください。

エピソード4
渡部 清さんの海とアモーレ・ミオ

アサダ さて、改めて『ラジオ下神白』、司会のアサダワタルです。ここからは下神白団地4号棟に住む浪江町ご出身の渡部 清さんのお話をお届けします。まずは清さんがなぜ漁師になったのか、1年のうちの大半を海外で暮らす生活で聴こえてきた音楽とは。このあたりからスタートしましょう。それではどうぞ。

アサダ 清さんはいくつのときに漁師になったんですか？

清 俺、中学校卒業のときで、すぐ。

アサダ 中学卒業してすぐ？

清 うん。それで中学校卒業して、すぐはここで、小名浜で2年漁師やってたの。そうすると、昔だから木造船でちっちゃい船だべ。で、サンマで、北海道まで行くんだ。

アサダ 北海道まで。

清 それで八戸寄って、サンマはずっと移動してつから、北海道函館沖あたりからサンマ獲りはじまって、青森へ来て、岩手へ来て、宮城へ行って、静岡あたりまで行くの。そしたら、今度、北上するの。北海道のほうへ行っちゃうの。

りんご 清さん、なんで漁師になったんですか？

清 なんてって、俺みてえな頭のよくねえの、やることねえべ。

アサダ (笑)。

清 学校も出てねえもん。

アサダ 清さんの中学校のお友だちで、結構、漁師になった人は多かったんですか。俺も漁師になるっていう感じだった？

清 いや、多くねえな。

アサダ あ、本当。

清 何人もいない。

アサダ あ、そうなんだ。

清 うん。俺らのところには、漁港はあるけれども。浪江だから、請戸（漁港）って。

アサダ 請戸。

清 うん。それで、漁師になったっていうのはいねえな。

アサダ 珍しかったんだ、じゃあ、清さん。

清 うん。

アサダ 清さん乗ってたサンマの船もおつきかったの？

清 サンマ船はちっちゃえ、30トンから40トン、木造船。

アサダ うんうんうん、木造船。

清 いま、木造船なんかねえや。ほとんど鉄船だな。

アサダ 鉄になってるのかな、うん。北海道まで、北上して行って。

清 うん、木造船30トンで北海道まで行く。それで、ここで2年やってて、情報入ってくつぺ、そしたら、神奈川県三浦三崎で、日本全国の大きい船、集まってくるの。300トン、400トンって。

アサダ 全然、もう単位が違うんだね。

清 うん。それで、それに乗って、外国へ。パナマって知ってる？

アサダ はいはいはいはい。

清 パナマ運河を越えて、大西洋へ行って、そして、向こうつたって、魚釣って売ってたの。2年ぐらいの契約で。

アサダ そういうのは契約するんですね、2年行ってこいみたいな感じで。

清 うん、契約して。で、魚獲って外国へ売ってんの。

りんご なんでそっち行つたの？ 小名浜から。情報入ってきたっぺ。

りんご 儲かんのけ、そっちのほうが。

清 うん。だから……。アサダ 情報が、そうか。

清 じゃあ、ここで漁師やってるよりも、神奈川県三浦三崎へ行つたほうがいいと、俺は思ってたの。スーツケースひとつ持って。

アサダ なるほど、一旗揚げに行つたんだな。

清 それで、20年漁師やってたわ。若いときだから、日本にいないの、外国ばかりだから。

りんご 二十歳で、じゃあ三崎行つたんだ。

清 うん。

アサダ 三崎行つてからは、もうずっと三崎から世界に。長かったんですね、そつから先は。清 うん、三崎はいいところだから。

アサダ ああ、そう。

清 うん。東京から近いべ、横浜から近いべ、三浦三崎は観光地だから。漁港がこうあったら、漁港の向こう側、城ヶ島って、有名な島だつぺ、城ヶ島。だから、年中観光客がいっぱい来てんの。そんだから、お金も使うわい。

アサダ みんなお金落とすからね。

清 若いぶん、お金使いたくなっちゃう。

アサダ 三崎から船乗ってたつてことは、お家は当時三崎にあったんですか？

清 いや、下宿。みんな日本から集まってくつぺ、あつちこつちから。うち、あるわけねえんだよ。だから、みんな下宿して、船に乗ってるの。アパート借りるっていう人もいねえよ。アパート借りるまでいかねえ。俺ら、何十日もいるわけじゃねえんだから。せいぜいだつて、1か月かなんぼだ。だから、下宿のほうがいいの。知り合いがいつぺ。船で話してもらつて、下宿、ああ、いいよつて言われればそこ行つて。

アサダ 仮住まいなんだな、ずっと。

清 うん。下宿だから、朝パンしか食事が出ねえわけ。昼は出ないから。けども、夜になつと食事行つたり、これ行つたり、少し屋行つたりだから。

アサダ それは行くわ。行くわ行くわ、そら。

りんご 仲間の漁師と行くのけ、そういうのは。

清 ん？

りんご 仲間の漁師と行くの？ 飲みに。誰と一緒に行くの？ 女の子？

清 いや、向こう行つたら女の子いっぺよ。

一同 (笑)。

りんご 女の子いるときさ、行くのね。

清 うん。

アサダ それは漁師友だちと一緒に、じゃあ、今日も行くかって感じで？

清 うん、そう、うん。

りんご スナック？ バー？

清 うん、スナック、バー……そうだな、あの頃ね、まだスナックっていうのはなかったんだ。それで、俺がいる途中でスナックっていうの、できたの。

りんご 清さんが行つたスナック・バーって、音楽とかかかつてたの？

清 ん？

りんご 曲とかかかつてた？ 清 若いときから外国ばっかり行つてたから、外国の音楽が好きだったの。日本の音楽聴かねえもん。だから、テレビでなんかたまにやつぺ。聴いたことねえよ。性に合わねえ。

アサダ そうよね、なんか清さんから歌謡曲の話が上がつたことないもんな。

清 うん、日本の音楽は性に合わねえ。

アサダ 外国の音楽ってなると、どこの国の音楽が清さん、性に合う？

清 ブラジルの音楽すごいぞ。サンバ、ボサノバ、踊りもいいよ、すごいから。キャバレー行くべ。そうすつと、専門家じゃねえんだ。お客さんが行つて、こうステージがあるから、それで踊つたり、素晴らしい。カーニバルもブラジルへ2年いたから、2回見てる。素晴らしいぞ、カーニバル。すごい女の人たちが、こう、短いスカートをきただけでも何百人って踊ってくるの。何百人までいねえか。そうすつと、それにあとくつついて踊ってくんの。

江尻 それでブラジルはね、飲んでも食つても安い。それで、うまいもの食えつから。

江尻 ブラジルはなんていうまちにいたんですか？

清 パナマ運河を越えて、大西洋へ行って、そして、向こうつたって、魚釣って売ってたの。2年ぐらいの契約で。

アサダ そういうのは契約するんですね、2年行ってこいみたいな感じで。

清 うん、契約して。で、魚獲って外国へ売ってんの。

りんご なんでそっち行つたの？ 小名浜から。情報入ってきたっぺ。

りんご 儲かんのけ、そっちのほうが。

清 うん。だから……。アサダ 情報が、そうか。

清 じゃあ、ここで漁師やってるよりも、神奈川県三浦三崎へ行つたほうがいいと、俺は思ってたの。スーツケースひとつ持って。

アサダ なるほど、一旗揚げに行つたんだな。

清 それで、20年漁師やってたわ。若いときだから、日本にいないの、外国ばかりだから。

りんご 二十歳で、じゃあ三崎行つたんだ。

清 うん。

アサダ 三崎行つてからは、もうずっと三崎から世界に。長かったんですね、そつから先は。清 うん、三崎はいいところだから。

アサダ ああ、そう。

清 うん。東京から近いべ、横浜から近いべ、三浦三崎は観光地だから。漁港がこうあったら、漁港の向こう側、城ヶ島って、有名な島だつぺ、城ヶ島。だから、年中観光客がいっぱい来てんの。そんだから、お金も使うわい。

清 レシフェ。

アサダ レシフェ？

清 うん。レシフェって、こつちはアルゼンチン、こつちは太平洋側、これ、パナマ運河な。これを北へ行くと、中南米について、ずっと行くとメキシコあつて、その下へ行くとアメリカ合衆国。だから、ここだ。レシフェってここにあるんだ。大きなまちなんだ。

りんご ブラジルにいたときはどこに住んできたの？

清 どこって、船に寝てんだつぺ。

アサダ ずっと船なんだ。

清 だつて、漁師だもの、船だよ。

りんご 2段ベッドかなんか？

清 うん。

りんご で、仲間と一緒にの部屋に住んだの？

清 仲良くなった女もいるわ。

りんご ブラジル人ってこと？

アサダ ブラジル人？ それ。

清 それはアパートで寝てる、寝たりする。

りんご ブラジル人の女の子け？

清 うん。

アサダ もてたんだね。

りんご 言葉はどうやって？

清 言葉はなんとかなった、覚えてる。覚えてくるわ、だんだんとな。

アサダ だんだんとポルトガル語をしゃべるってこと？ 清さん。

清 うん、何回も行つてんだから。

アサダ やっぱ行つてたから。

りんご じゃあ、愛してるってなんて言うの？

清 ん？

りんご 愛してるって。

アサダ ポルトガル語で。

清 「ミ・アモール」って。昔、「アモーレ、アモーレ、アモ〜レ・ミオ」って歌が流行ったろ。あれ、いい歌だったよ、あれ。

◇

アサダ それでは改めて聴いていただきましょう。

渡部 清さんがブラジルで出会ったところの1曲。アリダ・ケツリで『Sino me moro』。これ、イタリア語らしいですけど、日本語ではずばり、『死ぬほど愛して』だそうです。どうぞ。

エピソード5

渡部 清さんのブラジルとの別れ

りんご 清さんはレコードとか買わなかったの？

清 買って、いっぱい持ってた。

アサダ あ、持ってたんだ？ いっぱい。

清 外国から持ってきて、60枚ぐらい持ってた。

アサダ 本当に？

清 うん。だから、外国から買ってきたから、日本人じゃわからねえわな。外国語で書いてあるから。

アサダ そうだね、日本に持って帰ってきてても。現地じゃないと買えないやつを買って？

清 うん。

アサダ すごい。

清 キューバも行ったから。キューバもいい

ところだわ。あれ、音楽の本場だから。

アサダ そうだね。

清 キューバな、カリブ海。それも全部なくなっちゃったけど。

りんご それはどこにあったの？

清 どこ行ったかわかんねえや。下宿も変わったりすつぺ。だから、そのうちに全部なくなっちゃった。

アサダ ああ、やつぱりどんどん引越してるたんになくなっていくんだな。

清 何枚か浪江に持ってきたんだ。

清 あ、そうなんだ。
清 そして、浪江にこんな立派なステレオってあったつぺ、こんなでけえの。あれ持ってたからくれてやった、娘たちに。

アサダ ああ、そうなの。やつぱり日本の漁師は、ブラジルとかキューバとかではもてるんですか、女の子に。

清 うん。

アサダ それがすぐえ気になる（笑）。

清 向こうの女は、日本の女と性質が違うから。うんと気持ちいくて、優しくて、人目あんまり気にしないから。

それで、俺が岸壁に船いっぺ、こっちに。そうすると、馴染みになったバーで働いてた女の子が迎えにくんの。夕方になったら来いよって。そうすると、椅子なんかねえのよ。いい着るもの着たって、地べたにべたつと座ってんだぞ。そういうふうな性質だから。

りんご 日本の女とは違うんだね。

清 まあ、気持ちがいいっていうか、優しい。

アサダ 優しい、カラツとしてんのかな、向こうの人のほうが。

清 うん。

りんご 日本に戻ってきてから、いい女はいなかったの？

一同（笑）。

清 でも、まあいねえわけじゃねえけど、まだお金も貯めてねえし、うちあるわけじゃねえし。だから、いいいいやと思ってる。

アサダ 漁師の人がそうやって下宿で、でもね、恋人ができて結婚するってなったら、下宿から出て、どっか家借りるんですよ、そうやって。

清 うん、そういうような人いっぱいいるよ。

アサダ あ、いっぱいいたのか、やつぱり。

清 でも、俺はさ……。

アサダ あ、そう。清さん、もてたようなのにね。

清 うん。

りんご そのまち離れるときに、女の人は行かないでって言わなかったの？

清 まち離れるとき？ 浪江？

アサダ うん、浪江に戻るとき。

りんご 浪江に戻るときとか、ブラジルから帰るときとか、女の人がさみしくなるっけん。

清 うん、それがブラジルでもいい女いてね、そして、船着いてるところから、今度、港へ行くべ。そうすつと跳ねてよ、港の先まで行ってた、迎えに。

アサダ めっちゃロマンチックだ、それ（笑）。

清 それで手振ってんの。もう船出るよつったら、さーつと岸壁の端まで行って、船こう行くから、そして、こうやって（手

を振って）くれてた。いい女だな。

アサダ その風景は清さんのなかに焼き付いてるんですね、こうやって手を振ってる。

清 うん。

りんご それつきりなのけ？

清 うん、死んだつぺや。

アサダ いや、わかんないな、どうだろうな。

清 まあその女って、俺のひとつかふたつぐれえで。

アサダ 年同じぐらいね。

清 うん。もう、俺、81。で、ブラジルって

あんまり長生きしねえから。

アサダ 寿命はね、日本のほうが長いもんね。

清 うん。だから、死んだつぺや。

◇

アサダ はい、本日ラストの曲です。ブラジルの

港から遠ざかる渡部清さんの視線の先の惜別、そしてまた、新たな土地での一期一会に気持ちを寄せながら聴いていただけたらと思います。

曲はメイザ、ポルトガル語で『O Bar-quinho』、邦題は『小舟』というタイトルです。それでは、どうぞ聴いてください。

エピソード6

渡部 清さんの浪江への帰還〜いま〜

アサダ 清さんが、20年ぐらいずっと漁師続けて、腰痛めて辞めたときっていうのは、おいкуつだったんですか？

清 42。だからもう、まあ辞めてもいい年だ

師もつとやってるか。

清 だから、漁師辞めたのは42、それでトラックの運転辞めたのが62。トラックの運転、東京とか千葉でやってたから、それで辞めて浪江に帰ってきたの。

アサダ 清さん、漁師になって、トラックの運転手やって、60超えて浪江に戻ってきて、震災あったからいろんなところ越してここに来たけど、一番よかったな、あの時代はっていうのはいつぐらい？

清 一番よかったのは、トラックの運転やって62で辞めたつぺ、で浪江に帰ってきた。そうすつと、俺、海から離れてっけど、海は浪江、請戸ってあつぺ、請戸漁港。だけど、漁師もやんねえや、使ってくれるところねえから。だから、山登りとか、魚釣りばつかり。それ、一番よかったな。

アサダ そうかそうか。浪江に戻ってきたときの時代っていうのが。

清 それを、うち、（震災で）こんななつたべ。あの頃はよかった。別に体悪いわけじゃねえ、元気だから。毎日暇だと登山、アユ釣りとか、こんな（でっかい）やついっから。

アサダ そんなにあるんですか。

清 9メートルもある竿、そこへこう、5キロかかったら、竿ね、こんなになつてくる。それが、いまの竿いいから、折れねえから、こんなに曲がってて折れねえんだぞ。

だから、そんなことやって、のんびりしてるうち、こんなになつちやつたつぺ。あつちに避難しろ、こっちに避難しろって。5

か所も6か所も歩ったぞ。これ、役場の命令だから。

　　そこで、そのうち、何年避難してる？

　　3年か。4年目でこれ（下神白団地）、できたんだよな。いや、俺も前は集会場へ必ず何かあつたら行つてたんだ。それで、具合悪くなって、行かなくなったの。

　　そして、具合悪くなって、ちよつといいなと思つたら、今度、また悪くなって、入院したつぺ。そして、退院したら、また入院だ。1か月で4日入院してたの。小便出なくなつちやつた。それ全部、新井さんに世話になつて。そしたら、あの人もいい人で、うんと俺を面倒みてくれるの。

江尻　あれ、清さんのうちあつたのは浪江のどこなんでしたっけ、山のほう？　うちあつたのは、浪江のどこなんですか？

清　室原。室原って、室町時代の「室」、室原。（家のチャイムが鳴る）あ、ちよつと行つてきて。

アサダ　はい。こんにちは。

客人　こんにちは。

アサダ　清さんの（ホームヘルパーさん）？

客人　終わつてないですか？

清　うん。

アサダ　もう、もう終わります、僕らの話は。

客人　はい、じゃあ、すみません、失礼します。

清　まあ……。

客人　うんうん、変わりない？

清　うん、ないよ。

客人　うん、調子も大丈夫？

清　うん。

アサダ　よし、そろそろ行こか。

客人　ちよつとお薬だけ塗つてね。

りんご　コーヒー持っていきますか。

アサダ　うん。

りんご　清さん、コーヒー飲む？

清　コーヒー、いい。

りんご　コーヒー飲まない？

清　うん、うん。

りんご　じゃあ、コーヒーは……。

清　あ、じゃあ、残つたら、俺、あとで飲むから。

アサダ　本当？　じゃあ。

りんご　じゃあ、これ、ここさ置いとくね。これ、コーヒー。

アサダ　今日、カフェで、これつくってくれたやつ。りんご　カフェのコーヒー出すけの。

エンディング

アサダ　『ラジオ下神白　あのときあのまちの音楽からいまここへ』。第4集、いかがだったでしょうか？

　　最後は渡部清さんに、震災前の浪江での穏やかな生活についてお話しいただきました。

　　人生の先輩のみなさんを前にして、僕のような若造が言うのとはばれるんですけど、それでも、番組をつくつていて、つくづく考えさせられるのが、「人に歴史あり」というこの言葉です。震災がきっかけとなって、この下神白団地というコミュニティに、いま、みなさんは暮らされていると思います。

そして、幸か不幸かということはいったん置いておいて、ただ事実として、震災があったことで、いま、僕はみなさんとの縁を結ばせていただいています。

　　でも、それはあくまできっかけであつて、それ以前の膨大すぎるみなさんの記憶をです、ね、こういった音楽とともに振り返る時間は、本当、気が遠くなるような、でも確かにそこにその方々が生きていた重み、そういういったものを多少なりとも受け取らせてもらっているような、何とも言えない貴重な時間を過ごしています。

　　そしてみなさんそれぞれの人生を、このラジオCDを通じて、出身町も世代も超えてわかち合つて、何かしら出会いにつながることを勝手に願ひながら、僕たちはこんなことをやっています。これからもどうぞよろしく願ひいたします。

　　今回もリクエストカードをCDとともにお渡ししてあります。集会場の入り口にある黄色いポストに番組にかけてほしい曲やそのエピソードを、簡単に結構ですから、書いていただき、ぜひ投函してください。それでは、次回お楽しみに。

　　この夏が終わればまた涼しい秋が来ます。季節の変わり目は、特にお身体を大切にされてください。お届けしましたのは、『ラジオ下神白』主宰の音楽家・アサダワタル、そして、りんごちゃんこと榊裕美、生粋の小名浜人・江尻浩二郎の3名でした。ありがとうございました。



REC→PLAY

ある復興団地の「声(風景)」をなぞる

ラジオ下神白

あのときあのまちの音楽からいまここへの

報奏会

ある復興団地の「声(風景)」をなぞる

住民さんの日常や記憶から浮かび上がる「声(風景)」を、いかに遠く離れた土地で「体感」するか。人の記憶を受け取ること、起きてしまった出来事への向き合い方を考えること、そこに音楽がそっと置かれる意味について、できるだけじっくり味わいながら語り合い、奏で合う「報奏会」を東京でひらきました。



「なぞる 1: PLAY」では、ラジオに収録された住民さんの語りや、音楽をレコードから流すなど、公開放送のようなしつらえで行いました。

2018.12.8 [sat]
at ROOM302

14:00~14:30
■なぞる1:PLAY
「ラジオ下神白」の演奏を聴く

14:30~15:30
■なぞる2:REC
語る、その声を録られる

15:45~16:15
□レポート
「ラジオ下神白」について

16:15~17:50
■なぞる3-1:REC
誰かの語り、その声を録ってみる
角尾宣信(映画研究者)

■なぞる3-2:REC
誰かの語り、その声を録ってみる
武田 力(パフォーマンスアーティスト/民俗芸能アーカイバー)

17:50~18:20
■なぞる4:PLAY
「CD ラジオ下神白」を聴く、そして、歌う

18:20~19:00
□ふりかえり
「声」は受け取れるか、何を感じたか



最後は、参加者とメンバーが入り交じって円になり、「ふりかえり」を行いました。

綿々と続くサラリーマン映画には、
どうしても戦争や軍隊の記憶が入ってくるんです。

角尾宣信×アサダワタル、江尻浩二郎、榊裕美

なぞる3-1 REC

誰かの語り、その声を録ってみる

アサダ さて、「なぞる3-1」では、ゲストとして角尾宣信さんに来ていただきました。角尾さんは、東京大学大学院総合文化研究科の博士課程に在籍されていて、映画研究がご専門です。さらに、介護施設で高齢者の方々と懐かしい映画や歌謡曲を鑑賞して、語り合うプロジェクト『シルバーシネマパラダイス！』をやっておられます。

そこで、今回は角尾さんの活動について聞かせていただきながら、『ラジオ下神白』について新たな視点をいただけたらなと思っています。どうぞよろしく願います。

角尾 はい、よろしく願います。

アサダ まず最初に、普段どんな活動をやってらっしゃるかお聞きしていいですか？

角尾 ご紹介いただいた通り、普段は映画研究をしています。専門は敗戦後から60年代までの日本映画で、特にコメディや風刺を中心に掲っています。たとえば、植木等主演のサラリーマン喜劇映画シリーズ（1962-1971年）とかですね。

アサダ めちゃめちゃ好きですね。

角尾 実は、植木のサラリーマン映画の前には、森繁久彌主演の『社長シリーズ』（1956-1970年）があつて、その前には『三等重役シリーズ』（1952-1953年）がありました。こう

るじゃないか！ っと思ったんですよ。

アサダ なるほど、狙いを定めたんですね。

角尾 そうそう、おじいちゃん・おばあちゃんに狙いを定めてそれに、僕、あんまり若者としやべるのは好きじゃないんです（笑）。**アサダ** どういうことやねん、それ。若者っていくつぐらいの人？

角尾 10代から20代前後の青いヤツ？ まあ、冗談ですけど（笑）。とにかく、あまり夢とか信じていない方なので、何かに向かってがんばる「青年よ、大志を抱け」っていうのは、どうもね（笑）。世のなかどうなるかわからないし、意味あるかしらって思っちゃうんですよ。だから、おじいちゃん・おばあちゃんたちの境地は、心穏やかで素晴らしいです。

アサダ もう酸いも甘いも全部やってきたがゆえの。

角尾 そう。だから、介護施設に行くと、常に心がリフレッシュされる感じ。

アサダ それはおもしろいですね。

角尾 もちろん目の前にいるおじいちゃん・おばあちゃんに楽しんでいただくことをモットーにやっていますが、半分は僕の心のリフレッシュ（笑）。**アサダ** 僕の場合は、結構世代が上の方と話すのって、こっちに知識がないからわりと勇気があるんですよ。もちろん付き合いが長くなっていくと、また違う関係性になっていきますが。**角尾** 僕は小さい頃からおばあちゃんとかと話すのが好きだったんで。

音楽で言えば、人形劇の『ひよっこりひよたん鳥』のリメイク版放送が小さい頃にあって大好きだったから、僕の元氣ソングは『ひよっこりひよたん鳥』なんです。『進めー』って歌詞にあるけど、どこに進むかは不明でしょ、ひよたん鳥は。不明の方向にとりあえず進んでいくっていうのがね、感涙（かなみ）ちゃう。**アサダ** なるほど、それでこの曲をリクエストしたんですね。

それにしても、角尾さんは声が高いですね。しかも、話しているとだんだん高くなっていく。ほんまラジオ向きだと思います。

して敗戦後、特に1952年にアメリカの占領から独立して高度経済成長へと向かうなかで、綿々と続くサラリーマン映画には、どうしても戦争や軍隊の記憶が入ってくるんです。

僕は、近代の戦争で兵士になるっていうのは、国家に命がけで就職するようなものだと思うんですが、高度経済成長期には、兵士だった人たちが企業戦士になっていくという大きなダイナミズムがあった。そのときに、戦時中の記憶がどのように変遷していったのかを、コメディや風刺映画から読み取るということをしています。

アサダ なるほど。そうした研究活動をしながら、「誰かと一緒に見る」ということも同時にやってらっしゃいますよね。要は、映画の時代背景がわかる方々と一緒に鑑賞会をしてらっしゃるわけですが、そうした活動はいつからはじめるようになったんですか？

角尾 ちょうど1年半前の2017年6月からです。

アサダ 結構最近なんですね。

角尾 最近ですね。僕がコメディや風刺映画を研究しようと思ったのが3年前で、しばらくひとりで研究していたのですが、僕の回りの人は、高峰秀子も高峰三枝子も知らない。話も通じにくいし、さびしいなど。それなら介護施設に行けばいくらでも専門家がい

角尾 お恥ずかしい！ 高いほうが通る？

アサダ 声が裏返っていく感じって、やっぱり聞いていて高揚感があるでしょう？ だから、ファルセットがデフォルトになっているような角尾さんの声は、とつても素敵だなんて。

介護施設での鑑賞会は、具体的にどちらでやってるんですか？

角尾 都内では板橋と昭島、たまに池袋ですね。あとは埼玉の久喜と川越。5か所ぐらいで、月1で開催しています。

アサダ 5か所で月1ということは、月5回はどこかに行つて鑑賞会をしているということですか？

角尾 そうです。さらに1か所の施設でも、別日に複数のお部屋に行く場合もあつて。

アサダ 忙しいな、それ。めちゃめちゃ介護施設上映おじさんになつてるじゃないですか。

角尾 僕は、国会図書館などに行つて調べ物するか、介護施設に行くかですね。

アサダ 思ったよりも通つてますね、すごいなそれは。

復興公営住宅は、高齢者の方のための場所ではありませんが、やっぱり下神白団地は、かなりご高齢の方多いんですよ。そこで僕たちは、音楽をきっかけにいろいろな記憶を伺っているのですが、鑑賞会はどうやってるんですか？

角尾 僕は、毎回、参加された方にリクエストを聞いて、次の月はそれをベースにプログラムを組みます。名前も記録しておいて、『誰々さんが何々をリクエストした』と上映前に話します。

映画は、丸々1本は流さないですね。1時間半以上を座って観るといのは、おじいちゃん・おばあちゃんには、身体的にきついんです。だから、編集して尺を縮めます。『ローマの休日』（1953年、日本公開は1954年）を10分とか、美空ひばりの映画を7分とか。そういうストックが、手持ちのハードディスクのなかにあつて。

これは2018年8月23日に出たリクエストのメモですが、映画だと『ローマの休日』と『愛染かつら』（野村浩将監督、松竹大船、



みなさんの思い出に残ってる曲っていうのは、 やっぱり青春の頃の記憶なんですよ。

1938年）、歌謡曲では『有楽町で逢いましょう』（歌…フランク永井、1957年）があつて、あとスターでは美空ひばりや石原裕次郎が挙がっています。

アサダ やっぱり『愛染かつら』と『有楽町で逢いましょう』は出てくるんですね。

角尾 人気ですね。できるだけ開放的な場をつくりたいし、さまざまなリクエストに応えたいし、一人ひとりのお話も聞きたいから、映像は短く編集します。歌謡曲は、本人が出てくる映像をなるべく探して流すようにして。

アサダ そっちのほうが盛り上がるから。

角尾 全然違いますね。

基本のイベント時間は、施設側の制約もあり、約45分です。鑑賞中はじっとしていることになるので、まずはちょっとした体操をして、そこから鑑賞会に入ります。体の部位に番号をつけて、1番、2番、3番、4番と手を動かしていく、みたいな。

アサダ それは角尾さんが司会するの？

角尾 僕がやりますね。

アサダ なるほど、場を回すんですね。体操をして、映像を流して、ちょっとしゃべってみたいな、ファシリテーターみたいなことをやってらっしゃる。

角尾 そうです。

アサダ すごいな。

角尾 ラインナップの順番をどうするかが、また難しい。

アサダ 楽しさもあるけど、プログラムを組むってやっぱりちょっと大変ですよ。

角尾 先ほどのリクエストなら、オープニングはぐっとテンポ良くいった方がいいから、美空ひばりの『お祭りマンボ』（歌謡曲、1952年発売）からスタートして、マンボから海外の楽曲のリズムということで石原裕次郎の『嵐を呼ぶ男』（井上梅次監督、日活、1957年）のドラマ合戦の抜粋を入れ、その後に美空ひばり映画につないで、『ローマの休日』で洋画のロマンスを入れて、昭

きますね。そのなかで「当時浪江にいたときにこんなことがあつてね」っていうように、まちの話になっていく。

角尾さんのひらかれる場では、みなさんは角尾さんに対して語るのか、何人かが語り合うのか、どんな感じなんですか？

角尾 参加者は50名くらいなので、各グループで語り合われていることが多いです。その輪に僕が入っていくような。

そういうなかで、敗戦直後の『異国の丘』（歌謡曲、作者不明、1948年発売）や『上海帰りのリル』（歌謡曲、歌…津村謙、1951年発売）などを流すと、戦争のトラウマに触れてしまうときがあるんですよ。それが良いときもあるんですが、こんな苦しい思い出を蘇らせる曲は聞きたくないと怒られたこともあつて。一生懸命準備して、上映して、初めて会ったおじいちゃんに「お前の顔は見たくもない」って言われると、生きててすみません……ってなりますね。

アサダ それはへこみますね。

角尾 次第に気づいたのは、戦時中のトラウマ的記憶を抱え続けている人は少なくないということです。だから、アサダさんも震災関係のプロジェクトをするなかで、音楽を通じてトラウマに触れる、そこに対してコミュニケーションすることの大切さを書かれていたのが印象的でした。

怒ってくれたりすると、やっぱりわかるわけじゃないですか。そこには何かがあると。東京大空襲での遺体探しや、疎開先での蚕のお世話、また敗戦直後は1週間力ボチャ1個で過ごしたとか、ロマンチックな記憶ばかりでなく、そうしたつらい記憶も後の世代に伝えていくべきなんじゃないかと思うようになりました。

りんご これまでご自身のなかで「そういうばあなこともあつた」「こんなこともあつた」って、わあって思い出すことはありますが、ある曲を聴いて強い反応をされることはなかったですね。**アサダ** 曲を聴いているうちにたまたま思い出していったなかで、

戦争の話になる感じなので、いきなり戦争の話にはいかない。**角尾** たぶんそれは、僕が大人数の場でやっているからだと思う

和のロマンチックで『有楽町で逢いましょう』へとか。

その場のリクエストにも応じられるよう、ハードディスクにできる限り楽曲や映像をストックしてて。ときおり、意地悪いさんみたいな方がいらっしゃって、「つまらん」なんて言われたりするんですね。

アサダ 「こんなの見せやがって」「わしはこれが見たいんだ」みたいな。

角尾 そうそう。そしたら、その場でハードディスクのなかから探して流したりとか。そういう計算をしつつ、映像や曲が流れている間は客席を回って、話したそうにしてる方やつまらなそうな方に話しかけて様子をチェックして、曲が終わると「じーんとくる曲でしたね」などとコメントしながら司会に戻って、次にいくみたいな。

アサダ うわあ、大変だな。

角尾 ちなみに、『お祭りマンボ』は1952年の8月15日に発売されて、当時の売り上げランキングで3位。実は、東京大空襲を風刺した歌詞になってるんです。

りんご みなさんは、どういうエピソード語られるんですか？

角尾 みなさんの思い出に残ってる曲っていうのは、やっぱり青春の頃の記憶なんですよ。青春の頃、いわゆる思春期は人間の人格形成期で、一番記憶が強く残るという認知症の研究があります。だから、やっぱりロマンチックな話が多い。恋人と映画に行ったとか、ダンスホールで踊ったとか。あと、当時女性が映画に行くことは、遊んでると思われる印象があつたようで、お小遣いを貯めて、変装して見に行ってたとか。

アサダ そういうちょっとナンパな感じって、やっぱりあつたんですね。

音楽の話の前に、映画の話になるんですよ。映画と音楽って連動してるでしょう？ まず映画の主題歌だったからと曲名が出てきて、たとえば「浪江座っていう映画館があつてね」っていう話になって、途中からテレビがやってきてみたいな話はよく出て

んです。大勢だと、『上海帰りのリル』が聴きたい人もいれば、戦時中や敗戦直後の記憶を思い出すので絶対嫌だという人もいます。すると、嫌だと思っている人にも強制的に聴かせることになってしまふ。それで、トラウマに触れたり、気分を害されてしまったりすることが起こるように思います。

アサダ なるほど。

角尾 もちろん、これは繊細な問題で、一種の暴力にもなりかねません。なので、最近はいくつかの楽曲に関しては、よくよく関係づくりができてから流すなど、慎重にやっています。ただ、これには良い面と悪い面があるようにも思っていて、怒りを受けると自分もかなりへこむのですが、そこから学べることもあるんですね。

アサダ なるほどね、でもそれは絶対言えないですよ。

角尾 そうですね。だけど怒られるときは、たいがい「この歴史も知らない若造が！」となるので、怒りのあとは何かが発散されるのか、意外と仲良くなったりするんです。書籍を課題に出されたりもして。そうやって、暴力の責任は勉強して取るようになるという。

アサダ なるほど。そうやって、個人同士の関係になっていくプロセスはとても気になりますね。

僕らは大勢に対して一気に話を聞くことはなくて、最初の頃は必ず3人で話を聞いていたんです。まだやり方もわかっていなかったし、個別だとストレスをかけてしまっだろうなと思つて。リクエストをもらつて、ご自宅にお邪魔して、そのなかで少しずつ対話していくことで、成り立っているんです。

大人数で鑑賞会をして、仲良くなった方ができたときに、個別に話を聞かせていただくことはあるんですか？ 介護施設のなかでは、なかなかやりにくいとは思ってますけど。

角尾 なるべくお話を聞かせていただく時間は大事にしたいと思つていて、45分の鑑賞会をした後のお話タイムは、2〜3時間になる場合もあります。

そういう切り離されてしまった記憶みたいなものを、 もう一度何とかしたいっていう想いがあるんですよね。

アサダ すごくですね、そんなに。

角尾 鑑賞会に参加された方が50名として、残られるのは30名くらい。ほかの方は、お風呂やマッサージに行かれたり、ご自分のお部屋に戻られたり。なので、2時間／120分のなかでひとり4分の時間がある。それを頭に入れながら、それぞれのテーブルを回っていきます。特にお話の好きな方は、30分〜1時間お話をされることも。僕はお話を止めないタチで（笑）。だから、個人的な関係ができている人も、そうでない方もいますね。

アサダ なるほど、そうですね。

さて、ここまでの話を聞いて、どなたか角尾さんに聞いてみたいことはありますか？

参加者 編集に関して質問なのですが、この人にはこの曲を入れたほうがいいなどが、その人に対する想像を働かせることは大変だけど、同時にすごく大切なことだなと思ったのですが、そのあたりについて何か考えていることはありますか？

角尾 施設に行かない日は、正直面倒くさく思うことも多く、ぼやぼやしています（笑）。だから、行く日が決まってるのは良いことです。あの方が鑑賞を楽しみにされてる、施設も鑑賞会のつもりで動いている、ドタキャンできない！と思うと、切迫感でやります。で、実際準備したり上映したりすると楽しくなってきた。これは本当に不思議で、研究もそうなんです。

最初は面倒でしょうがないんだけど、メ切が近づいて集中し出すと、やっぱり楽しいな、生きててよかったみたいな感じになる。そんな期日やメ切の繰り返しが僕の人生だなと思います（笑）。

先ほどご紹介した8月のリクエストの場合ですと、まず、いただいたリクエストのうち、絶対入れるものと検討中のものに印をつけます。そして、このときは、『ひばりチエミのおしどり千両傘』（沢島忠監督、東映、1963年）を入れる代わりに、『愛染かつら』はなしにした。前者は『ローマの休日』のパロディなんで、セツトで流したら楽しいかなと思ったんです。そしたら、『愛染かつら』をリクエストされた方が覚えてらして！

よく出てくるじゃないですか。タケ子さんは、その曲名リストの好きな曲に丸をつけてるんですね。あるとき、丸をつけながら、ふいに2曲続けてわっと歌ってください。

いま思えば、また音楽に出会ったことで、ぎゅっと記憶が凝縮されて戻ってきたんじゃないかなと思いますね。音楽を耳にしていらない時間があまりにも長かったことで。

角尾 それはあると思いますね。いつも介護施設では、特に有名な歌手やスターの方の若い頃の姿が映り、声が聞こえてきたとき、一気に熱量が上がります。そういう切り離されてしまった記憶みたいなものを、もう一度何とかしたいっていう想いがあるんですよね。

江尻 さっきの話に戻りますが、極論を言うくと、震災後、「海の歌を聴きたくない」とかってやっぱりありますよね。

アサダ それはありますね。

江尻 そういうところで地雷を踏んじやったりするんですね。

角尾 ただ僕は、地雷は踏んでしまうものと思っている節があるんです。それによってコミュニケーションができることもあるので。満足させすぎちゃってもいかにっていう気もあって。

これまでの経験から、これを流せば絶対みなさん大満足！っていうラインナップが僕のなかにあるんですが、それはやらないようにしています。それをやってしまうと、もう満足しすぎて、そのあと話す気力がなくなっちゃうから。

アサダ 腹八分にしとくっていうことですか？

角尾 そう。ストレスをどこかにちよつとかけるといとか、次もまた観たいと思ってもらいたいなど。

アサダ 「もう満足したからいいわ」ってなったら、終わっちゃいますもんね。

あ、もうそろそろ時間ですね。

角尾 ちよつと宣伝をしてもいいですか？ 実はこの『シルバースネマパラダイス！』は僕ひとりで行っていて、そろそろ仲間を増やしたいなと思っています。介護と歴史教育を組み合わせ

アサダ そういうことってありますね。

角尾 「リクエストしたはずだ、私は今日非常にがっかりした」と。またまた、生きててすみません……って感じで。

アサダ 期待してくれてるからね。ちゃんとすべてに応えられるわけじゃないし、難しいですよね。

角尾 謝罪して、次回は絶対入れます！と固く約束を交わしました（笑）。アサダさんたちも、「次はいつ出るの？」などと催促されることはありませんか？

アサダ リクエストをいただいて、すぐにCDをお渡しできなかったりすると、「あれどうなった？」って聞かれることはありますね。

角尾 「思い出」のもつ重みが、僕らの年齢とはまったく違っていて、それはメディアの変化が最大の原因だと思っんです。

最近、昔の歌謡曲は視聴率がとれず、テレビでも放映されなくなってきました。また、昔はラジオが中心だったけれど、レコードからテレビやCDになり、いまはTunesやYouTubeが主流。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、どんなアクセスでなくなる。

僕らも、いま見ている好きな映画やアニメが、突然見られない状況になり、それを数年ぶりに鑑賞したとしたら、強い想いがこみ上がると思っんです。ご高齢の方は、この見られないスパンが数十年単位になってしまっている。だから、「技術の進歩」とか、特定の何かに向けてかんばるっていうのは「まゆつば」だと思います。それについていける人にとってしか、「進歩」ではないですから。

アサダ それは確かにそうですね。高原タケ子さんが初めて曲を聴いたときにすごく強い反応があって、それまでラジカセを持っていないし、車ももう乗っていないから、音楽にアクセスする方法がなかったと思っんです。そうして、自分が音楽を聴きたかったということも忘れていくなかで、たまたま聴いてもらえた。

新聞の広告に「思い出のなんちゃらアルバム」みたいなやつが

ることについて、誰かと一緒に考えていきたいなど。ご関心のある方は、ぜひ一緒に介護施設に行ってみませんか？ という誘いです！

アサダ それすごくいいですね。

「思い出」のもつ重みの話がとても印象的でした。いつでも好きなときに音楽や映画にアクセスできない環境下では、そういった表現に触れることで引き出される記憶の存在そのものに気づかずにいるというわけで。

ただ、一度想起されることで、「自分は確かにこうして生きてきた」と承認することが希求されるのであれば、そういった機会をアートプロジェクトを通じてどのように立ち上げるか、ヒントをいただけたと思います。

角尾さん、本日はどうもありがとうございました！



角尾宣信 つのおよしのぶ

東京大学大学院総合文化研究科、博士課程在籍。専門は映画研究、特に敗戦後から60年代までの日本のコメディ映画や風刺映画を研究。その傍ら、映像制作・編集の仕事をしていた経験を活かし、都内や近郊の介護施設にて、高齢者の方々とお話ししながら、昔の映画や歌謡曲を楽しく鑑賞するプロジェクト『シルバースネマパラダイス！』主催。また小金井市にて、高齢者の方との映像制作プロジェクト『えいちゃんくらぶ』（小金井アートフル・アクション!）ディレクション担当。

土地の記憶や歴史をかたちにするために、踊りや歌が生まれたりしますよね。

武田 カ×アサダワタル、江尻浩二郎、榊 裕美

なぞる3・2 REC

誰かの語り、その声を録ってみる

アサダ さて、「なぞる3・2」では、ゲストとして武田 力さんに来ていただきました。どうぞよろしく願います。

武田 よろしく願います。

アサダ 力さんは、パフォーマンスアーティストであり、民俗芸能アーカイバーですね。

武田 「民俗芸能アーカイバー」ってよくわからないですね笑)。アサダ 今回、僕が力さんをお招きしたのは、音楽を通じて思い出を語ることって、まちの記録になるんじゃないかって思っているところがあるからなんです。

働いたり、結婚したり、子育てをするなかで土地とかかわって、愛着や歴史が生まれていきますよね。それを記録して、それをまた別の誰かが聞いたら、ひとつの伝承になるんじゃないかってそれを意識し出したら、何かそれってちよつと「芸能」っぽいなって思ったんですよ。土地の記憶や歴史をかたちにするために、踊りや歌が生まれたりしますよね。

なので、こうした活動が、力さんから見たらどういうふうに見えるのかを聞いてみたいと思って、お呼びしました。

まず、力さんが普段何をやっているかご紹介いただいていいですか？

武田 はい。「報奏会」の最初のほうからいらっしゃった方は、

本当のことは誰にもわからないんですが、ここの六斎念仏は、一説によると室町時代、約600年前から続いている、ただ、いまは限界集落でもう片手で数えられるくらいの世帯しか住んでない。その継承にかかわるために、朽木古屋に入りはじめたのが2015年。そして、途絶えていた「朽木古屋六斎念仏踊り」が2016年に復活しました。

ここの集落は、おじいちゃん5人ご健在で、一番上が95歳を超えていて、一番下でも来年で80歳。80歳になっても若手っていう状況のなかで、いまちよつとずつ継承者の裾野を広げるようなことをやっています。

アサダ なるほど、おもしろいですね。

最初にお話したように、力さんから見て『ラジオ下神白』がどういうふうに見えるかを聞きたいと思っているんですが、いきなりそこから入ると話がでかいので、CDを聴いていただいて印象に残ってるものはありますか？

武田 そうですね、いろいろあるんだけど、何かな。最初のほうはCMが入ってましたよね。僕は、初めて聴くものばかりでした。アサダ そうですね。第1集「常磐ハワイアンセンターの思い出など」では、ロート目薬やペプシコーラの全国区のCMを入れました。あとは地元いわきの大黒屋のCM。いまはもうないんですよね、大黒屋は。

江尻 ないですね。

アサダ いつまであったんですか？ デパート？

江尻 平成まではありましたね。

武田 そういうCMや音楽って、知らなくてもどこことなく懐かしさを感じますよね。話し手の思い出が語られて、音楽と重なり合っていく。そうした個人的な物語とその時代にみなさんが聴いていた音楽がオーバーラップしていくというのは、僕はその時代に生きていなかったけれども、どこことなく惹かれるところがあるというか。何かいいなって思ってしまうのは不思議だなっていうのが、まず率直な感想としてありました。

僕が大学時代に池袋にいて、その頃付き合っていた彼女と同棲していたっていう話はしましたよね。

アサダ さっきラジオネームで出ていただきましたね。

武田 完全に油断していました（笑）。

アサダ 僕が当てたんじゃないけどね（笑）。

武田 その頃、僕はある大学の教育学科に通っていたんですよ。卒業したあとは小学校の先生になろうと思っていて、社会人1年目は、幼稚園で働いていました。

話すと長くなっちゃうので端折りますが、ひよんな縁で演劇のほうに行っちゃったんです。そして、俳優として海外のいろいろなところで公演をしているうちに東日本大震災があって、それがひとつのきっかけになって、今度は自分で作品をつくるようになりました。

でも、作品をつくるって言っても、何に根拠を持ってつくったらいいのかわからない。そこで僕がアプローチしたのが、アジアの民俗芸能だったんです。古来からずっと受け継がれている民俗芸能の構造から、どうやって演劇的なことが発生するのかというところから作品をつくりはじめて、そうこうしてるうちに滋賀県高島市の朽木古屋集落に伝わる「朽木古屋六斎念仏踊り」と出会いました。

アサダ なるほど。

武田 今日『想起の音楽』持ってきたんですけど。

アサダ ありがとうございます。これは僕が最近出した本です。

武田 この本、すごくおもしろかったです。

アサダ ものすごく付箋つけてくれてますね。

武田 そうそう。

アサダ いや、もう書いてよかった！ こういうのを見ると本当に。

武田 アサダさんは音楽ですが、僕は一応専門が演劇なんですよね。この本は、劇場論や観客論としても読めるなと思いました。あと僕が先ほど話した、朽木古屋という集落に入っておじいちゃんと話をして、彼らから踊りの「振り」を引き出そうとすると忘れていることもあるんですよね。それをどうやって掘り起こすかということにも通ずるところがあるなど。

アサダ なるほど。今日は、違う土地に住んでる人の記憶をなぞるということをテーマにこの場を設けさせてもらっているんですけども、そういう話はメンバー内でも結構してきましたね。

たとえば、住民さんが音楽を通じて当時のいろいろな思い出を話してくれるんですが、CDで繰り返し聴いてると、なんだかよくわからない影響を受けてくるんです。こっちが知らない曲にもかかわらず、何かを思い出させてくれたりする作用がある気がしています。

これまでまったく違う経験をしてきていて、その曲も一回しか聴いたことがなかったり、まったく知らなかったりするんだけれど、なぜか自分にその話を重ね合わせたときに湧き起こってくるものがあるっていうのは、おもしろいなと思うんですよね。

りんごさんもそういうことがあったと、前に『SMAP×SMAP（スマスマ）』の話をしてたよね。

ちよつとそのCMをかけてみましょうか（CMが流れる）。

CM お届けしたのは、1962年の懐かしのテレビCM、ロート製薬のロート目薬でした。



初めて聴いたにもかかわらず、どこか懐かしさを感じるのは、 「身体」を介しているからだと思うんですね。

りんご このCMはこのCDで初めて聴きました。私の世代だと、ロートって言ったら、「ロート、ロート、ロート、ロート製薬」なんですよね。それがちょうど22時から始まるバラエティ番組『スマスマ』の前に流れていて。

アサダ ああ、みんなめっちゃうなずいてる。

りんご それで「ビストロS.M.A.P」のコーナーが始まるんですよね。ちょうどその頃、高校3年生で受験期だったんですけど、母親が『スマスマ』が大好きでこれだけは欠かさずに一緒に見ていたんです。それまでずっと受験勉強をがんばって、22時前にこのCMを見てから『スマスマ』を見てたなって、このCDを聴いていたら急に思い出して。

私ちょうど去年の今頃がすごくしんどい時期で、いろいろと仕事のことなんかでわたわたしながら「ああ、まじもうやってらんねえな」って思ってたときに車でこのCDを聴いて、受験期のことを思い出したんですね。あのときもすごくしんどかったけど、自分がんばってたじゃん！ って。なんかがんばってた自分がいたことを思い出したら、何かまたがんばれる気がしてきて。自信が湧いてきたんですね。

人の記憶と自分の記憶を勝手に重ねて、いろいろ思うことがあったんです。

武田 確かに、企業の名前みたいなどころからリンクすることもありますよね。実際このCMは聴いたことはないけれど、「ロート製薬」っていうところずつながる。

アサダ たぶんいつだって共通項は何かしらあって、リバイバルを聴いて別の歌詞のバージョンは知ってるとか、自分の世代だったらって想像したり、なぞり方はひとつじゃないですよ。

僕の場合は、編集するときに何度も聴きながらいじってるから、逆にまったく自分の経験がないほうが入り込めるというか。特にそれを感じたのは、第4集のふたりの漁師の話ですね。

武田 あれね。

アサダ 当然、僕は航海に出たことがないので、妄想しながらつ

いまの話聞いていて、江尻さんとだいぶ共通項があると思うんですが。

江尻 1時間ぐらいいしゃべりたいですね（笑）。

武田 お願いします。

江尻 俺も演劇をやっていた時期があって、東日本大震災後に、海外から戻ってきたんです。で、念仏踊りにジャンル分けされる、いわきの「じゃんがら念仏踊り」というのがあるんですが、そのなかで一目見て惚れ込んだ「横川じゃんがら念仏踊り保存会」というところに入って4年目なんです。太鼓を触らせてもらってからは、3年目。

じゃんがらって、普通は青年団みたいなところがやるから20代が主力なんですけど、その地域は山の中腹で若い人がいなくて、60代で若手なんです、やっぱり。だから、このままでは絶えてしまうっていうことで、僕のようなよそ者も入らせてもらって。

その人らは古いのが大好きで、40年前に教えてもらったこと一切変えずにやってるんですね。京都や奈良だったら何百年も続いていることって珍しくないと思うんですが、いわきって自分らの時代でよそよりかっこいいものを目指して、どんどんリニューアルしちゃうから珍しいんですよ。だからバラエティがある。

でも、この地域は40年前からずっと同じ。そうするといわきでもずっと遠くのほうに暮らすおばあちゃんとかが、「あつ、私の子供の頃、じゃんがらってこうだったわ」みたいな話をし出すんですね。太鼓をつける位置は、普通お腹のあたりなんですけど、横川は山間地なんで、脛すねなんです。低いことがかっこいいからって、そうなって。

武田 それは一緒だわ。

江尻 前にドンと飛んだり、下がったり。かと思うとじゃんがらって、基本的に田んぼやっていると、こう優雅に動くじゃないですか、全国的には。でも横川は急に片足立ちで伸び上がったとかはするんですが、基本的には低いのがかっこよくて、このまんなずっと低い姿勢でこうやるんですね。

くりました。赤道を越えるとき赤道祭をするっていうのは、どんななの？ とかって思いながら。加山雄三をデッキで聴いてたとか、学生がレコード班でレコードかけるんだとか。海の上でもレコードが鳴ってるんだなって。

そういうのを想像しながら聴いていると、編集し終わってさあ寝ようってなったときに、眠れないんですね。

武田 頭のなかにイメージがあって。

アサダ 何ですかね。話をしてくれている人のなかに入り込んで翻訳してる感じっていうか。何回も繰り返し聴くことで、何かが起きるんですね。

武田 初めて聴いたにもかかわらず、どこか懐かしさを感じるのは、「身体」を介しているからだと思うんですね。たとえば、ある時代特有のしゃべり方とか歌い方というものがあって、そういうところに、もしかしたら無意識のうちに亡くなった祖母の声の出し方を思い出したりしているのかもしれない。

先ほどお話しした六斎念仏など、芸能というのは基本的には身ぶりの繰り返しなんですよ。農作業なり林業なり、その土地で大切にされてきたもののアーカイブのような機能を持っていて、その行為を繰り返しながら必要な身体性を養っていく。そういう機能が、ひとつ芸能にはあるような気がしていて。

いわゆる振りを覚えるっていうことは、一応僕はプロなのでそんなに難しくないんですよ。いまは映像もありますしね。でも繰り返し返していくうちに、「あつ、こういうふうに身体を使うのか」っていう、振りをそのままやるということではない、「深み」みたいなところにどんどん入っていくことがある。そういう深みがあるっていうことが芸能の豊かさだと思っし、古くから連綿と続けられてきたことを感じられる。そうしたプロセスは、ラジオと同じように、イメージを想起していく感じがするんです。

アサダ 身体でね。

武田 「聴く」っていうのも身体ですよ。

アサダ そうですよ。

武田 めちゃくちゃ似てますね。

アサダ お、立ち上がった。

武田 僕がやっている六斎念仏は、太鼓があつて撥はたきがあつて、鉦かねと念仏、あと笛があるんです。基本的にはこういう動きなんです。これを叩きながら回っていくと、太鼓も結構重たくって、身体だけで振ろうとすると速攻で手首とか腰とか肩を壊しちゃうんです。



個人から個人へどう渡せるのかっていう可能性は、とても大事だなと思いますね。

僕の場合は、いかにこのあたりで振れるか。背骨のもうちよつと下のところで、全身で体重を移動させながら送っていけるかっていうところなんです。おそらくは全身を使いながらやっていく農作業を現したんじゃないかなって。

アサダ 圧巻でした。

武田 ありがとうございます。

江尻 ものすごい重い荷物を背負うときに、顔が地面につきそうなほど重かったとかって言うんですけど、斜面だから顔が地面にめいっばい近づくんですよ。この低さには、そういう土地のつくりともあるんだろうと思います。

あと普通は拍が決まっていって、メトロノームで打てるような拍なんですけど、横川は延びるんですよ。『デンデコデンコンデーンデンコンデンデコデンコンデーン』とか言ってる。

武田 ああ、なるほど。

江尻 そこは息を合わせないといけないんですよ。それが芸能だなと思う。って、こういう話は延々と終わらないのでこの辺で止めます（笑）。

武田 おもしろい話は、いっぱいあるんですよ（笑）。

念仏とか鉦を唱えないときに、じゃあ言葉でどういうリズムを取るかっていうのもまた特殊性があって、口承ですよ。『デンテコーテンテコー』とか、それに合わせた振りがいろいろあるんですよ。

江尻 口で言った通りに、聞こえるようにやれとか言われます。

武田 それを言えないと叩けないっていうのはあります。

江尻 そう。音符じゃはまらないリズムとかが絶対にあって。

武田 それは絶対にあります。

江尻 たとえば「テレスクステンステンテン」だったらそう叩けみたいな。「そこ、スクって聴こえてねえだろ、おめえー」って言われて、「え、やってもらっていいですか？ うわっ、ズク」って聴こえるわ」みたいな。なんかそういうことを延々とやるんですよ。

やはり「身体」っていうところとかかわってくるなと思っています。

武田 個人的な物語をラジオCDにしている人が聴く段階で、ある種のパブリックというか、公共性は持ちます。つまり個人からそのまま個人ではなく、編集をして、ある程度多数の人に聴いてもらう。ただ、ラジオっていう媒体のおもしろいところは、それを個人で聴けるっていうところだと思います。

アサダ はい。たったひとりで聴ける、受け取れる。

武田 伝統芸能の話をもうちょっとさせてもらって、いまお話があったように、解釈の仕方っていういろいろあるんですよ。僕がかかわっている芸能は、いままでと同じやり方では継承ができなくなっている事実もある。じゃあ、何を変えて、何を変えないままやれるのか。もちろん身体も変わってきます。しかも僕は、その土地で生まれて育っているわけでもない。でもそんな僕でも共有できる場所がある。つまり、それも「個人」として受け取っていることだと思います。

個人から個人へどう渡せるのかっていう可能性は、とても大事だなと思います。あまり規定しすぎちゃうと、受け取れる人が少なくなってしまうのかもしれないけれど。

特にラジオは、イメージとの結びつきが強いですよ。いつでも聴けて、こういうタイミングやシチュエーションかっていうのも自分で選べる。その場にいないしね、相手が。だからこのCDの話し手も、もしかしたら実在しない人なのかもしれないってこともあり得るわけですよ。それは、演劇的だと思う。そのなかでどうやって聞き手の——こっちは知らないわけですけど——イメージに働きかけることができるのか。

僕がやっている伝統芸能も100年後まで続いているとして、僕は100年後のその人たちを知らないし、しかもその土地でやっているのかわからないけれど、その人たちに向けてやっているし、いままでもずっとそうだったなと思います。

アサダ 力さんの話を聞きながら、やっぱりラジオは、このコ

武田 わかります。

江尻 さっきの振りの話で言うと撥の振り方っていうのがあって、俺も一応演劇とかやってたし、もしかしたら俺のほうが理想に近いんじゃないのみたいな感じで、こう打ちながらやってたら、「お前は全然ニュアンスが違う」って言われてすごく悩んだことがあるんです。で、結局俺の結論は、撥の先にぼんぼんが付いてんですけど、これは「人魂」だっと思ったんですよ。つまり、人魂が飛ぶような動きなんです。

俺は全部が翼みたいに、こうきれいに振ってればいいと思ってやったら、どうやら自分はいないんですよ、黒子なんです。これがふわふわ飛んで、実際回っていくときに成仏するらしいんですよ。「成仏だからそこは気持ち込める」みたいなことを言われたりして。

そうやって、自分でやってみて怒られて、やっとわかってくることであって、身体性や精神性を共有することにもつながるんですよ。これはすごくおもしろいなど。

アサダ なるほど、身体で繰り返していくとって、ニュアンスや意味を越えていきます。もちろんそのニュアンスに関する理論や解釈はあるんだけど、わざわざそれを言わずとも、身ぶりに現れちゃっている。

個人的な経験や記憶を通じて歴史や民俗を残そうとするときに、音楽や踊りなど、身体や感性に訴える何かをあいだに噛ませることによって、そこで語られる物語の受け止め方が変わるんじゃないかって考えるようになったんですよ。だから、『ラジオ下神白』がまちの方との交流や支援、ケアの文脈だけではなく、別の土地で語られることの意味っていうのあるんじゃないかなって。

しかもそのタイミングは、やっぱりいまだからこそなんです。プロジェクトをはじめたのは2015年12月からです。たぶんすぐにはこういうことはできなくて、みなさんの生活が落ち着いてきて、ぼつぼつ語り出した個人的なことをかたちにするには、震災7年目にしてようやく。そう考えると、出自は違うにせよ、

コミュニティで起きていることを、時間や距離を超えて感覚的に共有できるメディアなんだなと思いました。

団地の集會場で直接会えなくても、声や音楽を通じて「あの人がどうしてるかな？」と話合う。ロート製菓のCMから昔のことを思い出して、なんかちよつと元気になったりするとかっていうのは、僕はすごく可能性があると思っています。

聞かせていただく話も、初恋の思い出や若いときの仕事の話がほとんどで、震災の話はたまにしか出てこないですよ。それでも、ふいに震災の出来事とつながることがある。そのなかで何か話し手と出会った感じがする。実際に会いに行ったら、「あ、あの声の人だ！」みたいになる。そうやって、離れた土地でも誰かと出会ったり、かわつたりすることができんじゃないかな。それって、わりといいことだなと勝手に思っているところがあって、いろいろな話を聞いて、自分のなかで整理されたところがありました。

力さん、どうもありがとうございました！



武田 力 たけだ りき

パフォーマンスアーティスト／民俗芸能アーカイバー。滋賀県の過疎の進む集落で古来より継がれてきた六斎念仏の「継承」を担う。こうした民俗芸能の構造に着想を得て、糸電話、警察署員との対話、たこ焼きなどを素材に現代に作品を展開。民俗芸能と芸術との互恵的なかわりから、社会課題を観客とともに軽やかに思考する作品を展開している。アーツコミッションヨコハマ2016、2017年度クリエイティブ・チルドレン・フェローアーティスト、2019年度国際交流基金アジアフェローにそれぞれ選定。

<http://riki-takeda.com>

Photo by Kenji Seo

4町（富岡・大熊・浪江・双葉）の2018年

浪江町では避難先から戻ってきた子供のための学校が開校。
富岡町でも町立学校が再開され、まちで育っていく子供たちの姿が見られるように。



浪江町

震災時の住民登録人口 **21,434人** ▶ 居住者 **873人**
避難者 **20,509人**

- 4月5日 浪江にじいるこども園開園
- 4月6日 なみえ創成小学校・中学校開校
- 5月 「特定復興再生拠点」整備に向けた除染開始^{*1}
- 8月1日 町内で民間の歯医者が診療を再開^{*2}

双葉町

震災時の住民登録人口 **7,140人** ▶ 居住者 **—**
避難者 **6,898人**

- 2月13日 休憩施設「双葉町ふれあい広場」が、中野地区から国道6号沿いに移転
- 5月24日 町とJR東日本が双葉駅に東西自由通路と橋上駅舎を整備するための施行協定を締結
- 8月6日 JR常磐線双葉駅橋上化及び自由通路新設工事に関する起工式が行われる
- 12月25日 「避難指示解除に関する考え方～避難指示解除に向けた諸条件とスケジュール整理～」を策定

大熊町

震災時の住民登録人口 **11,505人** ▶ 居住者 **—**
避難者 **10,400人**

- 5月24日 町役場新庁舎建設工事起工式
- 6月26日 大熊町商工会大川原連絡事務所開所式

富岡町

震災時の住民登録人口 **15,960人** ▶ 居住者 **826人**
避難者 **12,240人**

- 3月9日 富岡町特定復興再生拠点区域復興再生計画が認定される
- 4月6日 富岡町立小中学校が町内で再開
- 4月14日 8年ぶりに「桜まつり」が開催
- 4月23日 ふたば医療センター附属病院が診療開始
- 7月11日 富岡消防署新庁舎が町内で開署
- 8月15日 8年ぶりに「麓山の火祭り」が開催（福島県指定重要無形民俗文化財）

※震災時の住民登録人口は、『ふくしま復興ステーション』「平成23年3月11日現在の住民登録人口」を参照。居住者数は、浪江町は住民登録の有無を問わない数、富岡町は住民票ありの数。各自治体のウェブサイト等を参照（浪江町・双葉町は2018年12月31日現在、大熊町・富岡町は2018年12月1日現在）。

※2018年の出来事については、浪江町の*1は『なみえ復興レポート』（令和2年1月版P.8）を、*2は『福島民友新聞』（2018年8月2日）をそれぞれ参照。

双葉町は『双葉町復興ポータルサイト』「2018年（平成30年）の町の動き」を参照。
大熊町は、大熊町復興通信「震災後の経緯 平成30年（2018年）」を参照。すべて最終閲覧日は、2020年2月26日。
そのほかはすべて『ふたばぐるぐるMAP vol.4』（ふたばの明日を考える会、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター相双地域支援サテライト）を参照。

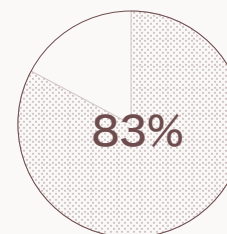
下神白団地の2018年

これまでは震災前の居住地で棟がわかれていましたが、退去した部屋に新しい入居者がやってきて、この年から次第に震災前の居住地が交さるようになってきました。

居住世帯

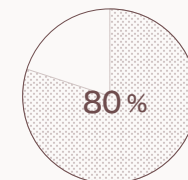
合計 **166世帯**
前年比 **-21世帯**

入居率



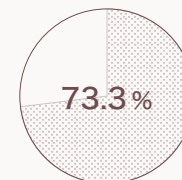
1号棟

28世帯
前年比 **-1世帯**



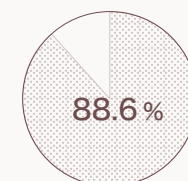
2号棟

33世帯
前年比 **-11世帯**



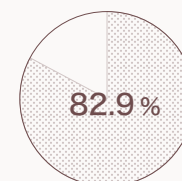
3号棟

31世帯
前年比 **-2世帯**



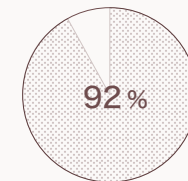
4号棟

29世帯
前年比 **-3世帯**



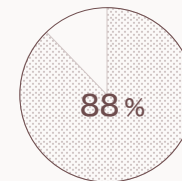
5号棟

23世帯
前年比 **-2世帯**

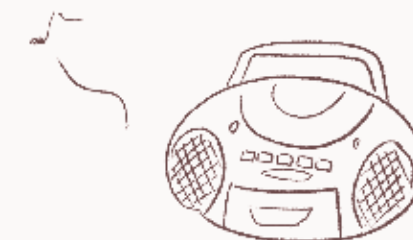


6号棟

22世帯
前年比 **-2世帯**



※「県営住宅下神白団地入居者世帯数・世帯率推移」（下神白団地自治会、2018年4月）





第5集

変化と連なり さよならのかわりに

横山晴男さん・洋子さん	収録日 2018年9月25日	会場 南相馬の横山家
原田洋星さん・トヨさん	収録日 2018年10月25日	会場 富岡町の原田家
脇坂哲男さん	収録日 2018年6月25日	会場 浪江町の喫茶トレド前ベンチ



変化と連なりさよならのかわりに

第5集に登場するのは、こちらの8名です。迷いとためらいのさなかのさやかな伴奏として、どうぞゆっくりご覧ください。

聞き手



江尻浩二郎



りんご (榎 裕美)



アサダワタル

語り手



横山洋子さん



原田トヨさん



原田洋星さん



脇坂哲男さん

横山晴男さん

収録内容

- ① オープニング
- ② エピソード1／横山晴男さんののど自慢大会
3. 楽曲1／小林 旭『昔の名前で出ています』
- ④ エピソード2／横山ご夫妻の出会い〜洋子さんがレコードを聴いた夜
5. 楽曲2／ちあきなおみ『喝采』
- ⑥ エピソード3／横山ご夫妻のいま 下神白団地での思い出とみなさんへ
- ⑦ エピソード4／原田ご夫妻の出会い〜東京・横浜時代と洋星さんのあの曲
8. 楽曲3／フランク永井『おまえに』
- ⑨ エピソード5／トヨさんの戦中戦後と窓辺で聴いたあの曲
10. 楽曲4／石原裕次郎『夜霧も今夜も有難う』
- ⑪ エピソード6／原田ご夫妻のいま 下神白団地での思い出とみなさんへ
- ⑫ お知らせコーナー／ゲスト：脇坂哲男さん
(浪江町喫茶トレド マスター)
- 楽曲5／マイルス・デイビス『So What』
- 楽曲6／山口百恵『さよならの向こう側』
- ⑬ エンディング

オープニング

アサダ みなさん、こんにちは。『ラジオ下神白 あのとさあのまちの音楽からいまこへ』。このCDでは下神白団地の住民のみなさんのまちの思い出とともに、当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けします。

第5集のテーマは「変化と連なり さよならのかわりに」。下神白団地に住まわれたあとに、もとのまちに戻られたり、別のまちへと転居された住民さんの声を収録しました。元4号棟住民で、現在、南相馬在住の横山晴男さん・洋子さんご夫妻。元2号棟住民で、現在富岡町在住の原田洋星さん・トヨさんご夫妻。そして、お知らせコーナーでは、4号棟の渡部茂子さんと親交のある、浪江町の喫茶トレドの店長・脇坂哲男さんにもご登場いただきました。

それぞれのいまの生活の現状とともに、下神白団地でつながった一人ひとりへの感謝の思いが声と音楽で綴られます。

まずは横山晴男さん、洋子さんご夫妻です。横山晴男さんのリクエストは、小林旭で『昔の名前で出ています』。そして、洋子さんのリクエストは、ちあきなおみで『喝采』。それではどうぞ。

エピソード1

横山晴男さんののど自慢大会

アサダ リクエストカードを入れる黄色いポストは、晴男さんと平子さんにつくっていただ

きましたよね。最初に晴男さんからリクエストカードをいただいて、そのあと、晴男さんと洋子さん、ふたりともリクエストをいただいた。で、晴男さんのほうが、井沢八郎『男傘』っていう曲でしたよね。僕、あの曲初めて知りました。のど自慢大会かで歌ったそうですが、それっていつ頃？

晴男 18歳のときだから、まあ50年はまわったな。

アサダ それ、浪江でやったんですか？

晴男 浪江の手前の双葉町。あの頃の体育館って、落成記念っていうとそういうお祭りをやって、NHKさんのこと呼ばって、あちこちでのど自慢多かったの。昭和43年頃だ。アサダ 『男傘』を歌おうってなったのは、なぜですか？

晴男 まあいたずらだよ、どうってことない。聴いただけで、練習なんかしてないよ。

アサダ あの曲って、かなり勇ましい曲じゃないですか。

晴男 はい。あの声では歌えねえけども、井沢八郎は高音でいい声出してんだ、もとは。アサダ そうですよ。高音だけでも、どやすような感じっていうか。

晴男 そうそうそうそう。

アサダ (井沢八郎『男傘』が流れる)

アサダ ちなみに結果から聞きますけど、あのキンコンカンコンカン……。

晴男 2点です、2点。

一同 (笑)。

アサダ ありがとうございます。

晴男 たまたま。1点っていう時代もあったんだ、あの頃は。

アサダ 1点？ 容赦ないですね。

晴男 うん。こんな格好で、ジーパンはいて、シャツ着て。

アサダ ジーパンいいですね。

晴男 予選も同じような支度で行って、まあ、歌い方がおもしろかったんだね。若いし、一回テレビに出すかって。ほんで、出してもらった。

アサダ おお！

晴男 だから、本番のテレビでも映ってるの。みんなテレビにくぎづけだった。やっとテレビも一家に1台くらいずつ普及したから(テレビ)出たら、俺も小僧だったから「なんだお前のところの息子、よくがんばったもんだ」なんてやつち。

アサダ やっぱり歌が好きだったんですね。

晴男 でも、駄目だったの。

洋子 おばあさんが好きだったのね。似てんじゃないの？

アサダ え、お母さんがってことですか？

晴男 おふくろはうまくて。みんなから、歌え歌えなんてやつち、どこさ行っても歌ってた。

洋子 お母さんは、何かの拍子で集まって歌ってたね。

晴男 ほら、部落の婦人会で、1泊で湯入るなんてあった時代だもん。それに行くと、必ず歌ってたっていう話だ。

洋子 やっぱり一番最初に歌ったみたいで。

晴男 おふくろもな。

洋子 こっちは上手ではないんだけど（笑）。
アサ そのへん、まあ血だね。
洋子 おじいさんは横笛で、盆踊りのときはやつぱり頼まれなくても自分で笛持ってます（笑）。
アサ もうね、やるもんだっていう感じ。
洋子 そうそうそう。
晴男 70過ぎまで吹いてたかね。結構達者だったんだわ、笛吹きは。
アサ 笛吹きだったんですね、お父さまは。
晴男 2代目覚えろってやってたね。私は駄目だな。
一同 （笑）。
洋子 結構難しいもんね。
晴男 大工仕事はできつけど、そのほかのことは駄目なんだ。不器用で。
江尻 いや、まだ遅くねえな（笑）。
アサ 大工仕事で基礎は積んでますもんね。
洋子 いや、難しい。息も続かないよ、あの笛は、きつと。
晴男 うん、確かに。ハーモニカは吹いたんだよ、俺は。おふくろの教えだったから。
アサ お母さまはハーモニカも吹いて、歌も歌って、お父さんは横笛を？
晴男 うん。うちのいとも一回、遠藤実先生について、でもやつぱりお金の面で途中で諦めたの。
アサ 歌唱の指導ですか。
晴男 うん。俺も本当は200万あつと、あの当時、プロ歌手になってたんだった。
洋子 初めて聞いた！
晴男 小林旭がおじの甥っ子だから。

アサ え！ つながりがあるんですね、小林旭さん。
晴男 いまでも健在。ありますあります、東京渋谷でね。
アサ 大スターですね。
晴男 うん、あそこは多摩川の上だから、荒川でねえ、何つつたっけな。上野毛。そこでね、お寺やってました。
アサ へえ。
晴男 そのおじの奥さんが、小林旭のおふくろの妹なの。
アサ おお、近いな、それ（笑）。
晴男 おふくろは会ってるよ、たぶん。俺は行かなかったけどな。ただ、200万くらいあれば大丈夫だよってやつ、あの当時。昭和50年頃。
アサ 当時の200万っていうのは、結構な額ですよな。
晴男 うん、いまの2000万か、そんなくらいかかったんだな、プロ歌手になるには。
アサ ちよつと考えられたんですか？
晴男 いや、もう最初から諦めてた。
一同 （笑）。
（小林旭『昔の名前で出ています』が流れる）
エピソード2
横山ご夫妻の出会い
　　〜洋子さんがレコードを聴いた夜
アサ おふたりはいつぐらいに、どんなふうに出会われたんですか？

晴男 私どもは昭和50年に一緒になりました。アサ なるほど。
晴男 私は昭和46年に東京に出てって、49年に帰って来たんです。修業しながら。
アサ 大工のお仕事の修業ですか？
晴男 はい。その前に帰って来たのか？ だいたい同じぐらいだろ、お前と俺。
洋子 私は49年に帰ってきて。
アサ じゃあ、同じですよな。
洋子 はい。
晴男 静岡なんです。
洋子 浜松だな。
洋子 やつぱり、二十歳の頃帰ってきたいっていうか、それで戻ってきたんです。
アサ 洋子さんも浪江？
洋子 私は小高おたかなんです。
アサ 当時、何されてたんですか。
晴男 縫製業だよ。
洋子 仲人さん（をやるのが）好きな人が近くにいて、ばあちゃんなんですけど。
晴男 そうだな、昔でいう、お見合いみたいなもんで。
アサ なるほど、なるほど。
洋子 「どうだい？」とかって、それで知り合ったみたいな。
アサ なるほど。結構人ごとじゃないですか。一同 （笑）。
晴男 結構年離ちんだ、これと俺で。
洋子 5つですよ、そんなね、20も30も（離れてるわけじゃない）。私は昭和30年（生まれ）ですから。こっちは24年（生まれ）なんですけど。そんなにね、離れてるつつ

昭和43年……。
晴男 ああ、その頃、その頃。
アサ おお。すごい。
晴男 あ、西川峰子だ。
洋子 西川峰子ね。
晴男 西川峰子と……。
アサ 小柳ルミ子。
洋子 ちあきなおみ。
晴男 どこさかいったな、チェリッシュ。ほら、言ってる。
アサ あ、仰ってましたね、チェリッシュ。このレコードは洋子さんも聴いてらっしゃったんですか？
洋子 私は震災前は聴いてたよ、うん。西川峰子の何だっけな、これじゃなくて。キンキラだかね、この人ね。
アサ 何それ、キンキラって。
洋子 あなんかこういう、この方って、ハスキーじゃないですか。
アサ その曲の名前ってわかります？
洋子 わかんない、忘れた。「あなたにあげる何とか何とか」っていう歌だけど。それ（レコードを）回しちゃえばわかるけれども、壊れてつからできない。載ってないですか？
アサ 歌詞は載ってます。
アサ （西川峰子『あなたにあげる』が流れる）
アサ どういうときに洋子さんって音楽聴いたの？
洋子 どういうとき？ うーん、ご飯食べてほつとしたとき。家事のときは聴かないで

す。

アサ　ちよつと落ち着いたときに、自分でそうやってレコードかけて、針落として聴く？

洋子　はいはい。

アサ　つてことはやつぱり、ちよつとした時間、わざわざ音楽聴いてたのね。

洋子　そうですね。家事のときは、まあこれ（LPレコード）だと結構、（収録）時間あるじゃないですか、1曲じゃないから。かけといたら。

アサ　アルバムだからね、LPで。そっかそっか。

洋子　これ（シングルレコード）はすぐ聴いちゃうからさ、終わっちゃうでしょ？

アサ　これ、すぐ終わっちゃうもんね。

洋子　うんうん。だから、これではちよつと。

アサ　かけながら何かしてた？　それとも、わりとゆつくりが多かった？

洋子　黙ってコーヒー飲むとかそれぐらいだったね。

アサ　そっかそっか。それつて、お子さんがちっさかった頃？

洋子　うーん、中学かな。ちっちゃいときは、まあ寝かして、そんときくらいだね、あんまり（音を）高くはできない、起きちゃうから。

アサ　そっかそっか。

洋子　歌うことはできないけど、音痴だから。聴くことはね、みなさんの歌つてるのを聴いたり、それくらいは。自分で歌うつていうのは、ちよつと自信がないから。

アサ　ここの居間で、夜に？

洋子　うん。でも、舅^{しゅうと}さんいたから、あんまり

ポリウム高くはできないんだ。年寄りつて意外と早く休むじゃないですか。

アサ　じゃあ、アルバム1枚ずつと聴きながら、ちよつと休んでた？

洋子　うん、そうだ。

アサ　それは洋子さんにとってはどんな時間だったんですかね。

洋子　どんな時間？

アサ　わりとゆつくりとひとりで過ごせる時間？

洋子　そうだね。ちよつと飲みながらならいいんだけど、お父さん飲まないから。

アサ　あ、晴男さん、飲まないんだ。ちよつと不満そうだね（笑）。

洋子　私はそんなに大飲んべえじゃないけど――多少の、毎晩はやらないけど――うちの人は1杯飲んだら顔真っ赤になっちゃうたもんですから、いままで40何年間一緒にいるけど、お酒飲んでつていうのはないです。

日中は聴けないから、やつぱり農家なもんで。今度夜になると、ポリウム高くしては聴けないじゃないですか。まあまわりもほらね、ちよつと離れてっからいいんですけど、あんまりポリウム出しちゃうとね、なんだかあそこのうちあれだなんて言われても嫌だから。そんな感じで聴いてました。もう何十年前だよな。ちあきなおみのはほら、いまでもCDで聴いてるから。

アサ　ちあきなおみが好きなんですね。

洋子　うん、『喝采』とかね。

一同（笑）。

アサ　平子さんと出会ったのも下神白ですか？

晴男　うん、そこですよ。

アサ　もともと知り合いじゃなくて、下神白で出会った？

晴男　うん。まあ昔の話聞くと、たぶん若い頃は行き会ってつかもわかんねえ。

アサ　それ、いい話だな。

晴男　私浪江で、あちらの方は富岡だから。で、同じ建設会社のもたまにかじったこともあつから。「どこどこさ行つてた」つて話したら、「あ、俺も行つてたど」つて言ったから、平子さんも「俺もその下請けもらつてやつてたよ」つつたの。

平子さんがラジオ体操終わつと、その時間に俺、行くの。富岡でおいっちにつてやつてつから。あの頃ね、8000歩歩いてたんです、毎日。もうあれから、もう丸1年歩つてないな。去年までは席取りにも行つたの、花火大会の。

洋子　小名浜のね。

晴男　うん、席取りに行つてたんだよ、ふたりで。朝5時起きして、テープ貼つて。だから、おばあさん、おじいさん、みんな来だよ。打ち上げ花火。

洋子　最高だった、だから、3年間見せてもらつたけど。

晴男　まあ平子さんにはいろいろでね、仕事なり遊びなり、散歩にまでお世話になつて、本当にありがとうございました。あと、佐山さんらにもいろいろ心配かけたこともあるし、お世話になりました。本当にあり

アサ　ちあきなおみは、結構残つてるんだね。

洋子　うん、そうだね、CDでね。『四つのお願い』とか。あとは、XYとか。あ、これはXYでねえか「XY何とかかんとか」つて。

アサ　そうそう、これ、『X＋Y＝LOVE』。（ちあきなおみ『喝采』が流れる）

エピソード3 横山ご夫妻のいま

下神白団地での思い出とみなさんへ

アサ　20代の頃からずっと働いてらつしやつて、やつぱり家のことかもいろいろあるじゃないですか、姑さんとか、舅さんとかいたら。ご近所付き合いはどうでした？

洋子　みんなお勤めしてたから、その頃は。だから、頻繁にお茶飲みとかはなかったね。日曜ぐらいかな。震災前はそうやつてたけど、震災後はみんなバラバラになっちゃったから。隣組も友だちも。だから遠距離つつか、お茶飲みもできない。ここに来て、そういうことはできなくなっちゃったね。

アサ　じゃあ下神白団地で定期的に開催してた「カフェ下神白」なんかに参加するつていうんのは、珍しかったんですか？

洋子　うん。あそこ（下神白団地）に来たお陰でいろいろな人とも知り合つたし、浪江町は2棟あつたじゃないですか。

アサ　うん、4、5号棟ね。

洋子　みんな高齢者ばかりじゃないですか。私らの年代だったら、何とかかわかつて、

がとうございました。

洋子　下神白のみなさん、3年間いろいろお世話になりました。やつと自分のうちに来て、安心つていうか、不安もありますけど、まあそこそこ慣れました。みなさんもこれから、どうするかはわかりませんが、がんばつて、まあ高齢者の方は身体に気を付けて、長生きしてください。

エピソード4 原田ご夫妻の出会い

く東京・横浜時代と洋星さんのあの曲

江尻　続いては、元2号棟にお住まいで、現在は富岡町に戻られた、原田洋星さん・トヨさんのご夫妻です。

集会場のカフェで隣り合わせたトヨさんから、レコードがいっぱいあるというお話を伺つたのは、もうずいぶん前のことで、ぜひ見せてくださいと団地の部屋を訪ねたのは、2017年3月9日のことでした。

もう一度、改めてお話を伺おうと考えていたのですが、しばらくすると、おふたりは富岡町に戻られてしまっていて、いや、残念と思つていたところ、トヨさんが遊びに来てくださなんて言つてくださるもんで、それから、私たちは厚かましくも雁首^{がん}そろえて、本当に伺つてしまいました。

小春日和の屋下がり、早速いま、目の前におふたりの思い出の、たくさんレコードが広げられたところです。

りんご 全部横浜にいたときに買ったレコードですか？

洋星 そうです、はい。

アサダ 横浜は、何歳ぐらいのときから住んでらっしゃったんですか？

トヨ もうずっとね。

洋星 ああ、40代だね、僕が。

トヨ 違うじゃん。

洋星 何が？

トヨ その前に東京にちよつといたから。

アサダ ああ、東京におられたんですね。

洋星 うん。

アサダ もともとおふたりは、富岡出身で？

トヨ 私は富岡。

洋星 俺、九州。

アサダ あ、そうなんです。出会われたのはどこですか？

一同 (笑)。

トヨ 東京で。

アサダ 東京で。いきなりこんな話しちゃうんですよ、すいませんね(笑)。だいたいそんな話ばかり聞くんですよ。

一同 (笑)。

りんご お仕事先が一緒だったんですか？

トヨ ううん、私ら見合いなの。ね、見合いだったんだよ。

アサダ お見合いで。あ、裕次郎、ありますね。

洋星 それは古いね。

トヨ これ、古いですね。

アサダ ベスト、デラックス。

りんご いくつぐらいのときに買ったんですか。

トヨ 40ぐらい？

洋星 うん。

トヨ その頃だよ、みんなね。40か。

洋星 なんていつてもね、まだ健在のときだからな。

トヨ 40代だよ。

洋星 もうあの人が亡くなって、もう4、50年経つでしょう。

トヨ あ、そんなに経ったか。

アサダ ディック・ミネってそんな前なんですよんね。

洋星 うん。

トヨ そんな経つ？

アサダ そうか、もう亡くなられてそれぐらい。

トヨ そうだよな、淡谷のり子とかなんかの時代だもんね。われわれの代はもうマヒナスターズだとかね。だってもう、定年だって20何年前だもんね。もう23年？ だから、23年前にここへ来たの。

アサダ 60歳でこちらに横浜から戻ってこられて。いろいろここにあるレコードは横浜のときに買ってらっしゃったものが残ってるんですかね。

トヨ ほとんどそうだね。

りんご あら、テレサ・テン。

アサダ お仕事の関係で横浜におられたんですか？

洋星 うん、石川島。

トヨ 石川島だ。

洋星 造船会社。

アサダ なるほどなるほど、石川島の造船会社(レコードをかけながら)。

洋星 一丁前に給料がね、もらえるようになった

た頃からだよ。昭和32年にもう僕は新宿いたんだ。

トヨ 最初はね。

アサダ 当時は、どういうミュージシャンが好きだったか覚えてますか？

洋星 やっぱりその頃は映画ブームだったんだろ。だから、その主題歌なんかをね、よく集めてただけだね。

トヨ それがその美空ひばり？

洋星 うん。

アサダ はいはい、美空ひばりとか。

トヨ 3本立てぐらい？

洋星 テレビが出るようになってからね、やっぱりどんどん落ちていったでしょ。一時期もう、レコードっていうのはね、あまり聴くあれじゃなかったから、ほとんどテレビでガンガンガンやってるってことが多かったから。徐々に集めはじめたんだよ。

トヨ テレビが最初出たの、30何年だっけ。給料がまだ1万かそこいらなのにね、テレビが5000円ぐらいしたんだもんね。

アサダ ラジオもあったんですね。

トヨ ああ、ラジオ。

アサダ 曲を聴くっていうこともね。

トヨ そうそうそう。

アサダ まあ映画を見て音楽知るっていうのもあるし、あとはテレビっていうよりラジオですよ、ね、当時だったら。

トヨ だからあのラジオが古いんですよ。

アサダ おお、本当だ。

トヨ 真空管の。

アサダ え、あのラジオは当時使ってたやつ？

アサダ それでは聴いていただきましょう、昭和41年に吹き込まれ、50年代カラオケ時代に大ヒットいたしました、作詞岩谷時子、作曲吉田正。魅惑の低音、フランク永井で『おまえに』。

エピソード5

トヨさんの戦中戦後と窓辺で聴いたあの曲

アサダ フランク永井さんはどのへんが魅力ですか、やっぱり声ですか？

洋星 そうだね、声があればった。まあ魅力はあるわな。

アサダ この曲を買っていた頃は、もうおふたりはご結婚されてたんですか？

トヨ もうしてたよね、とつくにね。

洋星 でした。

トヨ あの頃はね、まだね、一番いいときだ、40年。ね、30なら40年ぐらいだから、一番元気でしょ。

アサダ うん。景気も良かったし。

トヨ そう、20何年、ちようどうちを買ったんだから。いくらかゆとりあったのか、わからない(笑)。あの頃は一番良かった。

洋星 いやね、このレコード1枚1枚に、それは確かに自分なりのあれが、気持ちいいうか、ひとつの何ていうんだろうな、物語があるわけだよ。そのレコードを聴いて、歌い手がどうだったとかね、ああ、あのときは良かったねって。ちようど景気がどんどんどんどん上積みになってく時代だから。

アサダ はいはい、どんどん上がってた頃ですよ。

洋星 ええ。それで、まちがどんどんどんね、砂利道がアスファルトになったり、そういう時代だったからね。めちゃくちゃに仕事もしたけどね。戸塚にいるときは横浜の工場だったから、車で行ってたけど。東京勤務もあったから。東京勤務は電車です通ってたんだ。

それでやっぱりほら、友だちでそういうレコードを好きなやつがいたからね。だから、「どんなやつがある」「こんなのがある」ってね。そうすると、やっぱり買いに行ったもんだけどね。

アサダ 会社のお友だちですか？

洋星 うん。まあ、ほとんどはやっぱ会社だね。自分のまわりでは、同じ職業を持った人、サラリーマンの方って、そう多くなかったからね。

アサダ ちよつと話戻りますけど、もともと九州から出てこられたんですね、東京に。

洋星 うん。

アサダ 出てこられて、で、トヨさんも東京に出てこられたんですが、トヨさん、もともと地元を出るきっかけって仕事ですか？

トヨ そうだ。その頃は、ここって何もなしよ。それこそ働くところも。

アサダ お勤めされてたんですね。

トヨ 私らのときにはまだね、中学っていうのはなく、小学校6年生までだったんだよ、義務教育つつうのは。あと高等1年、高等2年っていうのがあったんだよ。義務教育ではないんだけど。それと、あと青年学校っていうの、あったよね。そして、ちようど戦争中だったじゃない。それで学校に募集が来て、で、私小田急線の粕江^{こまゑ}に行つたの。集団就職みたいなので行つたの。その頃、トランスのあれやったり。

アサダ トランスのあれって何ですか？

トヨ 線巻きつつうの？

アサダ それは工場で、みんなで？

トヨ 工場で、寮に入って。それで、終戦のときは東京だったから。

アサダ そっかそっか、終戦は東京で迎えられてるんですね。

トヨ そう。それで、いったん帰ってきて、そ

れでまた。知り合いもいたしね、私の姉なんかもいたから、浅草のほうに。それを頼って行ったり。

よく雨が降ったときなんかここでね、石

原裕次郎の曲聴いてたの。

アサ 裕次郎いいですね。

トヨ 雨が降つてると外にも出れないし。

アサ 裕次郎の好きな曲はありますか、このなかで。

トヨ みんなあれだけどね。これが好きなの、『夜霧よ今夜も有難う』。あの歌詞好き。

◇

アサ もう1曲お聴きいただきます。主演映画の主題歌として昭和42年大ヒットいたしました。本人自ら直接制作を依頼したというこの曲。作詞・作曲浜口庫之助。石原裕次郎で『夜霧よ今夜も有難う』。

エピソード6

原田ご夫妻のいま

下神白団地での思い出とみなさんへ

アサ それはいつまであったんでしたっけ、そのおっきいレコードプレーヤー。

トヨ この震災後に捨てたの。

アサ 震災後なんですね。

トヨ もうね、みんな駄目って言われて、放射能がどうかこうとかって言われて。東電でみんなほら。そのときに置こうかって言ったんだけど、もうほら、真空管だから直せないじゃん。修理も利かないし、ね。

それで出しちゃったの。

アサ そうかそうか。

トヨ でも、一回は直してもらったんだよね。

洋星 うん。

アサ それはもう、ずいぶん長いこと使ったんですか、そのステレオシステムは。

トヨ 使ったよね。

洋星 うん。

トヨ だって、あれが出たのが45年頃でしょ。で、ここへ持ってきたんだから、20年ぐらい使ったかな。

洋星 うん、そうだな。

トヨ あ、15年だね。15年しか住まなかったんだ、ここ。そして、震災になったんだな。

りんご なんてこつちに、トヨさんの実家のほうに来ようってなったんですか？

トヨ 結局何ていうの、子供がいらないじゃん。だから、私の実家の世話になるつもりで。ここ畑だったの。そして、ここにうちを建てて、甥っ子たちに。

アサ なるほどなるほど。

トヨ そう、そういうこと。で、うちは姉が跡取りだったから。姉がまだ健在なんだけど。

アサ 甥っ子さんっていうのは、お姉さんの息子さん？

トヨ お姉さん。

りんご それで一緒に来られたんですね。

トヨ そうそう。じゃあ一緒に行こう、畑でもしながらのんびりと野菜つくって過ごそうということ。たまたま向こうのうちが売れたのよね、戸塚のうちが。売りに出したら、運よく売れたのよ。じゃあそれでね、

ここにうち建てればいいみたいな感じになったんだ。

アサ 横浜とこつちとだと、環境がらつと変わると思うんですね。

トヨ そうですね。だけど結局ね、来るならいまでもないともわりの人にも慣れない。病気になるってから行きますってわけにいかないから。

アサ 元気なうちに行っておこうっていう。

トヨ 元気なうちに来て、まわりの人とも慣れて、そして来てからすぐ老人会なんか入って、15年、なんとなくここで過ごして、みんなに慣れたの。

アサ そつかそつか。で、そうやって過ごされていたなかで、震災があったんですね。

トヨ うん。だけど実家はね、やっぱりまだ孫が中学1年だか2年で、郡山ごりやまの学校行っちゃったから。

アサ 子供がそつちに行っちゃうと、なかなか帰ってこれないですよ。

トヨ 向こうにもううち建てちゃったから。

アサ そうかそうか、逆に実家のほうは郡山のほうに行かれて、いま、おふたりがここにいてっていうかたちになったんですね。

トヨ そうそう。でもね、実家もね、小さなうち建てたんですよ。すぐそばだ、この下の通りね。年中来てくれるから。だからやっぱり、私もここに帰ってくるしかないんだよな、あそこの団地にいるよりは。

いろいろ、いろいろあったわね（笑）。でも、結構、人には恵まれたわね、私たち。下神白の人たちは元気だもんね。

アサ 結構いろんな催しをやったりとか、いろいろみなさん、やってらっしゃる……。

トヨ でも、もう（参加する人は）決まってるね。

アサ ああ、参加する方々はね。やっぱり新しい方が、集会場の取り組みで増えていくっていうのは、ちょっと難しいかもしれないですね。

仲良かった方は、おられたんですか？

トヨ 近所の人で、松本禮子れいこさん。

アサ はいはいはい。

トヨ あの方はここ行ったところだから。まあ隣だから、結構行ったり来たりしてたしね。**アサ** 何度かCDをお渡しに行ったので覚えてます。

トヨ あとほら、毎朝ラジオ体操やってたから、あそこで。

アサ いつか戻るだろうなっていうことも思いながら、みなさん、住んでらっしゃるんですね。

トヨ そうだろうね。でも、最初はね、まだまだ解除にないから帰れないと思ってたから。だから、あそこにずっと住む気ではいましたよ。まさかこんなに早く帰ってくると思わなかった。

アサ あ、もつと帰って来るまで時間かかると思ってた？

トヨ 思った。10年は駄目って言ってたでしょ。**アサ** うん。

トヨ ねえ。たまたま私も、あの頃横山さんとね、私も帰るんだわって話してて、いろいろと。

りんご カフェですか？

トヨ カフェで。あそこで知り合ったから。

アサ あ、やっぱりカフェで知り合ったって方、結構多いんだな。

トヨ でも、親子みたいだねって言いながら話してて。それで、電話番号を教えてもらったから。いくらも来たの違わないんだよね。うちは3月15日でしょ、あの人たちも3月。

アサ なんかカフェ行ったら、横山洋子さんから、実はねって話を聞いて、南相馬に家を建てて、また遊びにおいでみたいなことを言ってくれてたんです、ちょうどその時期。で、落ち着かれたら行きたいなと思つて、先月行ってきたんです。こうやって、音楽聴いたりとかして。

トヨ そののほら、ポピーの花がすごくきれいってテレビでもやったの。そのときに横山さんが電話よこしてくれて、見に行きたいからって来たのよ。そのときにちよつとうちへ寄ってって。

アサ あ、そうなの。横山さんとは下神白で出会ったと思うんですけど、さつき仰つた松本さんとか北崎さんとかはもともと知り合いだったんですか？

トヨ いや、北崎さんは夜ノ森よのもりのほうだから、全然面識はなかった。

アサ じゃあ、下神白で出会って。

トヨ そうですね。下高久しもたかくで最初知り合つて。**りんご** ああ、仮設住宅のとき？

トヨ 仮設でね。それで、たまたま向こうへ行つて、私も向こう行つたの。松本禮子さんは、近くのよ。

りんご もとからご近所さん？

トヨ うん、この前ね、集会場でね、清水の人たち、ここの部落の会合があったのよ、お茶飲み会。そのとき禮子さんが向こうから来てくれた、息子さんと。だから、来ればまたね、行ったり来たりできるけど。あとはそうだね……浪江の人、大熊の人、ああいう人たちとは結構話はしたわね。みなさん元気なんだろうね。

アサ ね、みなさん、そうですね。今年はクリスマス会もするみたいで。

トヨ あ、そう。

アサ 佐山さんが音頭取ってくれて。

トヨ ああ、佐山さんがね。

アサ うん、佐山さんすごいがんばってて、なんかちょっと僕らもかわらせてもらうことになって。明日団地で打ち合わせしてこようと思ってるんです。

トヨ あの人とは本当、一生懸命やってくれたのよ、旦那さんね。

アサ すごいですよね、佐山さん、本当ね。

トヨ 奥さんもね。

アサ うん、おふたりとも本当にいろんなことをね、世話して。

トヨ うん、本当。

トヨ 小野田さんも元気でいらっしゃる？

アサ 小野田さん元気ですね。

トヨ ご主人も？

アサ おふたりとも。ご主人とはカラオケでお会いますね。いま、水曜日と金曜日にカラオケ行ったら必ずおられるので。

トヨ あの子が大きくなったかね、何だっけ。あ

の子。

りんご マーくん。もう、いま、お兄ちゃんが4歳、5歳になって、下の弟も生まれて。

トヨ おしゃべりになった？

りんご お利口になりました。

トヨ あ、本当。

りんご 走り回って。

トヨ まだハイハイして歩かなかったんだよ。

りんご そうですよ、おしゃべりもできなかったのに。

トヨ ね。

りんご 早いな。

トヨ ね。

お知らせコーナー

ゲスト 脇坂哲男さん

（浪江町喫茶トレドマスター）

りんご ときは遡り、2017年1月31日。私たちは『ラジオ下神白』第1集に登場いただいた4号棟にお住まいの渡部茂子さんとともに、浪江を訪れました。そこで案内いただいたのは、渡部ご夫妻が経営されていた日進社印刷所。そして、その隣にあるトレドという喫茶店でした。お店にはほんのりとコーヒーの香りと、たくさんのレコードが残っていました。

そして、2018年6月。私たちは茂子さんからご自宅、そして、トレドを解体することにしたとお聞きし、解体前の姿を目に焼きつけようと、再び浪江町を訪れ、トレドのマスター、脇坂哲男さんにお会いし

てきました。

ジャズとともに変わりゆく浪江のまちを見守り続けた脇坂哲男さんより、マイルス・デイビス『So What』。そして、脇坂さんとともにトレドを支えてきた林広明さんから山口百恵『さよならの向こう側』。思い出の音楽とともにお聴きください。

哲男 はい、私は脇坂哲男と申します。

アサダ 哲男さん、よろしく願います。ちょうどいま、このトレドの前で、今日は何名かの方と打ち合わせされてるんですけど、この場所自体を取り壊される？

哲男 はい、解体です。

アサダ いつぐらいにここは解体される予定なんですか？

哲男 いつでしょうね、7月になるか、8月になるか。

アサダ 去年、渡部茂子さんに日進社印刷所とこのトレド、僕らも連れてきていただきました。そもそもこの喫茶トレドは、どんなお店かご紹介いただいてもいいですか？

哲男 もう40年やってるんですけど、昭和何年だろ、52年の12月に……。

アサダ おふたりではじめられたって伺ったんですけども。

哲男 そうです。林広明くん。同級生なんです。

アサダ おふたりとも浪江ご出身で？

哲男 出身は、私は榎葉町です。

アサダ そうなんですね。

哲男 林さんが富岡で、高校が一緒だったの。

浪江高校の商業科で。一緒にバレーボール

も2回ほどやったことあるんですよ。

アサダ すごい、へえ。

哲男 プロのミュージシャン呼んで。たぶん200人ぐらいしかないけどさ。

アサダ でも、それでもすごいですね。

哲男 ええ。サンプラザっていう、デパートみたいなところがあって、その2階で。

アサダ なるほど。

哲男 やっぱり、ほら、ジャズかけてるっていうことで、原町のほうからジャズ愛好家に来て、浪江でもコンサートやんないかっていうことでやったんですけど、赤字でした。

アサダ なるほど、そこはちょっとペイできなかったっていう（笑）。

哲男 やっぱ500人ぐらい入れないと。

アサダ 僕は、震災後に浪江に初めて訪れたんですけども、やっぱ30年前のこのあたりの景色っていうのは、ずいぶん違ったんじゃないかと思うんですけど。

哲男 違いますね。わりかし若者も多くて、こは商業のまちなんです。酒屋さんも多いし、喫茶店も多かったんですよ。レストランとかね。なかなか素晴らしいまちでした。

アサダ やっぱ活気があったというか。

哲男 ありましたね。ほんで、「十日市」なんていうお祭りもありますからね。それとあと、バレーボールのチームもつくつてた。私は男子のほうの監督やって、林さんが女子の、県の大会まで出たことがあります。

アサダ あ、すごいですごい。

哲男 で、まあ林さんはどちらかというと、

をやった縁で。それからずっと長いですね、だいたい18歳ぐらいか16か。

アサダ じゃあ、一度東京出られてから戻ってこられて？

哲男 はい。東京に6年ぐらい。私は魚屋やってんです。そのあと1年半ぐらい、日本橋のコーヒー屋さんで修行しまして。私らがここ、開店した頃はいっぱい喫茶店があったんですけど、どんどん辞めてつちやっつてね。

アサダ なるほど。

哲男 ちょうど昔は近くに役場があったんですよ。いまの郵便局のところが役場で、毎朝も。

アサダ 役場の方は多いですよ、お客さん、きつと。

哲男 8時前頃から、7時ぐらいから、いつもコーヒー用意して待ってて。

アサダ いまちようどね、メニューが確かそのへんに。

哲男 うん。メニューはこっちドリンクで、あと、スパゲティとサンドイッチと、セットですね。

アサダ おふたりとも結構音楽をお店でかけてらっしゃったんですか？

哲男 そうですね。ジャズ喫茶風にはしなかったんです。まあフォークもかけたり、あとジャズもかけたり、まあ、たまにロックな人も。

アサダ 哲男さんご趣味というか、音楽のほうは。

哲男 趣味はフォーク世代ですね。もう65ですから、フォークですね。吉田拓郎とか、井

ジャズっていうよりは、山口百恵とかが好きで。

アサダ そうか、おふたりは結構音楽の趣味が違ったんですね。

哲男 ちよつと違いますよ。

アサダ いつもどこで買われてたんですか？

哲男 近くに、うちのバレー部の後輩がレコード屋さんやってたんですね。いまは辞めちゃったんですけど、佐藤完二くんを通じて、全部予約注文して。

アサダ 結構思い出に残っているかけていた曲は、ありますか？

哲男 私のなかではやっぱり、マイルス・デイビスの『カインド・オブ・ブルー』。（マイルス・デイビス『So What』が流れる）

アサダ 長くお店のほうをね、やられてたと思うんですけども、東日本大震災後は、常連のお客さんとかとは連絡とかは取り合ったりしているんですか？

哲男 いや、みんなバラバラになっちゃって、どこにいるかわかんないんじゃないですね。バレーやってた仲間はね、連絡取り合ってるんですけど。あとは、みんなどこに避難してるんだかまだわかんないですね。地震あったときもお店にね、4人ぐらいいたのかな。

アサダ そっかそっか、あの日はお店は開けてらっしゃったんですね。

哲男 はい。ほんで、いまもうないんですけど、私は絨毯洗ってここに干しておいたんです。

アサダ まさにここ。

哲男 うん。

アサダ いま、われわれが座ってるベンチです、トレドの前の。

哲男 ほんで、乾いたからつつつて運ぼうとしたら、道路の真んなかへんでぐらーっと来たんですよ。で、ドア、あそこしかないから、出入り口。そんで、お客さんに外に出てもらって。まあ、店そのものは大丈夫だったんですけど、なかの赤レンガとかが崩れてまして。倒れなくて良かったなと。でも、あそこにあったブロックはこっちに倒れて。

アサダ やっぱり。

哲男 いつもあそこのブロックに干しくんですよ。でも、その日はこっち。

アサダ 本当ですね。たまたまこっちにその日、こちらに干されてて。

哲男 だから、でなかったら私、ブロックの下敷きになってたかもしれない。ちょうどその時間だからね。で、あそこにある奥のほうの自転車がべしやんこになっちゃって、自転車が助けてくれた、私の無事。

アサダ そうですか。

哲男 ええ。すごかったですからね、あのときの揺れは、うん。

アサダ みんなにとつて、やっぱりここはひとつのそういうたまり場というか。

哲男 そうですね。やっぱり若者を中心に、何かをね、まあジャズをみんなに幅広く伝えたり、あとバレーボールでめいっぱい体を動かして。まあ、このまちに来て、やっぱ

りジャズを広めて、みなさんにジャズってこういうもんだよっていうものを聴いてもらっただけでも良かったと思います。もう40年ちよつとで歴史は終わっちゃいましたけどね。

アサダ はい。今日は喫茶トレドを経営されていた脇坂哲男さんにゲストにお越しいただきました。どうもありがとうございます。（山口百恵『さよならの向こう側』が流れる）

エンディング

アサダ 『ラジオ下神白』あのとときあのまちの音楽からいまここへ』第5集「変化と連なりさよならのかわりに」、いかがだったでしょうか？

『ラジオ下神白』ではリクエストを募集しております。CDと同封されていたリクエストカードに番組にかけてほしい曲名と歌手名、そして、その曲にまつわる思い出のエピソードを添えて、団地の集会場の黄色い専用のポストにご投函ください。

また、CDデッキも貸し出しています。何名かの住民の方から、「聴きたいけど家に機械がないから聴けない」というご意見もいただきましたので、いつでもCDデッキをご自宅までお持ちします。

これから春に向かっていきますが、まだ少し寒さが続くと思いますので、どうぞあたたかくして過ごしてください。お届けしましたのは、『ラジオ下神白』パーソナリ

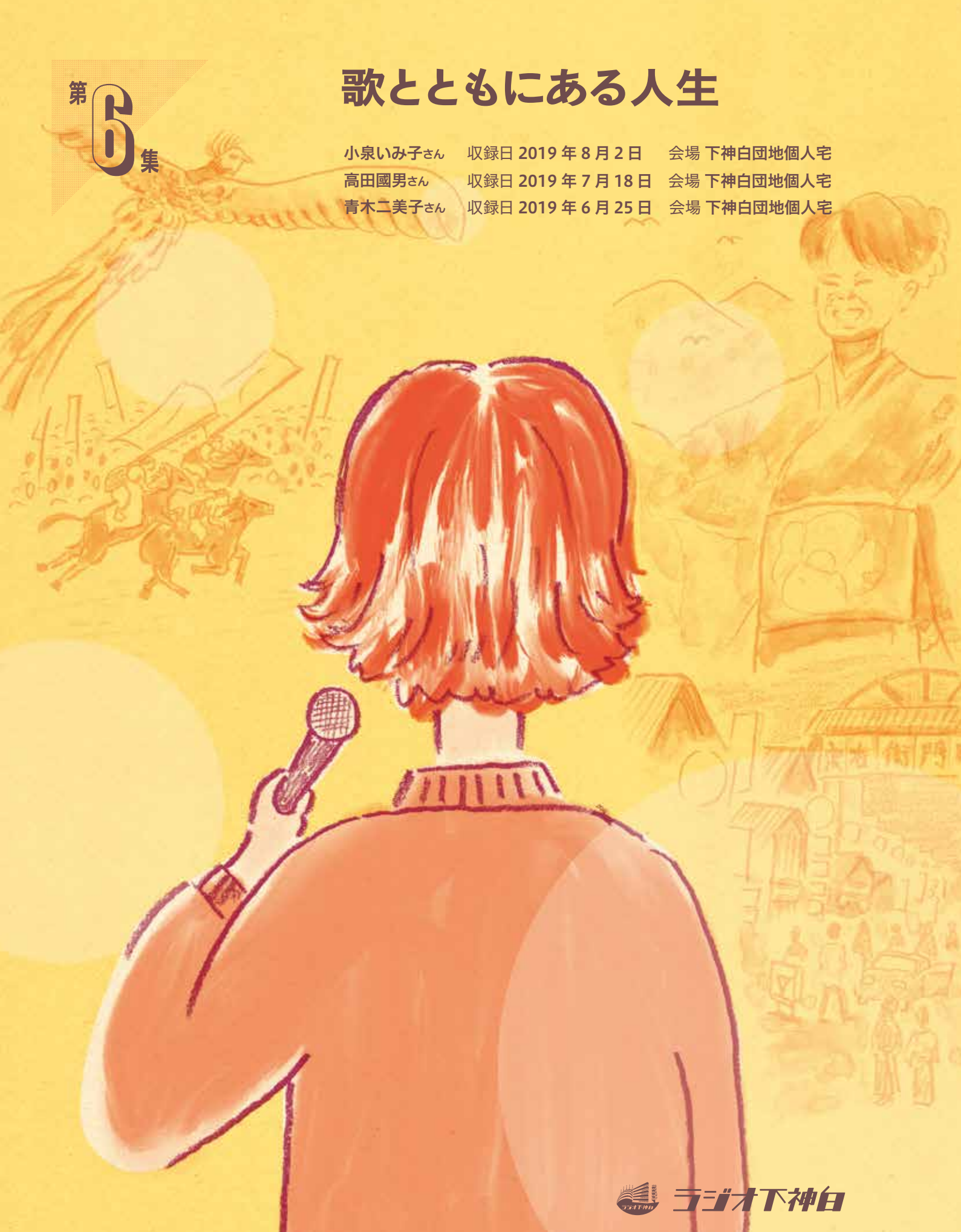
ティーのアサダワタル、榊裕美、江尻浩二郎でした。それではみなさん、ごきげんよう。さようなら。



第6集

歌とともにある人生

小泉いみ子さん 収録日 2019年8月2日 会場 下神白団地個人宅
高田國男さん 収録日 2019年7月18日 会場 下神白団地個人宅
青木二美子さん 収録日 2019年6月25日 会場 下神白団地個人宅



歌とともにある人生

第6集に登場するのは、こちらの6名です。このラジオを一人ひとりのみなさんへ。どうぞゆっくりご覧ください。

聞き手



りんご (榎 裕美)



アサダワタル

語り手



小泉いみ子さん



高田國男さん



青木二美子さん

収録内容

- ① オープニング
- ② エピソード1／小泉いみさんの初舞台
- ③ 楽曲1／都 はるみ『アンコ椿は恋の花』
- ④ エピソード2／小泉いみさんの嫁入り
- ⑤ 楽曲2／平和勝次とダークホース『宗右衛門町ブルース』
- ⑥ エピソード3／小泉いみさんの別れと青春
- ⑦ エピソード4／高田國男さんが語る歌詞の大切さ
- ⑧ 楽曲3／美空ひばり『裏町酒場』
- ⑨ エピソード5／高田國男さんが聞き覚えた民謡
- ⑩ 楽曲4／原田直之『相馬流れ山』
- ⑪ エピソード6／高田國男さんの戦後と人とのつながり
- ⑫ エピソード7／青木二美子さんの歌とともにある人生
- ⑬ 楽曲5／美空ひばり『愛燦燦』
- ⑭ エピソード8／青木二美子さんの声が蘇るとき
- ⑮ エンディング

オープニング

アサダ みなさんこんにちは、『ラジオ下神白あのとときのまちの音楽からいまここへ』、パーソナリティーのアサダワタルです。このCDでは下神白団地の住民のみなさんのまちの思い出とともに、当時の馴染み深い音楽をラジオ風にお届けします。

第6集のテーマは「歌とともにある人生」。下神白団地に住まれる以前から歌うことに慣れ親しんできた方も、この団地に来られて改めて歌うことに目覚めた方も、言葉が声になって、その声がメロディーに乗ったときにこそ伝わる、生きている実感、これはきつと歌っているご自身だけでなく、ほかの誰かの人生も豊かにしてくれるのではないのでしょうか？

今回は3号棟住民の小泉いみ子さん、そして、4号棟住民の青木二美子さん、6号棟住民の高田國男さんの語りを収録しました。演歌から民謡、定番の美空ひばりや都はるみまで、ぜひ口ずさんでみてくださいね。トップバッターは小泉いみ子さんです。いみ子さんといえば、集会場で毎週水曜日と金曜日の午前に開かれているカラオケの常連さんとしてもご活躍です。「歌うこと」と出会って人生が変わった、いまがまさに青春だよ」と仰るいみ子さん。初めて人前で歌を歌った大熊町でのエピソードや、つらいこともあった過去、そして数々の避難所や仮設住宅を回られてたどり着いたこの下神白団地での旦那さまとのお別れ、そ

してさまざまな助け合いやつながり、これらのいみ子さんの語りを2曲の歌とともにお送りします。それではどうぞ。

エピソード1 小泉いみさんの初舞台

りんご いみさんはいつぐらいからカラオケに行きはじめてたんですか？

いみ子 ここ（下神白団地）に移ってから。「カラオケやってるから出てきな」って言われて、迎えに来てもらって。

りんご 誰かに誘われたんですか？

いみ子 はい。メンバーっていうか親方だね、早く言うよね。

詩織 石原さんではなくて？

いみ子 そう、石原さん。

詩織 ああ、石原さん。すごいねえ、石原さんは。で、たまに旅行にも誘ってくれるから。そこでまた、舞台に出て歌えって言われたことが（笑）。

りんご 本当に歌、好きなんですね。

いみ子 もう迎えに来るんだから。だから、出たものをほとんど食ってる暇ねえだ。

りんご ずっと歌ってるんだ？

いみ子 私、今日カラオケだっていうときはここにやくゼリーしか食っていかないから。

詩織 そうなの？

りんご 万全の体調でお腹を整えて。

いみ子 はい。

詩織 大熊にいるときは、歌の集まりとかに参加したことはあるの？ こういうサークル

みたいな……。

いみ子 歩行者天国のとき、川井魚屋の隣の舞台みたいなところで一回歌ったことある。参加賞だったけど（笑）。

りんご ちなみに何を歌ったんですか？

いみ子 都はるみ。

詩織 いくつのとき？

いみ子 24で嫁いで、子供らも大きくなってたから、もう還暦近かったかな。初めて舞台上がって（笑）。

詩織 どうでした？

りんご 誘われたんですか？ 「舞台に出てみない？」って。

いみ子 川井さんの選挙のときに、選挙の車にいい声してたから。声がバーンツと出るっていうあれで。

詩織 いみ子さん、通る声しますもんね。

いみ子 声がでかくて困る。

詩織 いいじゃないですか。

いみ子 あだ名つけられてね。

詩織 何て？

いみ子 北島サブリって。

一同 （笑）。

詩織 じゃあ、初めて人前で歌ったのが、その……。

りんご 都はるみの、何て曲ですか？

いみ子 あれはなんだっだろうね。『アンコ椿は恋の花』だったのかな。全然歌にならなかった。それで悔しくてさ、次の水曜日にカラオケあるって言われて、それからだね。

りんご いまはいっぱい歌えるね。

いみ子 私、歌ねかったら死んでるの、いつもは。

歌いたくてもう、どうしたらいいかわかんなくなってるの。ご飯食べるよか歌ってたほうが楽なの。

りんご そんなに好きなんだ？

詩織 家でも口ずさんだりしてるの？

いみ子 うん、うん。

りんご だいぶ音楽がある生活で変わったんですね。

（都はるみ『アンコ椿は恋の花』が流れる）

エピソード2 小泉いみ子さんの嫁入り

詩織 いみ子さんは、生まれはどこなの？

いみ子 原町。

詩織 あ、原町なんだ。

りんご そこからお嫁に来て、大熊に来て。

いみ子 うん。つらい思いをして、それから、いま一番青春だよって言われて。

詩織 そうなんだ。

りんご 大熊にいたときはだいぶ苦労したんですね、そしたら。

いみ子 はい。もう、子供おぶって、田んぼの田車押したり。

詩織 農家さんだったの？ 嫁ぎ先は。

いみ子 うん。24歳で来て、地獄に落とされて、それから這い上がってきた、ひとりで。

りんご 本当に働き詰めだったんですね。

いみ子 昔はほら、味噌豆つくってたから。

詩織 あ、味噌豆つくってたんだ。

いみ子 うん、それを引っこ抜いて、束ねて、そ

れで足踏みで運んできてギーコギーコ踏んだ。昔は電気釜とかそんなのなかったから失敗してな、怒られて。

りんご お姑さんに？ 厳しかったんだ。

いみ子 そんなやったことないのを、全部覚えなくちゃなんでもね。それでわかんないから、「どうやってやるんですか？」って聞くと、「人のやってるのを見て覚えろ」って怒られて。だから農家になるのが嫌で、

長男の嫁に来れば必ず苦労すつから。それがわかってつから来なくなかったんだけど、すでに父親亡くなっていたから。

詩織 早かったんだ。

いみ子 51歳で亡くなった。

詩織 早いね。旦那さんとはお見合い結婚だったの？

いみ子 お見合いのお見合いだよ。

詩織 お見合いのお見合いだったの。

いみ子 恋愛とかでねえよ。

詩織 そっかそっか。

いみ子 相手の気持ちもわかんないで、私、大熊なんて名前聞いただけで熊出ると思って。

一同 （笑）。

いみ子 高校の試験は受かったんだけど、やつぱり実家は金ねかったから、私が犠牲になって働いて、金貯めて。私、花嫁修業として編み物と生花と習ってたんです。そしたら、免許明日来るからって言われた日に、もう結婚決まっちゃって。

りんご 決まっちゃって、困った。

いみ子 そしたら、その実家の働いてる人がしょっちゅう見に来たんですよ、私のこと。

れって。

詩織 ああ、そうなの。

りんご カラオケでも。

いみ子 でも「構わねからね、歌ったほうがいいんだよ」って言うから、『宗右衛門町』だけ歌って。「さようなら」っていうとこ、やっぱり涙が出て、顔を向けらんねなかった。「いみちゃんはいまから青春なんだから」って会津の人に来て言ってくれて。

「いみちゃんは青春っていつだったの？」って言うから、「私、青春なんてわかりません」って言ったの。そしたら、「熊と青春したんだね」って（笑）。畑いもを起こしたり、何かしてたから。牛のお産までやって。

詩織 そうなんだ。

りんご 本当に何でもやったんだ。

詩織 じゃあね、若いときね、たくさん苦労したから、いまが本当に青春だね。

いみ子 うん。

りんご そうだ、今年のクリスマス会に私たち、アサダさんとかと一緒に東京で音楽チームをつくってるんです。

いみ子 なんだかアサダさん、来ねえと思ったよ。

りんご いま、一生懸命バンドの練習してる。

小泉 東京に行ってるって聞いたから。

詩織 そうなの。いみ子さんに会いたがってた。今度、いろんな音楽の練習をしてクリスマス会で一緒に歌ってもらいたいんだって言うってたから。

詩織 クリスマス会のときにね、一緒に歌いましょう。

わかってたんです。私も先生に「10人ぐらい生徒くれっから、一から十まで教えてやってくれないか」って言われて教えてたから。そしたら、もう結婚決まったと思って、編み物の機械も持って行かれたかと思ったら、亡くなったおやじがみんな燃やしちゃったの。

詩織 燃やしちゃったの？

りんご 厳しい……。青春時代は本当につらかったでしょうけど、いまはだいぶ楽しいことがたくさん。

いみ子 だいぶ。楽しいこともあるし、つらいこともあるし。でもほら、集会場に行けばお茶会でもなんでもあるからね。

詩織 いまの十八番はなんですか？

いみ子 『宗右衛門町ブルース』。

（小泉いみ子さんの歌う『宗右衛門町ブルース』が流れ、続いて平和勝次とダークホース『宗右衛門町ブルース』が流れる）

エピソード3 小泉いみ子さんの別れと青春

詩織 いみ子さんは、ここ（下神白団地）に来る前はどこにいたの？ 避難してるとき。

いみ子 三春の体育館にいたの。三春からバスで裏磐梯に2年間いて。

詩織 ああ、2年もいたんだ。

いみ子 そして今度は東山温泉のボロい宿に入られて。で、ここができるっていうんで移ってきた。

うちの実家ってね、お父さんの父親、行

いみ子 はい。

詩織 アサダさんも楽しみにしてましたよ。

いみ子 一回、カラオケのときに面会に来てくれて。「いま、カラオケの最中だから早く行って歌え」なんて言われて。

一同 （笑）。



アサダ 小泉いみ子さん、こんにちば。アサダワタルです。いつもカラオケなどでお世話になってます。そうなんです、ごめんなさいね。取材をりんごさんと詩織さんに任せてしまつて。僕は何をやってたかと言うとです、いま、これ、後ろに流れているの、僕らのバンドの生演奏なんです。

（『宗右衛門町ブルース』の演奏が流れる）
なんと、東京で、下神白団地のみなさんの思い出の曲をバック演奏するバンドを結成しました！ いみ子さんの『宗右衛門町ブルース』もこうやってばっちり演奏しますんでね。まだまだ練習が足りないので、けれど、これから仕上げていきますんで、ぜひ、12月のクリスマス会で歌ってください。いね。ということ、いみ子さん、また団地でお会いしましょう。ありがとうございます。

続いては、『ラジオ下神白』新メンバーの鈴木詩織さんにつなぎたいと思います。詩織さん、よろしくお願いします。

エピソード4

高田國男さんが語る歌詞の大切さ

詩織 次は、下神白団地カラオケサークルの最高齢者であろうこの方、6号棟にお住まいの高田國男さんです。「口は顔のほころびでねえ」とは、高田さんが仰られた言葉です。「話は聞くべし。話はするべし。黙っているのはわからないから、まずは話をするべきだ」と。

自分の感情を言葉で発信するのってなかなか難しいですが、人に思いを伝えられる一番の手段は言葉ですよね。しゃべって見たら案外、「あら、あの人も同じことを思ってたんだ」なんてこともありますよね。そんな素敵な名言を言ってくださった高田さん。歌の歌詞をととても大切にしており、歌詞を解釈して情景を思い浮かべるそうです。このあと、高田さんは美空ひばりさんの『裏町酒場』の歌詞の解釈をしてくださっています。みなさんだったらどんな解釈をしますか？ まずは高田さんの歌へ対する思いや、歌とともに歩んできた人生を聞いてみましょう。

アサダ 高田さん、昨日カラオケに行つてらっしゃったんですか？

高田 うん、行つてみた。

アサダ さつきカフェに行つたときに、「高田さん、昨日カラオケ来てたよ」って言ってる方がいらつしやつた。

高田 駄目だ、喉悪くて駄目だわ。

とかしたときに？

高田 あとは、家を建ててる『土搗唄』っていうやつな。

アサダ そういう歌があつたね。

高田 それで『土搗唄』はあちこちしかわかんなくてやめた。俺の家内はよく歌つてやる。アサダ 奥さんがよく歌われてたんですか？

高田 かかさまは好きだったから、歌つた。そいつに引つ張られて俺も覚えてた（笑）。

アサダ みんな、作業をしながら歌う？

高田 うん。だから、原田直之さんの歌い方と俺とは違うよ。『相馬流れ山』でも何でも（『相馬流れ山』を歌う）こういうやつ。

アサダ ああ、すごい。なんか感動してしましました。いや、すごいですね、本当。

高田 いや、やつぱり、歌うぐらい。

アサダ ねえ。手もこうやってマイムをね。

高田 そう。ほんでも、歌、つぶれてたんだよ、踊りでつぶれちゃう。

アサダ でも、やつぱり覚えてらつしやるんですね。そういうのって。

高田 そう。みんな、おやじの聞き覚え。誰に教わつたわけでないから。楽譜にあらわせねえんだもの。

アサダ 楽譜に出ない、うん。

高田 だから、とにかく歌、聴いたように歌つてやんないかねんだ、歌うときは。

アサダ 耳で覚えなないといけないよね。

高田 譜面通りにやつたらギクギクになつちゃうんだ。聴きづらいの、おもしろくない。

アサダ 確かに。

高田 だから、民謡はなかなか難しいんだ。そ

アサダ あ、そうですか。声が出ない？

高田 昨日やつてみたけども、自信がなくなつた。ガラガラで駄目だ。病院ではパンバンと歌つていたけれども。なんだかこつち来たら駄目だ。

アサダ だんだん声が出なくなってくる？

高田 だから、喉が悪くなつたな。年のせいかな。

アサダ 高田さんは歌謡曲っていうか、演歌も民謡も聴きますよね、いろいろ。

高田 まあ、聞き覚えだから。別に教わつたわけでもなんでもない。昨日は、ひばりの酒場の歌……。

アサダ 美空ひばりの？

高田 うん。あれを歌つてやろうかと思ったら、駄目だった。

アサダ カラオケに入つてなかった？

高田 いや、歌う順番が来なかった。

詩織 あゝ残念。

アサダ 人が結構多いですもんね。

高田 時間切れになつちやつた。だからああいう歌の席でな、美空ひばりを歌つたのはずっと前のやつで、やつぱり酒場だけんとも、あれ、何て言つたつけな。

詩織 『裏町酒場』ですかね？

高田 ああ、『裏町酒場』。「あくめに濡れるー 赤い灯がー」って。

（高田國男さんの歌う『裏町酒場』が流れる）

高田 歌詞は、はつきりと歌いなさい。

アサダ そうかも、確かに。

高田 それが歌謡曲のいいところなんだ。それにメロディー。ところが、西洋の歌の場合

の人その人の特徴が入るから。誰に教わつたわけでねえから。

アサダ そうやって親子から通じて覚えていくんですね。

高田 だから、民謡はおもしろいな。

アサダ ね、おもしろいですね。

高田 福島にいるときには民謡クラブっていうのがあつて、そこでやつてたんだ。こつちに来てからはそんなのねえから。

アサダ 確かに下神白では、民謡はね。でも、だんだんそうやって聞き覚えする文化つてなくなつてきてますかね？

高田 ああ、なくなつてきたな。いや、これが当たり前だけどな。生きる限りにはみんな、なくなるの当たり前だから。

（原田直之『相馬流れ山』が流れる）

エピソード6

高田國男さんの戦後と人とのつながり

高田 二十歳頃になつて、終戦後、アコーディオンが流行つたから、安いアコーディオンを買つて歌つたりしてた。ギターは駄目だったんだよ。どうもギターは向かなかつたなあ。（アコーディオンは）押せばその音程が出るからよ。ギターはそうはいかない、難しい。

アサダ お仕事はずっと船をつくつてらつしやつた？

高田 そう。戦時中だからね。俺、16の年からだから。戦争になつて食糧不足の頃だから、やつぱり北洋用、何用つて、船が要つたか

はメロディーが先行して、歌詞がはつきりしないから、意味がわからない。

「歌謡曲」っていう名前だから、メロディーだけではないんだよな。そうすると、聴く人聴く人、それぞれにもう思い出すところがあるわけだ。

いま歌つた、ひばりさんが歌つた『裏町酒場』。これは歌詞通り、小暗くなつて雨に濡れたあんどんが見えるなつていうようなことを歌っているわけだから、聴く人はそれぞれに解釈するわけ。だから、いいところがある。自分の人生と重ね合わせて聴いたりなんかするわけだ。

（美空ひばり『裏町酒場』が流れる）

エピソード5

高田國男さんが聞き覚えた民謡

アサダ 高田さんはご家族も歌、好きだったんですか？ たえばお父さまとお母さまや奥さまとか。

高田 いや、俺のおやじは明治の人だから、いまのような歌謡曲なんてなかったからね、歌わなかったけど、民謡をよく。『相馬二遍返し』でも『流れ山』でも、みんなおやじの聞き覚えだ。

『田植え唄』っていうのがあんだな。歌詞覚えてられなくて、歌えないけどね。いま、この踊りをやらないから、津波で流れちゃつて。部落の若い連中がよく田植えのときにやつたもんだつた。

アサダ 『田植え唄』とか田植え踊りとか。収穫

ら。そして、年季が明けて、それから終戦になつて東京に出て行つて。

アサダ 東京に出られてたんですね。

高田 日暮里のあたりで、いまはな、せくせくしてアパートに入るけれども、当時はアパートなんかないから、もうその辺の木っ端を集めて、ものごいの小屋みたいなのをこしらえて、そのなかで米を持つて行つて、米炊きしてやつてたな。

いろんな方にお世話になつて現在があるんだけれども、あの当時の方たちはみんな、この世さ、いないはずだから。

アサダ その小屋っていうか、バラックみたいなものを建てたときっていうのは、東京は、まだ焼け野原だった頃？

高田 そうそう。東京は焼け野原なんで、初めて行つて、秋葉原に行つて、乗り換えして、そして京王線で成田のあたりに行つて、京王線は土手の上を走っているから、もう見渡す限り焼け野原。そして、きれいなお姉ちゃんたちが掘つ建て小屋から出てくるんだから。まだアパートなんかなかったんだから。そういう時代だった。

アサダ 高田さんは、見合いで結婚された？

高田 いや、恋愛だよ。昭和25年に恋愛をやつたんだ。3年付き合つて、だけど亡くなつた母さんとはなんぼ喧嘩したか。それで、いまはこんなだけど、昔は気早かつたからバーンなんて、お前。

アサダ なるほど、激しかったんですね。

高田 （母さんは）いつの間にか見えなくなつちゃつた。

「さあ、どこいった？」と思ったら横須賀のほうまで行っちゃった。姉さまのところで、迎えに行つて。仲良いから喧嘩するんだから。

アサ 奥さまとは同じふるさと？

高田 そう、俺の家内はいまの榊葉だから。ある一定の時点でやっぱり妥協する。そういう、いろいろでもつてかないと。子供が見てるんだから。

アサ そうですよね。

高田 子供は口を利かないだけで見てんだからな。ちゃんとわかつてるんだから、どっちが悪いか。だから、あんまり下手なことはできないんだよ。経験して言ってるんだから。経験しないで言ってるわけじゃないんだぞ。みんな経験してるんだ。だから、こういう大勢のところに入ったつて、どこ行つたつて、みんなもう、この人でも合わせていく。

世のなかはいろいろある。今日、みんなが来て、こうして来てくれるだけでもありがてえ。

アサ いや、こちらこそありがとうございます、本当に、僕らのほうこそ。

高田 「あそこは駄目だ、寄んねえべ」なんて言われたつて、うまくねえ。こんなん長くいるつもりでねえんだけど、これはやっぱり寿命で。まあ、そのうち近々お呼びになるんだべけれども、それまでは罪滅ぼし、御奉公と思つてやつてないとな。

みんなのために生きてるんだから。自分ひとりじゃ生きていかんねえんだからね、

たつちゅう感じみたいな。うちの兄貴は兵隊に行つて、今度、終戦になつたからなんて馬を一台もらつて、そいつに乗つてきたんだ、自分のうちまで。

そんな感じで、あと兄貴らは家にいるから、今度私はいてもいなくてもよくなつた。で、今度おじさん、母親のきょうだいが船引のまちの川端で橋本屋旅館つていう旅館をやつてたんだ。

それでただもいられねえから、旅館手伝つてこいつて言われて、その旅館に行つて手伝つてたんだ。それで手伝つてるうちに、今度、そのおじさんだつてそんなにお金ねえべ、給料もくんなねべしな。それで、浪江に。浪江はわかります？

アサ はいはい。

青木 浪江に昔、東邦レーヨンつていう会社があつたんだ、糸引き会社な。製糸場か。そこで働いたんだ。それで、うちのおじさんのすぐ前さお茶屋さんがあつたの。そのお茶屋さんは私が生まれたうちの、すぐ下のうちの息子さんだつたのよ。その息子さんは製糸場のセールスをやつてたわけ。

アサ ああ、営業屋さんか。

青木 うんうん。「こういう人に世話になつてもしょうもねえべ、自分で独立したらいんでないの」つて言つて、5、6人で来たつたか、みんなで浪江に来て、製糸場で働いてたの。そのうちに製糸場で働いてるうちに結婚したの。で、浪江の人になつたの。

アサ じゃあ、社内結婚？

人間つていう動物は。よその動物は一匹でも生きていけるけど、人間だけは駄目だ。ひとりじゃ生きていけねえ。だから、横のつながりは、やつぱやつていかなきゃならない。

エピソード7
青木二美子さんの歌とともにある人生

りん 美空ひばりさんが亡くなったのは1989年。まだ私が生まれる前の出来事でした。「人は哀しい 哀しいものですね／それでも過去たちは優しく睫毛に憩う／人生つて不思議なものですね」。美空ひばりさんを代表する一曲、『愛燦燦』のワンフレーズです。目を閉じれば人生の一コマが睫毛にとどまっている、そんな様子が思い浮かべられます。まだまだ人生を歩みはじめたばかりの私には、過去が思い出になり切れておらず、この歌詞の意味を味わうことができるのは、もうしばらく先になりそうです。

さて、最後に出演いただくのは4号棟にお住まいの青木二美子さん。浪江町から下神白団地に移り住み、これまでさまざまなつらい経験などもあつたかと思いますが、それでもこうしてお話を伺っていると、きつとその経験も意味のあるものだったんだと思わされます。人生つて不思議なものですね。

リクエスト曲は、美空ひばり『愛燦燦』。目を閉じ、睫毛に憩う過去の思い出とともに聴きください。

青木 違う、違う。そこさ、浪江の部落の女の子がその製糸場に来てたから、その女の子のうちにしょつちゅう遊びに行つたんだ。そしたら、その子の母親が、うんと世話好きで、旦那の兄貴は兵隊に行つて、ソ連のほうさ連れて行かれたとかなんつて、長男いなくなつたから嫁さまに來ないかつて、それで、結婚したわけなのね。結婚したんだかわかんないうちに、いつの間に、籍を持つてきて、あれして、わかんないんだよ。

アサ わかんないんだ。もう結婚したことになつたみたいなの？
青木 うん。そういうふうに、仲人は昔、商売やつて売つて歩いてたかな。で、よく私のうちわかつたべなんて思うぐらいに、いつの間にか籍持つてきたんだべな。私もようそういうの、わかんねえ。

アサ すごいですね。本当、昔のそういう話は。
青木 うん。そういうのすごいよ、昔は。
アサ もう、仕込まれてるね。
青木 できるんだから、そんなの持つて歩つて。私も驚いてる。いつこうなつて、いつこうなつたんだかいうて。二十歳になったときの儀式あつてよ？ 成人式は、嫁になつてから成人式の通知が來たの、浪江のね。

アサ 先に嫁入りしたんだね。
青木 來た來た。それで、そこで働いているうちに子供できたべ。で、子供できたけれども、長男ではないんだけどすぐそばに親がいたから。

アサ 親つていうのは姑さん？

アサ 青木さんつて、いつぐらいからよく歌を聴いてたんですか？

青木 私、歌大好きだからもう。

アサ 昔から？

青木 うん、昔から、若いときから。三橋美智也だとか、あの人らのときからずつと歌つてるよ。三波春夫だとか。ああいうのなんかみんな歌つてつけど、私ら、みんなわかる。こういうテレビがなかったから。ラジオあつて、書くべ、歌はじまつたよつて自分の好きな歌。帳面置いて、鉛筆置いて。そして、今度は明日。明日、その続きを書くの。そういうふうにして覚えるんだ、昔は。

三波春夫だとかなんとかそういうのは、田の草取りだとか田植えだとかそういうときに、歌好きな人がいて歌つてんのよ、そういうもんよ。

アサ 田植えとかしながら？

青木 うん、仕事しながら歌つてんのよ、昔は。そういうふうにして覚えたんだよ、私らはね。

親はね、母親はいたけど父親は早く死んでいなかったから。だから、兄貴のお世話になつてたんだ、もう。

アサ お兄さんは、結構年は離れてたの？

青木 一番上から下まで20ぐらい（笑）。

アサ うわ、めちゃくちゃ離れてる。それはもう親子ぐらいやわな。

青木 7人いるんだけど。

アサ 高等学校卒業して。

青木 卒業したつて感じじゃねえな。ただ辞め

青木 姑さん。姑さんいたけど、どっちみち長男ではねえわけだから、なんぼ亡くなつたつて言つてもな。だから、その脇さ、私がもう早くうちつくつたんだ。うちの旦那は製材所に勤めてたから、前借りでもなんでもできたわけよ、材料をな。

アサ そうですね、確かに家を建てるにはもう抜群の会社だな、製材所だつたら（笑）。
青木 で、ちっちゃい、本当1間で10畳間ぐらいのうちをつくつて、私らは私らで生活してたの。製糸場が、今度だんだん終わつて、仕事が変わつてきて、浪江にあれができたのわかるかな、バツジ工場。浪江製作所つていうと、みんな浪江の人わかるんじゃないかな、あそこら辺はね。帽子の。

アサ はいはい、帽子のね。
青木 それから、あとは学生のボタン、洋服のボタンとかね。そういうのをつくつてたんだ。
アサ なるほどね、学章みたいなやつね。
青木 やつてるうちに、私もシンナーを使うから手が荒れてきたのね。手、あんまり荒れてきて困つたなと思つたら、うちの旦那の妹は、昔は県立病院つてあつたんだ、大熊さ。大熊の脳病院つていうの。

アサ 昔は脳病院つて言つたんだ。いまの精神科病院だね。
青木 精神病院だな。
アサ 看護師みたいなことをやつたの？
青木 看護婦でないけど、雑主婦つていうね、いろいろ用を足して、看護婦さんのお手伝い。何年働いたかつていうと、本当に忘れちゃつたわ、もう。

アサ 結構、長かった？

青木 長い、長い。働いてね。

アサ それは子育てしながら働いたの？

青木 うん、そう、ばあちゃんいた、ばあちゃん。

アサ なるほどね、家にはおばあちゃんがいる。

青木 うん、ばあちゃんいたから。8人ぐらいはいたと思うな。

アサ ああ、本当。それって青木さんが何歳ぐらいの話？

青木 何歳だべ、勘定しなきゃわかんねえんだ、若いときから働いたもんだから。子供を二十歳で産んだんだから。

アサ そうだね。子供を二十歳で産んだんだったら……。

青木 うちの息子、長男が（昭和）26年に生まれたんだから。で、孫が生まれて会社を辞めたんだ。

（みんなでカセットテープを探しながら）

青木 いま、何でも出てくるようになった。

アサ こっちにあるのは美空ひばりだね。

青木 美空ひばりの歌は好きだから。

アサ 美空ひばりも、昔からずっと聴いてた？

青木 うん、美空ひばり、大好きだから。

アサ 美空ひばり、聴いてみるか。

青木 ちょうどそのときも腰痛くて入院してた人いたのよ。ばあちゃんに頼まれて、県立病院さな、「腰を手術するから来てもらんねえか、年取って俺も駄目だし」なんて言われて。で、手伝いに行ったの。そしたら、そのおじいさんが朝、何言うかと思ったら、「みいちゃん、美空ひばり亡くなったぞ」

なんて言ったの。6月頃だったか。

アサ そっか、そっか。美空ひばりが亡くなった年ね。

青木 うん、そのときも病院で手伝いしてたの、腰痛えつつって、手術すつから手伝ってくんねえかって言わつち。もう、その頃からもうずっとやってたね。

アサ 美空ひばりって何年ぐらいに亡くなったんだろう……。

青木 何でも、本当懐かしいね。

（テープが流れはじめる）

青木 私避難して話なんか全然しなかったべき、こういう部屋さ入つたらひとりだもの。

アサ そうか、そうだね。

青木 それから5年だべ。5年も6年も、毎日毎日、1か月も話しないとときもあつべしよ。ここにみんなで来て、こんなにあちこちしゃべって、わけわかんねえべ（笑）。

アサ いやいやいや、なんとか頭のなかを整理しながら聞いている感じだけど。

青木さんって下神白団地の集会場には、最初はよく出入りされてたんですか？

青木 あんま行かねえな。

アサ そっか、そっか。

青木 コーヒー飲み行ったり。

アサ カラオケとかもやってるもんね。

青木 いまはやってるね、前はやってなかった。

アサ あ、そっか。

りんご この曲、コンサートみたい。

アサ これ、コンサートの録音だよね。

りんご どこか聴きに行ったことあるんですか？

青木 一回行ったことある。美空ひばりでしょ。

一回、平まで見に行った。

アサ これ、そのときの録音なのかな？

青木 あの頃、美空ひばりが来るだなんていうと大変なあれだったから。

アサ そりやそうだよね、美空ひばりが来るなんて。

青木 それで、テレビで歌映るからって、（チケット）買って、そして行ったんだもん。私は美空ひばりとあれだけは見に行きたいなと思ってたんだよ、あっちさ。

アサ 誰だ、美空ひばりとほか。

青木 何だっけ、名前、辞めた人だけど。

アサ 辞めた人？ 女の人？

青木 うん。

アサ 都はるみとか？

青木 都はるみ。そうそう。

アサ 当たった。都はるみは確かに、いまやってないね。

青木 都はるみと美空ひばりの歌だけはほしいと思つてた。好きだから、ほら。

アサ これも美空ひばりのテープだな。

りんご 1989年に亡くなつてますね。

アサ もう、30年前だ。

青木 私、声がいいときには、もう本当、大好きで歌うのに、もうもう、話しなくていうちに声出なくなっちゃたよ。

アサ 震災前まではよく歌つてた？

青木 うん、好きだから。

アサ その歌つてたときは、歌のサークルみたいなところに行つてたの？

青木 行かね行かね。そういうのなんて、昔はないよ、集まつて歌を歌うだの。それこそ、

うどん食べてたって、店屋^{みせや}さ入つたって、「あそこの嫁は店屋でうどん食つてた」って言われるぐらいの世のなか。

アサ 狭い、密告されるじゃないけど。

青木 そういう時代だから。それで田んぼのなかだのね、道を歩きながらだね。そういう歌を歌うところなんてないね。部落でやぐら建てたときは盆踊りだから、世の歌は歌わないから、カラオケなんかやんないから。

アサ じゃあ、美空ひばりとかその都はるみとか、自分が好きな人の歌を覚えて歌うっていうのは、人前でっていうよりは、自分の家でちよつと練習してみたりっていう感じだったの？ 歌詞見ながら。

青木 うん、見ながらな。んだんだ。

アサ そっか、そっか。

青木 歌が好きだから。

（青木さんの歌う『愛燦燦』が流れ、続いて美空ひばり『愛燦燦』が流れる）

エピソード8

青木二美子さんの声が蘇るとき

アサ 下神白団地には、最初から入られてるんですか？

青木 一番最初の抽選が当たったの。ああ、こさ入ってから歩くことないなと思つて。ここは田園と違って、眺めつてコンクリでしょ。こっち見たつてコンクリだ。どこ見たつて（笑）。

アサ 見るところないからね。

青木 コンクリだから、こうやつて。

アサ 人工物ばかりだつて、周りがね。

詩織 ああ、そうだね。

青木 朝起きてな、こうやつて戸開けてみたつて、ここコンクリじゃ、こっちに出てみたつてコンクリで（笑）。

アサ 集合住宅だもんね。

青木 うん、遠く見れば山はあつけども。そんな感じだったね。

アサ 初めてですもんね、そういう環境でつていうの。

青木 そうやつて、だんだんだんだん落ち着かせてきたんだべ、みんな。

アサ 慣れさせてきたつてことね。

青木 慣れさせてきた。でも、いらんねえんだから、しょうがねえな。

アサ 歌も歌わなくなつたつていう話をしていましたよね。

青木 今日は出たの、声。びっくりした。

詩織 ね、声出てましたね。

アサ 出た、出た。

青木 ね、びっくりした。

アサ すごい出た、高い声も出たし。

青木 いままで声なんか出なかったのに、みんなに聴かせたくて、だから。

アサ それは嬉しいわ（笑）。よかった、よかった。

青木 全然出なかったの。こさ来て習つて、知つてる歌出てきたから一緒に歌うべつて思つたら、歌えなかったの。

アサ 人がいるつていうのは結構大きいのかもね。

青木 え？

アサ まわりに人がいるつていうことつていうのは、ひよつとしたらでかい……。誰かがいると、こうやつてしゃべつてたりもするし、声つて、ひよつとしたらつられて出るのかなみたいな。

ひとりで歌つてもね、こういうラジカセ相手では、出るかもしれないけれども、あんまりバーツと出てくる感じじゃないのになつて。

青木 今日みたいに声なんか出ないの。

アサ それは、すごい嬉しい。よかった。

青木 出ないんだから、全然出なかったの。本当に。テレビに、ああ、知つてる歌出てきたから一緒に歌うかなつて思つたつて、高いところなんて全然出ない。びっくりした。美空ひばりの高いところまで出て。

アサ よかった、よかった。本当によかった。

青木 びっくりした。具合悪くなつてたけど、具合悪いの治つちやつたみたい。

一同（笑）。

アサ それだったらよかった。

エンディング

アサ 『ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまこへ』、第6集「歌とともにある人生」をお届けしました。いかがだったでしょうか？

今回は、歌によって人生を救われた、変わった、そういう象徴的な体験をしてもらった方々に、お話を伺いたいという思い

がありました。それが、小泉いみ子さんと高田國男さんと青木二美子さんの3名だったんです。

ほかの住民さんも「私もこういうふう音楽を聴いて救われたな」とか「あのとき助けられたな」って思い出をたくさん持たれている方が、いるんじゃないかと思います。なので、みなさんの話を引き続き聞けたらなと思っております。

音楽ってやっぱりすごく不思議で、ひとりにとつても大切な歌がですね、誰か別の人にとつてもとても大事な歌だったりして。でも、もちろんそれぞれ別々の人生を歩んできてるので、違う思い出を持つてらっしゃるんですね。

たとえば、今回青木二美子さんがリクエストしてくださった『愛燦燦』は、実は以前、6号棟で浪江町ご出身の高田マツイさんのご自宅に伺ってお話を聞いた際も、『愛燦燦』の思い出を聞かせていただきました。幾十にもいろんな思い出が積み重なって、一曲の歌って存在してるんだと、改めて感じるわけです。

下神白垠地にはたくさんの方々が住まわれています、やっぱり一人ひとり、みなさん別々の人生があるんですね。こんな当たり前のことを、僕自身、いつも一人ひとりのお声を聞く度に、とても強く実感します。

これから寒い季節になっていきますね。くれぐれもお身体ご自愛いただき、元気な姿でこれからも交流を続けさせていただけ

たら幸いです。いつも通り、リクエストカードを挟んでおりますので、集会場の前の黄色いポスト、あるいは僕らにエピソードと
思い出の曲を書いて、直接お渡しください。
それでは、『ラジオ下神白』第6集、これにて終わりたいと思います。お届けしたのは、アサダワタルと榊裕美と鈴木詩織でした。それでは、また。ありがとうございました。



4町（富岡・大熊・浪江・双葉）の2019年

双葉町、大熊町でも避難指示解除準備区域の解除が部分的、段階的に進みました。
それぞれのまちの姿は、徐々に変わりつつあります。

浪江町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 1,189人
21,434人 避難者 20,298人

- 5月26日 交流・情報発信拠点施設の安全祈願祭及び、起工式が行われた
- 10月25日 浪江町水産業共同利用施設の落成式が開催
- 11月23日 震災後、町内での開催が3回目となる「復興なみえ町十日市祭」が開催・24日

双葉町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 —
7,140人 避難者 6,853人

- 2月9日 中野地区にて東日本大震災・原子力アーカイブ拠点施設の安全祈願祭及び、起工式が開催
- 3月28日 復興まちづくりを具体的に推進するため一般社団法人ふたばプロジェクトが設立
- 4月16日 中野地区にて産業交流センターが起工
- 12月26日 令和2年3月4日午前0時に避難指示解除準備区域（中野・中浜・両竹地区）等の解除及び、特定復興再生拠点区域の立入規制緩和に合意

大熊町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 129人
11,505人 避難者 10,184人

- 3月20日 大熊町第二次復興計画を改訂
- 4月10日 居住制限区域の大川原地区、避難指示解除準備区域の中屋敷地区の避難指示が解除

富岡町

震災時の住民登録人口 ▶ 居住者 1,177人
15,960人 避難者 11,565人

- 4月3日 認定こども園「にこにここども園」が開園^{*1}
- 5月25日 町立小中学校合同運動会開催、町内での運動会は9年ぶり^{*2}
- 7月26日 富岡漁港の漁船帰港式と漁港施設の使用開始式が開催^{*3}

※震災時の住民登録人口は、『ふくしま復興ステーション』『平成23年3月11日現在の住民登録人口』を参照。居住者数は、浪江町は住民登録の有無を問わない数、大熊町・富岡町は住民票ありの数。各自治体のウェブサイト等を参照（浪江町・双葉町は2019年12月31日現在、大熊町・富岡町は2019年12月1日現在）。

※2019年の出来事については、浪江町は自治体のウェブサイト（2019年5月29日、同年11月7日、同年11月29日の記事）を、大熊町は自治体のウェブサイト（2019年3月20日、同年4月5日）をそれぞれ参照。

双葉町は『双葉町復興ポータルサイト』『2019年の町の動き』を参照。

富岡町の*1は『河北新報』（2019年4月4日）、*2は『福島民友新聞』（2019年5月26日）、*3は『広報とみおか』（2019年9月号P.2-3）をそれぞれ参照。すべて最終閲覧日は、2020年2月26日。

下神白団地の2019年

昨年から引き続き、どの棟も居住世帯数は減少。台風19号で被害を受けた方々が一時的に入居する措置が取られたことで、子供のいる家族連れの姿も見られるようになりました。

居住世帯

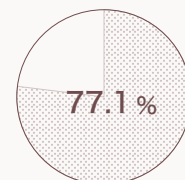
合計 153世帯
前年比 -13世帯

入居率

76.5%

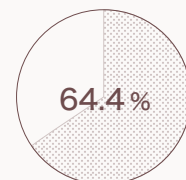
1号棟

27世帯
前年比 -1世帯



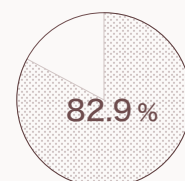
2号棟

29世帯
前年比 -4世帯



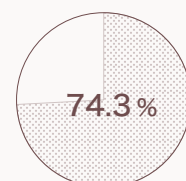
3号棟

29世帯
前年比 -2世帯



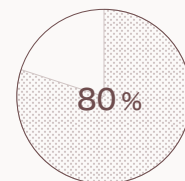
4号棟

26世帯
前年比 -3世帯



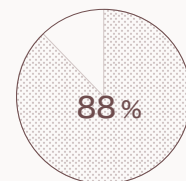
5号棟

20世帯
前年比 -3世帯



6号棟

22世帯
前年と同数



※「県営住宅下神白団地入居者世帯数・世帯率推移」（下神白団地自治会、2019年4月）



『ラジオ下神白』の歩み

2017 - 2019

下神白団地に通うようになって、3年が経ちました。
ラジオを通してだけでなく、集会所で行われているカフェやカラオケ、
住民のみなさんの生活や思い出の場所にも
お邪魔させていただいています。

2017年

6月 第1集「常磐ハワイアンセンターの思い出など」リリース P4

7月 渡部茂子さんの浪江町ツアー

茂子さんのお誘いで、浪江町のご自宅と
そのお隣にある喫茶トレド、請戸漁港な
どを案内していただきました。商店街に
あったという映画館は、解体後。思い出
をきっかけに、初めて団地の外へ。



リクエストポストが完成！

元大工の平子力也さんと横山晴男さん
が、『ラジオ下神白』のリクエストポスト
をつくってくださいました！集会所の入り
口に設置させていただくことに。



10月 横山けい子さん宅にて
ホームパーティ

料理好きなけい子さん宅にお呼ばれし
て、特製のミートソースパスタなどをいた
だきました。みんなでけい子さんの大好
きな赤ワインを飲んで、乾杯！



11月 第2集「あの頃の仕事 家族の風景」リリース P12

復興団地対抗カラオケ大会

市内の県営復興公営住宅・10団地対抗
のカラオケ大会が、いわき芸術文化交
流館アリオスで開催され、アサダワタルが
審査員として参加(主催:NPO法人みん
ぷく)。下神白団地の代表・門馬文雄さん
の歌声は圧巻でした。

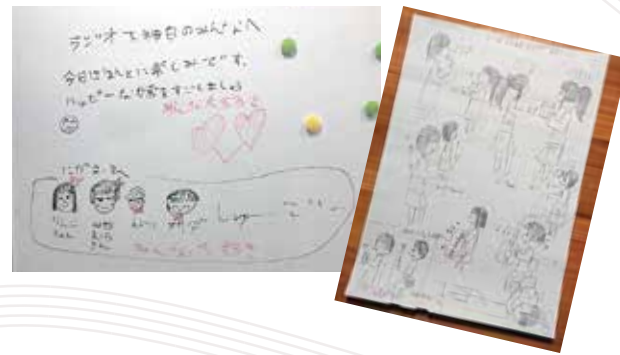


2018年

3月 第3集「2017年 リクエスト総集編」リリース P24

永崎団地の小学生との出会い

お隣の永崎団地に小名浜高校のフラダン
スを見に行ったところ、小学生の軍団と
出会い、そのうちのひとりがCDの封筒づ
くりや封入作業、配布を手伝ってくれる
ように。「次はいつ来るの?」と、リクエ
ストポストを使った手紙のやりとりがはじ
まりました。



6月 喫茶トレドの解体、
高原タケ子さんの家のお墓探し

喫茶トレドが解体されるという話を聞き、
その姿を目に焼きつけに浪江町へ。その
帰りに、「お墓参りをしたいけれど、場所
を忘れてしまった」と語るタケ子さんの家
のお墓を探しました。



8月 第4集「海の上で捕まえたあの風景」リリース P26

12月 「REC⇒PLAY ある復興団地の「声(風景)」をなぞる
ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまここへの報奏会」 P40

下神白団地クリスマス会

佐山弘明さんに声をかけていただき、朝
からみんなでつくった豚汁やケーキを食
べながら、リクエスト曲を流す「公開ラジ
オ」を開催。何度か自然と歌声が。下絵を
手伝わせていただいたイルミネーション
装飾の点灯式も。



エンディング

声をなぞるから声を奏でるへ

2019年

1月 第5集「変化と連なり さよならのかわりに」リリース P56

2月 横山けい子さん
& 高原タケ子さん

『青い山脈』が大好きなおふたりが、ひよんなことから出会って、お宅を訪問しあったという話を聞き、お茶会を開催。おしゃべりをして、最後にアサダワタルがギターで『青い山脈』の弾き語りを。別れ際には、四苦八苦しながら電話番号の交換をしました。



8月 伴奏型支援バンド(BSB)結成！

遠く離れた土地で、音楽を通じて一人ひとりの「私」と出会い、かかわっていくことは可能なのだろうか——。住民さんのメモリーソングのバック演奏を行うバンドが結成！ 面接を行い、実際に下神白団地に足を運び、都内のスタジオで練習。住民さんの合唱を支えるBSBを目指します。



11月 第6集「歌とともにある人生」リリース P72

12月 下神白団地クリスマス会

佐山さんに再び声をかけていただき、「クリスマス歌声喫茶」を永崎団地集会所で開催し、住民さんの思い出の曲をBSBの生演奏でお届け。これまでCDに登場していただいた住民さんにステージで話や歌声を披露していただいたり、みんなで『青い山脈』を大合唱したり。踊り出す方もいらっやあって、賑やかな1時間半でした。



「ただそれだけ」のことから広がる関係性

榊 裕美 一般社団法人 Teco 地域復興コーディネーター

「ああ、ラジオのあれね」「アサダさんがやってるやつね」。『ラジオ下神白』のCD制作にあたって何らかのお願いをするとき、住民のみなさんが私たちの活動を理解しようとして出てくるのは、だいたいそんな言葉だ。『ラジオ下神白』という名前を正しく口にする方はとても少ない。もしかしたら、住民のみなさんにとってプロジェクト自体はたいして重要ではないのかもしれないと思う。

そもそも私たちは、炊き出しやイベントなど、わかりやすく必要なことを行っているわけではない。普段やっていることと言えば、住民さんのお宅に伺い、お茶をすすり、出された漬物やクッキーをほおばりながら、最近のよもやま話や思い出に耳を傾ける。そして時折、その当時に流れていた流行歌や思い出に残っている音楽にまつわるお話を伺う。そんなことの繰り返し。ただそれだけのことだ。けれども「ただそれだけ」のことが、時間を重ねるうちにそれ以上の意味をもつようになってきたと感ずることが、最近になって増えてきた。

「一歩隣にズレて見えてくること」

何が変わったのかと聞かれても、やっていることは2017年からほぼ変わっていない。

お話を伺って、それをラジオ風に編集して、一人ひとりにその番組が収録されたCDを手渡していく。その行為は相変わらずだが、CDを受け取る住民さんの反応や日頃のやりとりが、3年前とはまったく違うものに感じるのは気のせいではないと思っている。

ピンポンを押して、インターホン越しに「こんにちは！ラジオ下神白です。住民さんのお話をラジオ風にまとめたCDをみなさんにお渡ししています」と声をかけると、「結構です」と言われることも多かったが、いまでは「ああ、

にズレて、関係性が広がっていくということを経験している。

住民さんとの「出会い直し」

私は最近、下神白団地がある小名浜から車で25キロメートル北に走った港町、久之浜で魚屋をはじめた。そのためテレビや新聞など市内各所で宣伝され、たまたまニュースを目にした住民さんから、「りんごちゃん、お魚屋さんはじめたんだって？」と声をかけられることが増えてきた。団地でお世話になっている住民さんだけでなく、既に団地を離れて別の場所で生活をしている方でもお店に足を運んでくれている。

団地の外で、プロジェクトとはまったく関係のない文脈で住民さんと出会うことは、とても新鮮だった。魚屋で出会うのはひとりのお客さんであり、これまで「住民さん」として交流していた彼らとは、また別の存在のように感じた。

ましてや既に団地を離れた「元住民さん」に至っては、お店の仲間に紹介するときに、「下神白団地に住んでいた元住民の〇〇さん」と呼ぶほかになく、「下神白団地」「住民」という言葉は単なる肩書でしかなかった。そしてそのとき改めて、これまで私は「住民」というフィルターを通じて彼らと接していたことに気づいたのである。『ラジオ下神白』では、「被災者」としての枠を超えて、立場の異なる個人との出会い直しをこころがけていたにもかかわらず。

下神白団地に住んでいる方々は、確かに震災がきっかけでここにやってきたことは間違いない。けれども、それ以前に彼らにはこれまで歩んできた人生があり、いまここにいる現在も含めて、それぞれの「人生」がある。

あれね」という反応が返ってくる。玄関をあけて「ご苦労さん」という労いの言葉をかけてもらえるようにもなってきた。そして、次第に親しくなっていくと「まあ、とりあえず」と言って家のなかに招き入れてくれるようにまでなる。ホームパーティーに招待されたり、解体が予定されているご自宅に案内いただいたりと、予期せぬ場面に立ち会うこともあった。そして、そうした出来事がラジオ収録時には聞けなかった思いもよらぬエピソードを引き出し、住民さんのまた別の一面と出会わせてもらった。

2019年秋に下神白団地から退去した渡部茂子さんが、『ラジオ下神白』第1集に登場いただいた理由は、「自治会の役員だから」というものだった。そこからだんと親しくなり、「浪江町にある自宅を見に行きませんか？」と声をかけていただき、番組のなかに登場したご自宅や喫茶トレド、請戸漁港などを案内いただいた。

そんなご縁もあつて、CD配布の際にご自宅を訪ねると家のなかに入れてくださり、茂子さんが番組のなかで話されていた旦那さんやお義母さんと「はじめまして」の挨拶をした。そして、お手製の漬物や、隣の住民さんからもらった梅でつくった梅ジュースをいただいた。

私が『ラジオ下神白』に参加したのは第1集がリリースされた後なので、収録には立ち会えず、茂子さんのお話はCDデッキを通して聴いたにすぎなかった。けれども、その後、お話しされていた人物に出会ったり、思い出の場所を実際に訪れたりすることで耳から聴いた話が少しずつ立体的になっていく。そうやって「母として」「妻として」「嫁として」生きるさまざまな一面に触れるなかで、「住民さん」として接していた関係が、「茂子さん」へと変わっていった。

彼女彼女らとは、繰り返ししなかで生じた予期せぬ出来事によって、プロジェクトで生まれた関係からまた一歩隣

彼らは団地に住んでいる「住民さん」でもあり、魚屋に魚を買いに行く「お客さん」でもあり、行く先々によって呼ばれ方が異なる。それは当たり前のことなのだが、なぜだかそのことに団地のなかでは気づくことができなかった。呼び名を固定したり、変えたりしているのは私たちで、彼らは何ら変わらず普段通りの生活を送っているだけだ。私にも『ラジオ下神白』の事務局や魚屋としての顔があるように、一人ひとりのなかにさまざまな顔がある。それぞれが歩んできた背景は異なるが、いま、私たちはいわきという同じ場所に暮らす、同じ生活者なのである。

こうした住民さんとの「出会い直し」が、団地の外へとゆるやかに広がって、これからもプロジェクトの意味をも変えていくのだろうと思う。



榊 裕美 (りんご)

1992年、青森県八戸市出身。埼玉大学教育学部卒、埼玉大学大学院教育学研究科学校教育専攻修士課程退学。大学在学中に東日本大震災のボランティアとしていわき市へ。下神白団地で行われた『イトナミニティ』プログラムに参加したことをきっかけに、いわき市に移住。2017年から特定非営利活動法人Wunder groundのスタッフとして、『ラジオ下神白』の事務局を務める。2019年4月に、仲間と一緒に『一般社団法人Teco』を設立。また、いわき市内の漁業者と協働して漁業再生のプロジェクトに取り組み、2020年2月には市内久之浜町に魚屋『おさかなひろばはま水』をオープンした。

「震災」と距離を置くこと

鈴木詩織 一般社団法人Teco 地域復興コーディネーター

私が県営の復興公営住宅・下神白団地に初めて訪れたのは約5年前、団地ができ、入居がはじまった頃である。

当時私は、前職の『NPO法人みんぶく』の職員として、団地内外のコミュニティづくりに従事していた。この団地にかかわるようになった当初は、住民の方々の表情は暗く、悲観的な話を聞くことが多かった。警戒心も強く、訪問した際もなかなか玄関のドアを開けてもらえなかった。震災の傷が癒えず、団地全体が深い悲しみに包まれていて、ブラックホールのような大きくて黒いものに吸い込まれそうになった感覚をいまでも覚えている。

しかし、集える居場所ができ、自分の存在意義を感じたときに、少しずつ明るく、その人らしくなっていく過程を側で見守らせていただいた、貴重な時間でもあった。

そして、復興公営住宅が増えていくのに伴って、私は新しくできたほかの団地の担当になり、下神白団地とのかわりはだんだんと薄くなっていた。

近い関係になる

再び下神白団地にかかわるようになったのは、2019年4月。私は、『一般社団法人Teco』を立ち上げて、『ラジオ下神白』の事務局メンバーとなった。

活動を通してまず驚いたのが、住民さんとアサダワタルさん、事務局メンバーのりんごちゃんとの距離感だ。取材のために住民さんのお宅にお邪魔すると、お手製のご飯やお菓子を用意してくれていて、それを食べながら話に耳を傾ける。ときには住民さんのお誕生日会を開き、一緒にお酒を飲みながら互いにプライベートな話をするのである。

前職では団地全体を対象としたコミュニティづくりを行っていたため、一人ひとりと深くかわかることは難しかった。ましてや、コミュニティ交流員という立場上、一

んでいた本来の自分に出会う機会になっているのではないだろうか。そして、それをラジオCDというかたちで誰かに伝えることは、震災によって生まれた孤独感や喪失感が和らぎ、心身のケアになっているのではないかと思う。

そして、その話を受け取る側である私は、自分との共通点や相手の意外な面を知り、「話に出てきた人に会ってみたい」「もっと○○さんのことを知りたい」という気持ちを駆り立てられるのだ。

同じようにCDを聴いた住民さんは、「○○さんってこんな方だったのね」「同じ棟にこんな人がいるんだ！ 集会所にも出てきているのかな」と仰っていた。話を聞かせてくれた人とながる点がバラまかれ、それが誰かと結ばれていく。そうやって、その人を取り巻くコミュニティが深まったり、広がったりしていくのではないかと思う。

その人を見守る「目と耳」

現在、下神白団地は高齢化が進んでいるとともに、退去者があとを絶たない。これは下神白団地だけではなく、ほとんどの復興公営住宅が抱えている問題のひとつである。

ご高齢の方や独居の方が住まうなかで、必ず必要となってくるのは、その人を見守る「目と耳」だ。各自自治体で実施されている高齢者福祉サービス等はあるが、それだけでは不十分である。同じ団地や同じ棟で日頃から生活をともにする人同士が、互いに支え合うことが重要となってくる。

また、高齢者と聞くと「福祉」が連想されがちだが、そもそも「福祉」という言葉にはすべての人の「幸福」という意味が含まれている。幸福の考え方や感じ方は人それぞれ異なり、幸福かそうでないかは他人が判断することではない。しかし私は、下神白団地で出会った方が、「その人が考える幸福感」に満ち溢れ、この地に住まう喜びを感じ

線を引いて平等な付き合いをする必要があり、夜に住民さんのお宅を訪れ、お酒やご飯を一緒にすることはできなかった。こうした状況に衝撃を感じながらも、以前から憧れていた関係に混ざることができた嬉しさを感じた。

住民さんは、私たちが訪ねてくることを楽しみにしていて、みなさん躊躇することなく、玄関のドアを開けて、家にかけてくださる。そして、話が止まらなくなるくらい、さまざまなことを教えてくださった。それは嬉しい記憶だけではなく、哀しい記憶も含めて。自分の過去や震災の記憶を掘り起こし、他者へ話すのは容易なことではないだろう。時間をかけて近い関係になったからこそ、本音や過去の出来事、こころの奥底にある思いを聞かせていただくことができたのだろうと強く感じた。

本来の自分に出会う

活動に参加をしていると、住民さんがいかにころをひらいているのが、ひしひしと伝わってくる。信頼関係を築く難しさは前職で痛感しており、ここまでの関係になるまでに、どれだけ一人ひとりと時間をともにしてきたのだろう。

一枚のCDをつくるには、住民さんのもとを何度も訪ねて、話を伺う。顔を合わせる時間が増えていくと、表情も明るくなり、話の内容も広がっていく。話は幼少期まで遡り、昔を懐かしみながら、故郷を思い出しながら、生き生きと話す様子を見ていると、「被災者」という名前から少し距離を置くことができている瞬間なのだと感じた。

住民さんには全員、震災前の生活があった。それは当たり前なのだが、どうしても彼らは「被災者」「避難者」という名前で括られてしまう。震災とは一度距離を置き、自分の人生にこころを傾ける行為は、震災によってしまい込

てくれたら嬉しいなと思う。このラジオ下神白を通じて、何かお手伝いができれば幸いだ。

東日本大震災から10年目を迎え、もうすぐあたたかい春が訪れる。春風を感じ、ラジオを通じてまた新しくつながるだろう出会いに思いを馳せる。この団地にかかわれていることに幸せを感じながら。



鈴木詩織 (しおちゃん)

1991年、福島県いわき市生まれ。動物看護師、動物介在福祉士、ホームヘルパー2級。動物病院、福祉施設での勤務を得て、2015～2019年『NPO法人みんぶく』のコミュニティ交流員として、復興公営住宅・下神白団地の設立時より、コミュニティ支援に従事。2019年4月、同じ志を持つ仲間4名とともに、『一般社団法人Teco』を設立。復興公営団地と地域とのコミュニティづくりや、台風19号等の被災者のコミュニティ支援を行うとともに、地域の課題解決に向けた活動を行っている。

高原タケ子さんという存在、私たちのこれから

アサダワタル 文化活動家／『ラジオ下神白』ディレクター

下神白団地に通って3年数か月が経った。ここでは、現在制作中の第7集の主人公であり、本ドキュメントではその語りを収録できなかった、高原タケ子さんの存在に触りたい。そして、最後に団地の外へと飛び出し、再び団地へと還っていくプロジェクトの新たな展開についても綴る。

高原タケ子さんとの出会い

4号棟在住で浪江町出身、御年95歳の高原タケ子さん。出会いは、第1集「常磐ハワイアンセンターの思い出など」を配布した2017年6月だった。廊下に出てお隣さんと立ち話をしていたタケ子さんに「ラジオCD、受け取ってもらえませんか？」とお声がけたところ、「いやいや、機械もないからいいよ」と断られた。「せめてジャケットだけでも」とお渡ししたら、その数日後にジャケットに挟んであったリクエストカードを投函してくれたのだ。そこにはこう書かれていた。

曲名 別れのブルース

歌手・グループ名 淡谷のり子

エピソード Aさんが中学生 私は女学生 通学路で出会

この歌が大好きと云ひ 何度も唄って居ました

77年前の思い出の歌です

Aさんは79才で亡くなりました。

私の夫も去年他界私は一人暮して94才です

早速タケ子さん限定のラジオCDを制作し、お手紙を添えて郵便受けに投函したら、今度は「団地にはいつおいでになっていきますか？ ぜひお逢いしたくお待ちしております」というお手紙をいただいた。こうして、ラジカセをかついでタケ子さん宅通いがはじまった。

より強めてくれた。

「被災者」では括りきれない
「私」という存在

タケ子さんは基本的に毎回同じ話をする。でも、いつも微妙に違う。同じ「三羽ガラス」のエピソードのように聞こえて「その話は今回初めて聞いた」というニュートピックが必ずあるのだ。そしてときおりこちらも驚くほどに感情があらわになる瞬間がある。戦後に嫁入りをして夫、姑や小姑との関係性のなかで自分がいかに大変な思いをしたかという話に向かう際は、当時に戻ったかのように険しい顔になり感情が吐き出される。でも、いつだって実家のお兄さんが「（嫁がせて）大変な思いをさせて悪かったな」と労ってくれたこと、兄や姉たちが吹くハーモニカが上手でいつも音楽が身近にある生活だったことなどを語り、聞けば聞くほど話は仔細にわたっていった。

タケ子さんとの対話は、ときにそんな感情の揺れに出会うこともあるのだが、実はあまり「震災」の話は登場しない。出てくることもあるが、気づけば女学校時代の楽しい思い出や、嫁入り後の厳しい生活の話題に戻っていく。それはどうも震災の話を意図的に避けているわけでもなく、自然とそういう会話の流れになっていつているようだ。

しかし、冷静に考えればそれもそうかもしれない。何せ95年も生きてこられたなかで、80代後半に震災を体験している状況だと、その80歳半ばまでの人生の厚みの方に焦点が当たっていく方がむしろ自然なのではないか。

私たち（プロジェクトスタッフと団地住民）は、かの震災があつたからこそ、こんなふうにして出会つており、そもそも住民たちは震災があつたゆえにこの下神白団地で暮らしている。しかし、この「そもそも」は、個人と個人の

その都度いただくのが食べきれないほどのお菓子や飲み物と、手編みの日用品だ。会話の合間合間に「ほら、遠慮しないで食べる」と言われ、残したら「この袋に入れて持って帰りな」と説得される。編み物の技術はすごく、キューピー人形とセットで渡される小さなセーターや帽子やマフラー、魚のかたちをした手にはめるタイプの毛糸のタワシ。座布団や小物入れなどを次々といただいてしまい、いま我が家にはそれらのものがいっぱいだ。

そして、必ず一枚のモノクロ写真を見せてくれる。先ほどの『別れのブルース』のエピソードに出てきたAさん含む女学生時代の仲良し3人グループの写真だ。18歳のときに袴を着て撮影されたこの記念写真。先生からは「おい！三羽ガラス！」と呼ばれていたと笑いながら話してくれる。喧嘩も、互いの家族付き合いも、戦争が終わってからの行く末も、「ぜえーんぶ思い出すんだ」「みんな死んでしまった。私だけしわくちやになって」と、ラジカセから流れる曲と同期しながら、泣き顔とも笑顔ともとれる表情で語られる。

続いて、『旅の夜風』（霧島昇）、『母子船頭唄』（塩まさる）、『踊子』（三浦洸一）という3曲のリクエストもいただくこととなる。私たちはタケ子さんを訪ねる度に、新しいラジオCDを携えて行った。そして『踊子』を持つて行ったときに、タケ子さんは写真に向かってこう言ったのだ。「これで全部そろったよ」と。僕は、これまで音楽と記憶にまつわる活動を各地でやってきたが、これほどまでに「個人が音楽を頼りに、埋もれていた記憶に切実に向き合う姿」に立ち会ったことはなかった。

タケ子さんは私たちが来ない日も、毎日こうして写真を見ながらラジオCDを繰り返し聴いてくれているようだった。こうして、まったく想定外だったヘビースナーク・高原タケ子さんの登場は、『ラジオ下神白』に対する確信を

関係になっていくプロセスにおいて、自明ではなくなっていく。さらに言えば、この対話に音楽をはじめとした「表現的な手立て」が挟まっているゆえに一層、その「自明さ」を越えてゆけるのではないかと感じている。

『ラジオ下神白』は、震災をきっかけにした取り組みだが、その人がそもそも長らく歩んできたこれまでの人生の延長線上で「あの日」をどう迎えたのかという、その「極私的かつそれゆえに多様な人生像」に近づいていくために、「音楽」をそつと置く試みなのではないか。「あの日、何がありましたか？」と取材するよりは、音楽のような一人ひとりの「私」の「感性（的体験）」から入ることができる手立てを通じて、思いも寄らない話に分岐し発展していくことに可能性を感じている。

「被災者」という括りは、相手を一人ひとりの「個人」、さまざまな人生を生きてきた「私」であるという大前提をどこかで忘れさせてくれる（忘れるように仕向ける）レッテルだ。そのレッテルは、どういう人生を歩んできた人がその状況に遭遇してしまったかということを想像する「余白」を奪ってしまいかねない。相手に対する想像の「余白」を担保すること。そのことがこのプロジェクトにおいてとても大切なことだと、タケ子さんという存在から学ばせていただいている。

誰かのリクエストソングが、
別の誰かを支える

タケ子さんとの交流を進めるなか、もう一曲重要な曲が浮かび上がった。それは藤山一郎の『青い山脈』だ。この曲は富岡町出身で2号棟に住む横山けい子さんがリクエストしてくれた曲だ（P17―18）。この曲を聴きながらタケ子さんは、また例の「三羽ガラス」と呼ばれた女学生時代の

ご友人との思い出話を展開した。

とっても印象的だったのが、あるとき、「横山さん」の“『青い山脈』、あれいいなあ」と言うようになったこと。

歌手の名前でなく、その曲をエピソードとともにリクエストしたけい子さん」の“『青い山脈』という言い方に、いつしかなっていたのだ。非常に微妙なニュアンスではあるが、僕はその変化を聞き逃さなかった。誰かが別の誰かにとって「私」の“”としか言いようのない、極私的なエピソードに満ち溢れた曲を受け取る際に、それを受け取ってしまった「私」にとつての記憶もなぜだか支えてもらえる、エンパワメントされるというサイクルがここにはある。

ラジオから生まれたつながりはほかにもあった。タケ子さんのリクエストソングを集会場でかけていた際、ある浪江町出身の住民さんが「タケ子さんはおそらく遠縁にあたる人だ」ということで個別に連絡を取ったという。タケ子さん曰く、親戚だなんて最初は全然わからなかったそうだが。

また、2017年11月に発行した第2集のジャケットの手作業をする際に、第1集の出演者でタケ子さんと同じ棟に住んでいる渡部茂子さんが集会場にタケ子さんを連れてきてくださったことがあった。普段、集会場に現れることがまったくないタケ子さんの姿に、別の住民たちも声をかける姿が見られて、僕はその風景に心底感動した。

なんてことはない。ただそれだけのことかもしれない。でも、誰かの大切な曲が、別の誰かの記憶にも響いてその人を勇気づけ、そのことが小さなきっかけとなって人と人とがつながっていく。それは一見とても地味なことだが、コミュニティの肥やしとしても、確かに何か大切なものを育んでくれているような気がしてならないのだ。

だ。そんな彼ら彼女らに向けて、やってきた取り組みや団地の状況を「報告」する（勉強してもらう）のではなく、住民さんたちの声を「演奏」（その場でナレーションを入れ、DJをし、ギターを弾く）する「感性的な体験」を通じて、この下神白団地、ひいては「被災者（と言われる方々）の日常」に思いを馳せる場をしつらえた。

参加者はラジオCDの断片を何度も聴きながら、実際に私たちプロジェクトメンバーもそれぞれの思い出の楽曲について語り合うこの場限りのラジオに出演し、取材する側にもまわってみる。そのようにして、遠く離れた福島の地の「声」を「なぞってみる」。イベントの最後は、タケ子さんとけい子さんの「声」を聴いたのち、全員で『青い山脈』を合唱したのだった。

見知らぬ土地で誰かが経験してしまったことを、遠く離れた土地にいる「私」は、一体どのように受け取れるのだろうか。これが、このプロジェクトを続けてきたなかで浮かび上がった新たな問いである。もちろん「そんなの受け取れっこない」という意見もあるし、「現地に行かないと駄目だ」という意見も根強くあるだろう。それは否定できない。

しかし、そもそも「表現」というものは、どこまでも相手の感性に訴える方法を愚直に突き詰めながら編まれるものであり、その先に期待されるのは圧倒的な「想像力の獲得」だ。「想像すること」。これはどこの土地にいても、どんな状況であっても、できることだ。できるというよりは、強い言い方になるが、必ず「やらないといけないこと」だと思う。他者が置かれている状況なんてわかり合えないという前提に立ちながらも、力を尽くして相手を想像し続けることは、とても困難だ。テレビやインターネットを見れば、「ああ、あの人たちはいまこんな感じで生活しているのか」とわかることもあるかもしれない。しかし、

「声」を奏でるための「ライブ」へ。
私たちのこれから

2019年2月15日、「青い山脈がつなぐ、タケ子けい子会」をタケ子さんの自宅で行った。95歳と90歳のおふたりが、お互いの住んでいたまちのこと、家族のこと、現在の状況（ふたりとも独居である）を90分にわたり語り合い、そして、最後に僕がカバーしてきた『青い山脈』をギター一本で弾き語りした。一緒に歌ってくださり、そして、泣いてくださった。別にきれいな話にまとめたわけではない。ただ、僕はここに来て「生演奏」の出番がやってきたと感じていたのだ。

20代、いわゆるミュージシャンとしてドラムを叩き、ギターや機材を使ってライブをしてきた僕は、あるときから自分の表現が「場づくり」へと向かっていくなかで、自分が直接演奏する行為に対して、意図的に距離をとってきた。しかし、この『青い山脈』は、いまだからこそ生演奏でやる意味があった。なぜなら、この曲をラジカセで幾度となく記憶を反芻しながら聴いてくれたタケ子さんにとつて、またご自身の東京時代の記憶を重ね合わせてくれたけい子さんにとつて、この出会いのもので『青い山脈』が発酵しているように感じたからだ。その分厚い記憶に支えられて、ようやく「生演奏」が実現できるのではないかと思った。

この生演奏には前段がある。2018年12月に都内で開催した『REC≒PLAY ある復興団地の「声（風景）」をなぞる ラジオ下神白 あのときあのまちの音楽からいまここへの報奏会』である（P40―53）。

この企画に集まった30名ほどの参加者は、東北の復興に興味はあるがなかなか現地に通うことができずかわる方法を知りたいと思っていたり、アート活動をやってきたが復興現場でやることはないか探っている関東近郊の方々

「わかったこととすること」と「わかつらうとし続けること」のあいだには、雲泥（うんでい）の差がある。「表現」が立ち上げてくれる「想像力」を養うことは、すなわち「わかつらうとし続けること」を諦めないことではないだろうか。

『ラジオ下神白』は、現地での訪問とラジオ制作、それに都内での報奏会を経て、関東圏で活動する「音楽と社会活動の接点を深く探りたい」と願うミュージシャンたちによつて結成された「伴奏型支援バンド」の結成へと向かっている。住民一人ひとりの思い出の楽曲のバックバンドを務め、住民に生の「声」で歌っていただく、という取り組みだ。

このバンドの存在は、今後、「現地」とまだ出会いを果たせていない「他者」とのあいだをつなぐ生々しい「メディア」となるだろう。バンドの詳細は、映像のドキュメントや、いわき市の地域包括ケアメディア『igoKu』での連載で触れたい。



アサダワタル

1979年生まれ。音楽をはじめとした「表現」を軸に、福祉施設や復興住宅、小学校や住居やまちなかで、属性に埋もれない「一人ひとりの個性」に着目したコミュニティづくりを行う。2019年より、品川区立障害児者総合支援施設のコミュニティアートディレクター（社会福祉法人愛成会所属）として、障害のある人と地域をつなぐ実践に従事。近著に『住み開き増補版 もう一つのコミュニティづくり』（ちくま文庫）、『ホカツと家族 家族のカタチを探る旅』（平凡社）、『想起の音楽 表現・記憶・コミュニティ』（水曜社）など。東京大学大学院、京都精華大学非常勤講師、博士(学術)。

ラジオ下神白 あのとときあのまちの音楽からいまここへ

ディレクター アサダワタル

アートマネージャー 榎 裕美(一般社団法人Teco)

コーディネーター 鈴木詩織・小沼満貴・鈴木靖子(一般社団法人Teco)、江尻浩二郎

デザイナー 高木市之助

記録 川村庸子、小森はるか

主催 いわき市、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
一般社団法人Teco

ウェブサイト <https://radio-shimokajiro.jimdosite.com>



一般社団法人Teco

福島県いわき市の復興公営住宅のコミュニティ形成支援員を経験した、元「NPO法人みんなぶく」メンバーを中心に設立。2019年より、『ラジオ下神白』事務局。東京電力福島第一原子力発電所事故や台風19号等で被災した方が、再び「この地に住まう喜び」を感じて、安心して暮らせるようになることを目指す。一人ひとりのさまざまなニーズに合わせた居場所づくりや、コミュニティスペースの運営を行っている。

ラジオ下神白 あのとときあのまちの音楽からいまここへ 2017—2019

企画 ラジオ下神白

編集 川村庸子、高橋創一

アートディレクション&デザイン 高木市之助

イラストレーション 高木市之助

反訳 薄木利晃

協力 一般社団法人NOOK

印刷 株式会社グラフィック

発行 2020年3月24日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

＊Tokyo Art Research Lab 研究・開発アセンブル1「厄災に向き合う術としてのアート」の一環として制作されました。

978-4-909894-11-3 C0070

文化でつながる。未来とつながる。

TokyoTokyo
FESTIVAL



ARTS COUNCIL TOKYO